



国際ロータリー第2670・2680地区

15 th **RYLA** SEMINAR

Rotary
Youth
Leadership
Awards
Seminar

1993.3.25～3.28

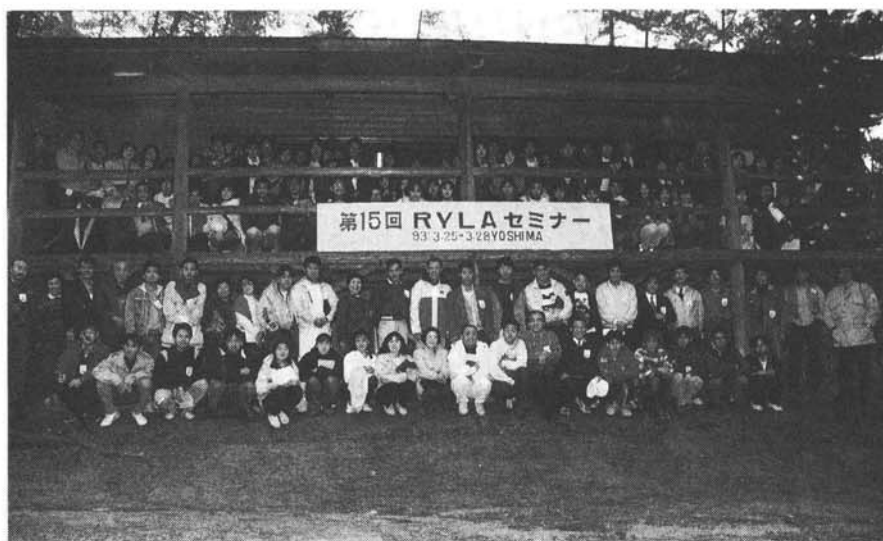
1992～'93年 国際ロータリーのテーマ

Real Happiness is Helping Others

も く じ

開講式	
ごあいさつ	空地啓一…………… 1 阿河正昭…………… 2 大島秀夫…………… 3
オリエンテーション	…………… 4～7
セミナープログラム	…………… 8
講義「共に生きる」	
国際社会における共生	草地賢一…………… 11～21
地域社会における共生	東野洋子…………… 22～32
「共に生きる」まとめ	今井鎮雄…………… 33～39
フォーラム	深川純一…………… 40～53
閉講式	
ごあいさつ	阿河正昭…………… 54 森滋郎…………… 54 大島秀夫…………… 54
参加者感想文	
A 班	…………… 56～63
B 班	…………… 64～71
C 班	…………… 72～78
D 班	…………… 79～85
参加者名簿	…………… 86～89
第15回 RYLA セミナー運営委員会	…………… 90

人と出会い
神と交わり
愛の火の
もえるところ



CAMP 
YOSHIMA

余 島



ごあいさつ



国際ロータリー 第2680地区ガバナー
空地啓一

今日から3泊4日のRYLAセミナーが始まります。

皆さん方は建設的な指導力を養成し、自己の完成を図って、若者のリーダーとなるために、また、他人に対する思いやりと、他人の力になる心構えを養い、実践してゆく善良な市民となるために、ここに集まって来られました。皆さん方はこれから、自分で勉強し、自分で考え、人の指示によってではなく、自分自身で計画して行かねばなりませんし、そうすることを覚えられることでしょう。私達はそういうあなた方を援助するために、すばらしい先生方のお話を聞いて頂くように準備しました。互いに助け合い、情報を交換して、勉強してゆくために、仲間達と夜を徹して話し合うような計画もしています。ベテランカウンセラー達があなた方の相談にのるためには徹夜も辞さない覚悟で待機しております。どうか私達の準備を無にすることなく、また、あなた方を推薦してこられたロータリークラブの期待を裏切らないように、すばらしいリーダーになられるように頑張ってください。

昨年四国で地区大会があった時に、何故この両地区でやるRYLAは20歳以上、19歳では何故いけないかと言う質問があり、たまた

ま来ておられた深川パストガバナーがそれに答えられ、二つの理由を上げられました。私が重要だと思った一つに酒を飲むからという事がありました。私が医師会長をしました少し前に、講演会の後、ディスカッションをしようとしたのですが、なかなか話が出ない。仕方がないのでビールの缶を出しました。それから討議したわけです。シンポジウムも杯を交わしながら、話し合う事があると聞きます。やはりアルコールを飲むと非常に話がしやすいです。酒を飲むと、こういう事をしたいとか、ああいう事は止めておこうと言うような抑制をする所が麻痺をして、好きな事を言うようになる。だから私は3泊4日、皆さん寝食を共にして酒を飲みながら、好きな事を言って過ごして頂きたい。そこに又自分の本当の心の友達が出来ると思います。唯、底無しのロータリアンもありますから、そんな人達と同じように飲んだら寝てしまいます。だから討議の出来るだけの程度でやめておいて頂きたいと思います。

そして僅かではありますが3泊4日の寝食を共にした生活が、あなた方にすばらしい友人を見つける機会になることを祈って私のご挨拶と致します。

ごあいさつ



ご紹介頂きました小豆島を含め、四国4県をこの一年統括しております、ガバナーの阿河と申します。この小豆島に今年もRYLAの春がやってまいりました。この素晴らしい環境の中で、3泊4日をこれからの指導者の皆さんが「共に生きる」というRYLAセミナーを経験されるわけでございます。RYLAのプログラムには学びもありますし、共に語る事、又共に遊ぶこともございます。ディーン、副ディーン或いはカウンセラーのよきご指導の下に4日間のRYLAが本当に皆さんにとって、将来いつまでもあれがよかったという思い出になるような、何かを掴んで帰って頂きたいと念願を致します。

RYLAについて少しご説明しますと、これは「Rotary Youth Leadership Awards」の頭文字で、訳すと「青少年指導者養成講座」というロータリーの青少年奉仕事業の一つであります。我々のR.I. 第2670（四国全県）地区は、毎年R.I. 第2680（兵庫県）地区と共催でこのセミナーを続け、今年で15回目となりました。将来の指導者を目指す若い人達

国際ロータリー 第2670地区ガバナー
阿河正昭

を瀬戸の小島に集めて行うこのプログラムは、その都度新たなる出会いと、感動と、成果を生みながら歴史を重ねて参りました。

この度も本日から4日間の研修が始まりますが、受講される皆さんは、この余島の恵まれた設備と自然環境の中で、まず友達を作ったキャビンタイムでの親睦を楽しんだ翌日から、レベルの高い講義での学習と討論などバラエティに富んだスケジュールで共に生きる日々を満喫していただきたいと存じます。そしてこのライラに参加したことが、これからの皆さんの長い人生のなか、何時までも役立つ価値ある体験として有意義な機会となることを期待致します。

最後に、今回の講義を受け持っていただく3名の先生方に厚く御礼申し上げると共に、主催者としてのお世話をお任せした第2680地区ライラ関係者の皆様及び第2670地区委員の方々、それに何よりも毎年地元としてホストを引き受けていただく小豆島R.C.のご苦勞に心から感謝の意を表して第15回ライラセミナー開講のご挨拶とさせていただきます。



第15回RYLAセミナー
ディーン 大島 秀 夫

今日から4日間、皆さんと一緒にRYLAセミナーをしてまいりたいと思います。

挨拶を兼ねまして、ロータリーの用語なども説明していきます。

先ずディーンと申しますのは、校長と申しますか、その講座の責任者という意味であります。このRYLAセミナーと言うのは正式にはRotary Youth Leadership Awardsと言い、オーストラリアで生まれ、日本でもあちこちで取り上げられているロータリーがサポートして開かれるパイロットプログラムであります。

ロータリーの2670地区と申しますのは、四国4県を統括する地域、2680地区と申しますのは兵庫県一円を統括する地域の事を指します。その責任者として、夫々1年任期のガバナーがいらっしゃいます。又今日は4人の方にお越し頂いておりますが、パストガバナーと言う方がいらっしゃいます。パストガバナーと言うのは過去にガバナーをされた方の事をそう申します。

このRYLAで一番大切なのはカウンセラーシステムをとっている事であり、カウンセラーは寝食共に皆さんと同じキャビンで過ごされ、ロータリーの会員とそこご夫人にご奉仕頂きます。その他RYLAを運営していく為にロータリーの会員で運営委員会が構成され、又事務局その他の方々によって支えられてこのRYLAは開催されております。

ロータリーという団体は一言で申しますならば、奉仕の理想に邁進していく、哲学を追求する団体とでも申しましょうか、夢の奉仕とはなんだろうかと常々学習し、又実際に実践していこうとする団体であります。

RYLAの精神と申しますのは、皆さん色々な学習会で色々ご勉強され、技術的なものはもう既に皆さんご習得されていると思いますが、それプラス心の訓練、鍛練と申しますか、精神性を何とか、こういう我々のサポートするセミナーで求めていきたいと思っております。人生には色々な出来事がございます、いろんなきっかけがあると思えます。そのきっかけというのは何だろう、こういうことを教育用語でモチベーションと言いますが、動機というのはいったい何だろう。心理学の面では自己啓発とも申します。世の為、人の為に飛び出していく為に、いったいどんな精神性を必要とするのか、そういう事を追求していこうというものであります。これを理論づけていくだけではなかなか大変な事ではありますが、その追求していく過程で色々な方との出会いがございます。マニュアルに書いてある通りにいかない、色々なタイプの方と話し合っていく、それを私は心の出会いと表現させていただきます。是非この四日間を楽しく、そして実りあるものにして頂きたいと思いません。

ディーン

大島 秀 夫

先ずテーマの捕らえ方を申しますと、昨年は過去・現在・未来という事で講義をして頂き、そして、次のステップに何を考えるべきかというような展開を期待致しました。今年は少し観点を変えて、共に生きるという問題をテーマに致しました。明日は神戸のPHD協会の総主事であります草地先生に国際社会における共生という問題について講演して頂

きます。又翌日には地域社会における共生という問題を東野先生にして頂きます。そしてその二つの講演を基にして、バズセッション、フォーラムをし、最後にまとめとして、今井パストガバナーにお話をお願いするという予定になっております。これにつきまして、今井先生からお話を伺いたいと思います。



'93 RYLA のねらい

国際ロータリー 第2680 地区パストガバナー

今 井 鎮 雄

もう既に皆さんお気づきになったと思いますが、先ずここに来られる費用はロータリーによって負担されております。同時に先程からのガバナーのご挨拶でもお分かりのように大変雰囲気柔らかいのです。一般のセミナーと少し雰囲気が違うかも知れません。私達はディーンが言われたように、この中でロータリーが世界に対するある理想を求める時に、その理想に向かって若い皆さん達も一緒に共鳴して頂きたい。そういう事を共に考えて頂く為には、みんなで一緒に生活をし、ロータリアンの人とも一緒に寝泊まりして、話し合っていこう。若い人達とロータリアンが一緒になって話し合っていくながら新しい時代の問題を共に考えるという大事な事をやりたい。そういう事でロータリアンも年度末の大変忙しい時に皆さんと一緒にやっっていこうとここに来ております。

今までの例では長い間地域の青少年のリーダーとしてやって来られた方や、高校や中学

の先生をしておられる方、色々な方々が受講生として参加して下さいました。そういった方々はもう技術的な事は十分承知しておられるのにロータリーの私達が何をしようとしているのかというと、それはロータリーの持っている「世界に対する夢」をみんなと一緒に語り合っ、その中でこれが今大事なんだという事があればその事を皆さんも地域でやっておられるリーダーシップに加えて頂きたい。もしロータリアンと交わった事から得たものがあれば、それも一緒にして、私達の次の時代を歩んで頂きたいというのが私達の願いであります。このセミナーでは皆さんには何の宿題も出しません。得られたものを明日に生かして頂きたいと願うだけであります。

さて、今までの14回では私達は二つの事を思っやってまいりました。その一つはいろいろな分野の専門の先生に来て頂いて、その知識をみんなに分け与えて頂こうというもので、ある種の方向づけをし、昨年は「過去・

現在・未来」にむかって世界がどうなっていくかという事を考えて頂きたいと企画を致しました。又その前には「自分とは何か・私達の住んでいる地域社会とは何か・私達が住んでいる世界とは何か」というような形で問題を整理しながら、皆さんのリーダーシップに役立てて頂きたいと思って企画致しました。今年は少し視点を変え、世界中の人々と一緒に出来る事を大事にしようという事を願っています。この理由は何かといいますと、恐らく皆さんはもう気がついておられると思いますが、あの1985年にペレストロイカというのがソビエトで起こりました。ゴルバチョフという人が今までの国の在り方をすっかり違う形にしようと、ペレストロイカが契機となって、あっという間に世界の仕組みが変わりました。これまではソビエトという大きな国と、アメリカというスーパーパワーとが緊張の関係にあってその冷戦の中で、世界が動いておりました。その中で私達は平和の問題を考えたり、世界の経済の問題を考えていたのです。ところがそれは85年に音をたてて崩れるだけじゃなくて、1989年から昨年位までの事を考えると、恐らく人類の歴史の中で現代社会の最も大きな変化があったという事は皆さんご承知の事と思います。それは今までと同じような事ではやっていけない時代が来てしまったという事です。4年程前の事です。世界の問題を救う為はどうしたらよいかという時に、ある人がこんな事を言いました。「砂漠がどんどん広がっていくけれども、あの砂漠を潤す為には北極の氷を切って大きな船に引っ張らせて、アフリカの沖に浮かせておいて、その氷が溶けた水でアフリカの砂漠を潤し、緑にする事が出来る。」又「電力が必要ならヒマラヤの雪を解かし、その水で電力を起こすならば、多くの電力を供給する事が出来る。」と20兆円位のお金のかかる大きなプロジェクトを提案し、その20兆円のお金は世界の国々が軍事費を削ってやれば皆が平和になって貧

しい国がなくなると言いました。そこで日本の経済界の人に意見を聞くと「なるほどそれはいいな、やったらいい。」と言いました。ところが日本の政治家に言うと、政治家は「それはいいな。しかしそうしたら日本はいくら儲かるか?」と言いました。その時の日本の政治家の視点は日本の国がいくら儲かるかという事だけであって、これは笑うに笑えない喜劇であります。そういうような事は色んな形で続いているのです。しかし、そうであってはなくなってきた。もっと大きな時代の変化が起こって来た時にそれではどうしたらいいのかというと、途上国の人達とも一緒に生きなければならない、私達が一緒に生きる社会を作り上げなければ、これからの新しい時代の人間というもの生きていけなくなったという事です。そのギリギリに迫っている事を誰がどのように企画するのか。殊に日本は色んな事で世界から問題を投げかけられております。このような時、私達はそれを本当に自分達の心の中にある知性として受け止めているか? 実は必ずしもそうとは言えないのです。日本人は金で済ませる事が出来れば金で済ませているじゃないか、本当に大事な事はみんな避けて通っているじゃないか。ついこの間アムネスティ・インターナショナルが、日本では難民の人達を他の国と同じ状況で引き取らないという非難を発表致しました。日本の側から見れば、日本そのものが次第に変質していく事にもなりかねないという色んな事情もありますが、この事も忘れられているわけではありません。しかし基本的に言うと世界の人達が一緒に生きようとしている時に、日本だけは日本人だけで生きようとしていると言われてもしょうがないように思えます。世界がどうしたら一緒に生きられるのかと真剣に考えている時に、むこうの違いやこっちの違いを乗り越えて、共に生きる社会を作る事の為に私達、特にみなさんのような若い人達が新しい時代に応じて視点を定め

直して頂かないと、これからの若者達や子供達がそういう問題に対応出来るようにうまく育たないのじゃないかと思えます。ご存知のように、文部省は子供達に大きな改革をしようとしております。その一つは週五日制の問題であります。週五日という事には色んな論議がありました。移行の過程での現段階ではなんとかうまくやっているというのが今の評価です。週五日制への移行がうまくいっているというのは、カリキュラムの編成とか、子供達があとの一日をどうして過ごすかという事について心配していた事がうまくいっているというだけで、週五日制が問いかけている問題を解決しているとは思えません。もう一つは文部省が業者テストをやめると言い出し、そして偏差値信奉を打ち破ろうと努力を始めました。一方では学生達は偏差値というものがあったら、どこに行ったらいいのかと戸惑いの問題を持っている事も事実です。色んな問題が起こっているけれども、文部省は読み書き、ソロバンをやって上の学校に行く事だけが子供の目的ではないという事、もっと大きな変革を心の中に決めながら、こういう一連の問題を出しました。週五日制、業者テストの廃止、偏差値信奉の打破、こういう荒療治を含めて私達は真剣に考えなくてはなりません。同じ事が大学がすっかり変わって来たという事にも言えます。大学は今までと違って大学の設置基準がすっかり変わってまいりました。大学が自分でこういう目的の為に、こういう教育をしようと、目的を定めてカリキュラムを決め、それに必要な先生達を揃え、その準備を文部省に言えばその大学が認められる事になります。これは今までとは全く違ったやり方です。その結果、大学それ自体が今、急激に変わろうとしています。私達が知らなかったような大学のコースが沢山出来ました。神戸大学の例を上げれば、教育学部、教養学部といった学部が、国際文化学部、人間発達学部と一見何を勉強するの

かよく分からないような学部に変わりました。それほど変化して来ているものを我々を含め、皆さん方はどこまでそれを自覚出来ているでしょうか。

ロータリーは1905年にシカゴに生まれました。1905年当時の荒涼としたシカゴで寂しい思いを持つ人達が集まって出来たのがロータリーであり、それは仲良しクラブの域を出ませんでした。そしてロータリーではクラブのメンバーがクラブの中で仲よくし、お互いが励まし合い、心を和ませながら又、社会の中で働くという事をやってまいりました。その後色んな試行錯誤のうちに、ロータリーの哲学というものが生み出されてまいりましたが、その中の一つに自分達の職業を大事にしよう、そしてその事によって社会に役立てようと、職業奉仕という理念を生み出し、その実践の為にロータリアン一人一人が努力をしてまいりました。それから90年近くたった今、ロータリーは世界の中の良心として、世界がもう一度一つになれるだろうかを考え、そしてその事の為に奉仕をする団体でありたいと数年前から苦労を重ねております。この私達の住む地球を守ろうというのが私達の願いであります。その前には世界の平和と理解をロータリーを通してしようではないかという事をテーマにしてまいりました。今年のテーマは「まことの幸福は人助けから」人と人が一緒に生きるということが、人間一人一人の幸福につながるのだという事をテーマにしてまいりました。私達は世界の人達が一緒に生きるという事はどうしたらよいかと考えながら今ロータリアンは色んな事をしております。その事を青年の皆さん達に分かって頂きたい。本当に私達だけでは駄目なのです。若いあなた方が真剣にその事を考えて世界と一緒に生きてゆく世界を作らないと21世紀を迎える迄に世界はなくなってしまうかもしれないのです。世界がなくなるという事を真剣に考えるならば、もう一度人間は正気に戻って考えようという

事が今強く叫ばれています。その事を皆さんにお伝えして、是非他の人達と一緒に生きるという事はどういう事なのか？今まで私達は何故そういう事を理解しなかったのかと考えながらみんなと一緒にしばらくの時を過ごしていきたい。

ロータリーはあなた方が青少年の指導者としてその経験を世界の人達と一緒に分かち合っ
て頂きたいという一つの理想を持ってこのセミナーを企画致しました。ロータリーは世界に於ける理想主義の運動であり、人間としての在り方を常に見つめてきた運動であります。だからこんなに沢山のロータリアンが皆さんの為に集まって来ているのです。こんな大人もいるという事、そして若いみなさんに我々

の希望を託しているという事も覚えておいて頂きたいと思います。15年前、私達が最初にこのセミナーを企画した時から、皆さんの良識にゆだねて、細かい生活の規則を決めるのはやめよう、唯話を聞いて、考え、それについて話し合ってもらおうという事のみポイントをおいています。今年来て頂く講師は若い、どちらかといえば私達の仲間のような方です。お二人に夫々の体験を通してお話を
して頂き、皆さんに討議して頂いた後に私が又ここに立たせて頂いて一緒に考えてみたい
と思います。どうぞ皆さん私達がやらなければ誰もやる人がいないという事を考えながらこの四日間を過ごしてください。

ディーン

大 島 秀 夫

このRYLAは心をこめてというか誠実さを求めての祈りでございます。是非キャンパ
タイム、レクリエーションタイム、キャンプ
ファイアー、色んな場を通じて、お互いに受
講生同志或いは我々老党組とも胸襟を開いて
お友達になって頂きたい。私達は色んな事
を経験し、結構人生経験が豊富でございます。
ですからなんの相談を受けても受け止めてい
く人達でございます。そういう点安心をして
話し合い、仲よくやっていって頂きたいと思
います。過去14回の受講生の心に残るレポ
ートが沢山残っております。何の規則もござ
い
ませんが自律という事を大事に考えて頂
きたいと思
います。自律と申しますのは自立では
なく、自分で律する事。これはもう皆さんは
リーダーとして社会的に経験もある方々で
ござ
いますので、これから子供達を指導して
いく上で大切な自主性を重んじ、そして中
での自律をお間違いのないようにして頂
きた

いと思
います。こういう事を大原則に致しま
して、このスケジュールが出来上がって
おります。時間というものはお互いの共有物
です。大切に守っていきたくと思
います。基本的な時間しか定めておりませ
んのでそれに自分が遅れるとみんなに迷
惑がかかるのだと思
いやりの心を養って頂きたいと思
います。アルコールも良識に基づいて、紳
士の世界における酒の飲み方と言うのも
リーダーにとっては大切な事と思
います。以上老婆心ながらまとめ
させて頂きました。

RYLAという一つの目的の下に集って
来た70時間というものを大切にしてい
きたいと思
います。唯のエンドレスで終わるの
ではなく、皆さん立派な指導者の集まり
ですから我々が言うまでもなく、何か
の方向づけになるいいお話が出てくる
かと思
います。70時間を大事に過
ごしまし
ょう。

プログラムのねらいと内容

RYLA セミナープログラムのねらいは、受講生に五つの特色を味わって貰うことにあります。

- 1) 高レベルの講義と討論
- 2) キャビンタイム（親睦の熟成）
- 3) 自由と規律
- 4) 余島の自然
- 5) カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれたなかで『共に生きる』のテーマを、講義・キャビンタイム・バズセッション・フォーラム・思索の時々を中心に哲学してみましょう。

セミナープログラム

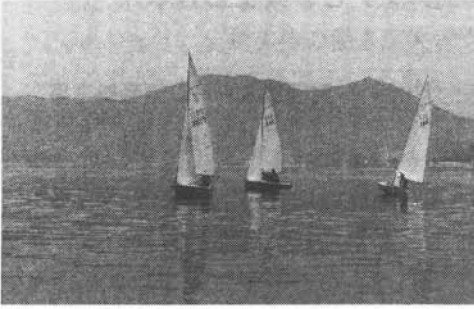
8 9 10 11 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

3月25日					開講式 オリエンテーション <15:00>	パーティー インニング	キャビンタイム
3月26日	朝食	「国際社会における共生」 草地賢一氏 (講義) <10:00>	昼食	レクリエーション ヨット・テニス ソフトボール アーチェリー他		夕食	キャンプファイヤー 親睦の夕べ キャビンタイム
3月27日	朝食	「地域社会における共生」 東野洋子氏 (講義) <10:00>	昼食	思索の時間 バズセッション		夕食	フォーラム キャビンタイム
3月28日	朝食	「共に生きる」 今井鎮雄氏 (まとめ) <9:30>		閉講式<11:30> 記念植樹<12:00> 昼食 離島			

オープニングパーティー



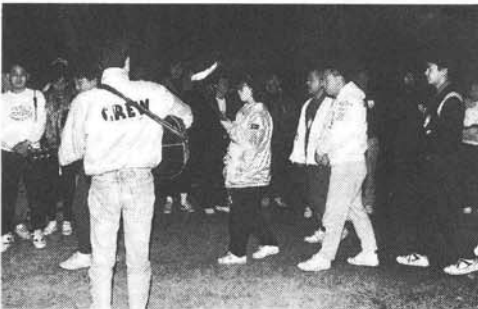
レクリエーションタイム

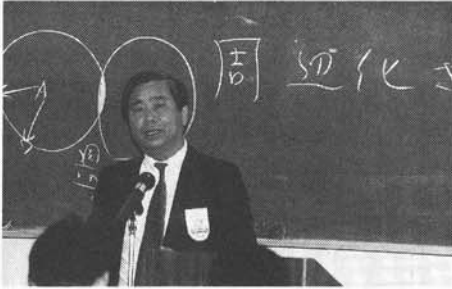


南の浜にて



キャンプファイヤー





私は1941年、京都で生まれ、5歳の頃から母親の再婚に連れられて、岡山の山深い百姓の家に育ちました。15歳から19歳迄の多感な少年時代を定時制高校に学びました。夜学の高等学校では様々な仲間に出会いました。そんな中で私自身将来は社会の底辺の問題を取り上げる新聞記者になりたいと思ったり、弁護士となって国選弁護人として不幸な人の力になりたいと思ったり、様々な思いをもって日々を過ごしておりました。そんな高校時代、私は岡山大学の医学部の研究室で臨床検査技師の手伝いとして働いておりました。そこでは色んな医療の裏側を見て、医師というものの在り方に疑問と不信感を持つ事もしばしばありました。しかし一方では医療に携わる人達の中央思考とは反対に無医村の医療に情熱を燃やされる医師の方々にも会おう事が出来ました。そんな先生方に尊敬と畏敬の思いを持ちながら自分も辺境で働く医者になりたいと思った事もございます。又自分の定時制の高校の教師を通して、どちらかと言えば金八先生のような教師になりたいとも思いました。私に洗礼を授けた牧師は私のなりたかった職業の総ての事が出来る牧師になるように勧められました。私は非常に単純に洗礼を受けた後、関西学院大学の神学部を目指し勉強を致しました。神学生となった私は色んな教会にまいりましたが、恵まれた人達の住む地域の教会の在り方やそこに集う人達の信仰に反発を感じ、自分は牧師には向いていないのじゃないか、もっと弱い立場の人達に実際に体で奉仕の実践をしていける所で働きたいと

国際社会における共生 (アジアとの共生と日本)

財団法人PHD協会総主事

草地賢一

思い始めました。その頃出会ったのが今井鎮雄先生でした。その事をお話しますと、先生は「じゃ君はYMCAに来なさい。」という事でYMCAにまいりました。当時、今井先生は指導者として大変に厳しい方でした。私は今井先生には最も叱られた者の一人ではありましたが、当時神戸の長田でケミカルシューズの工場に働く少年達やどちらかと言えば社会で疎まれる仕事をしている人々にYMCAの働きを広めるという事に情熱を燃やし、夢中でかつての自分と同じ境遇の少年達と共に過ごしてまいりました。もうこれで今井先生からこっぴどく叱られる事もおしまいだという安堵の気分で19年6ヶ月の神戸YMCAでの働きを終え、YMCA同盟よりタイへ派遣されました。帰国後東京での働きを経て、横浜YMCAへ奉職しました。その後、1984年、もうこれで叱られる事も終わったと思った今井先生から呼び出しを受け、勧められて現在働いておりますPHD運動に関わる事になりました。再びボスとして今井先生を仰ぐ事になったのです。

PHD運動と申しますのは、東南アジアを中心とする発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱により作られた国際社会福祉運動であります。1980～81年、丁度今井先生が国際ロータリー第268地区のガバナーに就任されました年、ネパールの山で結核をなんとか撲滅をしようと、民間医療では先駆的に努力をしておられた岩村昇先生に世界で初めて出来たロータリーの平和賞が授与されました。この平和賞というのには与えられた

賞金を賞を受けた岩村ドクター自身が使うのではなく、次にその働きを担うリーダーシップを要請する為に使うという条件があったそうであります。岩村先生の働きが大きく広がっていく時に、平和を作るといふ事と、先生ご自身がずっと手掛けられていたネパールの山の奥地の人達の健康を作るといふ事、しかもそれは医者や看護婦や保健婦が行って作ってあげるのではなく、彼らが自分達で平和や健康を作り出していくような人材を作る事、それがPHD（Peace, Health, Human Development）の起源のように聞いております。ロータリーはドクター岩村に平和賞を授与されたのみではなく、続いてその後のPHD運動の運営、経営を展開していく上でずっとロータリアンに関わって頂き、ロータリーの精神を通して、色々の示唆を与えて頂いたり、ご協力頂いたりしております。1984年に私がPHD協会に参りましたものの、理事長である今井先生からは、金は自分で集める、方法論つまり展開するものについては自分で考えてやれ、と一切の指示はなく、実務の責任者である私に任せられました。当時268地区のロータリアンが全国に呼びかけ、集めて下さった3000万円という、手をつけられない基本財産はあったとはいえ、大変な事でした。しかしこの10年間はこんなに充実した素晴らしい年月を過ごした事は過去にはなかったと思われる10年でもございました。

PHD協会では毎年アジアや南太平洋から研修生を日本に招きます。これは原則として、知的なエリートは対象に致しません。お百姓さんと漁師さんと村の女性が対象です。10年たった今は第10期生で今年はビルマ、スリランカ、インドネシアから研修生を呼んでおります。彼らは1年間様々な所で勉強を致します。大体12ヶ月の内、10ヶ月余りを日本で暮らしますが、原則として都市よりも農村に入ります。残りの数週間を韓国とフィリピンで比較研究をして夫々の村へ帰ります。青年達

を何故所謂エリートに限定しないで普通の村の人を呼んで来るのかと申しますと、それは岩村先生の思考や経験から来たものであり、東南アジアの僻地の人々の健康を守るには村の中で病気になりにくい状況を設定する事が最も必要な事であるという考え方です。それには食料を必ず作る事が出来る世界を作る事です。その最大の理由はあらゆる病気、貧困等の諸問題に対応していこうとする時、アジアの村の人達の日常的な生活は慢性的にお腹をすかせているので、大変抵抗力が弱く日常のちょっとした事にもとりかえしのつかない、生命の危険と隣り合わせの関係にいるということなのです。今日のお昼までのご飯はなんとかなっても、夜はどうしようという、絶対的貧困が彼らの現状なのです。いつもお腹をすかせている所に、黒柳徹子さん流に現地へ出掛け、子供を抱き上げて「この子に愛を！この子にコインを！」と集めたお金で食料をいくら送っても、送られた間だけ食べる事は出来ませんが、長期的に慢性化した貧困はお金だけでは絶対解決する事は出来ません。そこで岩村先生は20年弱、結核にかかる最大の理由はBCGでは解決の出来ない、人々を栄養失調から救出する事であると戦ってこられたのです。それは時間がかかっても食料を増産する意欲とか、思いとか、技術とかを村の人達に持たせる。これが長い時間がかかっても貧困を克服する事になるという信念でした。続いて1つだけの食料では栄養のバランスはとれない、いくつかを一緒に食べれば体にはこういう力がつくというような栄養と、料理の知識と知恵を村のお母さん達が知る事が出来れば8割の病がなくなると公衆衛生学上から岩村先生は計算されたのです。この意味からお百姓さんを日本に招き、食料の増産の意欲と或る種の技術そして村の女性には食事の知識と方法を持って帰ってもらうという事をずっと続けております。ではどうやってその人達を選ぶのか？昨年来日したハスマヤニと

セニフィタという2人のインドネシアの女性の場合は、一昨年9月に今井先生にインドネシアのスマトラの奥地の漁村の部落に出掛けて行って頂き、4人程の村の中から推薦された娘さん達に会って頂きました。その時、私の言った事は「この娘さんの親友をつれて来てほしい。そしてその親友にこの娘さんがどんな人なのか、どうしてこういう所に行こうと思っているのか、この娘さんが帰った時、村はどうなるのかという事を語ってほしい」という事でした。そして一軒一軒その家を探して行って、お婆ちゃんがここでどんな風に受け入れられているのか、部落の人達からお婆ちゃんやお母さんがどんな評価を受けているのかという事を調べました。その部落は女系家族で結婚は男が女性の家に入って行き、財産はその家の一番末っ子のお嬢さんに継がせる、いつも女性が連綿と続いている社会です。そこでお婆ちゃんがその村の中で人からどのような評価を受けているのかという事は大変その娘さんの一面を知る大きな手がかりとなる事なのです。そのように様々な方面からのセレクションをして彼らは去年の4月に神戸に着き、YMCAの日本語学校で6週間日本語を勉強し、沖縄や島根県の奥でずっと勉強させて頂き、夫々の国に今日帰国しようとしております。彼らが帰った後も今度は、今迄出会った日本の様々な人達が今度は彼らを村に尋ねて行きます。タイの村を二度訪れた11歳の少女は将来タイの国に住み、タイの人達と生活を共にしたいと強く希望し、その準備の為に今年4月から兵庫県の山奥へ山村留学を致します。両親はいづれも診療所を持つお医者さんで大変に豊かな生活をしておられる方ですが、「娘がどうしてもタイの農村で生活したいと言うので、その準備として日本の山村に留学をさせる」と決意されました。タイの農村を訪問された中には70代のお年寄りもありました。我々の運動というのは沢山の方々から寄付を頂いて1人の青年に約450

万円を使い教育を致します。450万円ものお金をかけて集めるという意味においては、アジアの村の人の為にとという事になりますと、分かち合うパーセンテージから言いますと51%であります。そしてそこで出会った日本の村や町の人達から教えられる、問われる、ふり返られるという風な部分が49%。ほぼ半々です。51と49というのは日本がアジア等に出掛けて行って合併企業を作る時の基本の比率であり、1. 2年経つと、日本の資本が9割からそれ以上になってしまうのでありますが、たまたま51と49という数字は私が勝手に考えた数字であります。太平洋の裏の人達から我々が問われているものでもあると思います。

私は1年の内、4ヶ月位アジアと南太平洋に出掛けて行っております。ここの人々にとって今私達から何かしてもらおう事によってプラスになる事があるのか？我々が彼らから学べるものは何か？を実際に経験を通して考え、或いは次の研修生を選考し、又多くの人々に呼びかけ、彼らと共に今迄帰った青年達をその村に尋ね、どういう生活をしているのか、つぶさに見る事が、私に今井先生からやれと言われて、かろうじてこんな事なのかとやっている大体の回答であります。NHKが私とタイでの活動を共にして取材してくれたビデオを一部ご覧頂きましょう（ビデオ放映）

このビデオにも出て来ましたが、かつて日本で学んだ青年、コマ君の事を私は大変心配をしております。彼はタイに於けるカレン人という少数民族です。タイの奥、チェンマイから東或いは北あたりに20部族位の少数民族が住んでいます。彼らが有機農業により、経済的に大きな力を持つという動きが大きくなって来ますと、多数者であるタイ人は彼らを潰しにかかります。コマ君の住む山の村ではバンコックのお金持ちの人がチェンマイの仲間にお金を出し、米や野菜を作る畑を借りて、そこでトマトを作らせ、その栽培の賃金を払っている所で、村の人達は自分の食料を自分の

畑で作るよりも、チェンマイのお金持ちから頼まれたトマトを作った方が畑の賃貸とトマトを作る労働賃の二重の収入が入ります。しかしそれには多くの収穫を上げる為にもものすごい農薬を使います。トマトは連作を嫌いますから次々と畑を移して行きます。そうすると化学肥料によって5年間位でそのあたりの川に魚がいなくなったり、人々の健康が蝕まれてしまいます。又その農薬の被害を受けたトマトが日本にやって来てトマトケチャップの材料となります。関係というものはこういうもので、我々が安いトマトケチャップを買って食べれば食べるほど、結果としてはこのトマトの村の畑やたんぼがいためられて来るのです。そして人々は農薬の為に大変な被害を受けます。彼らの健康や彼らの自然がそういう形で傷ついていく代償と言うか、傷ついていく結果を引き起こすような形で、我々は知らずにトマトケチャップを使っています。この所に1つは国とか民族を超えた関係がもう出来上がってしまっているという事を覚えておいて頂きたいと思います。そういった農薬を使うよりも、堆肥を使って有機農業を学んで帰ったコマ君達が田畑を作ろうとする動き、即ち資本を渡して平地のタイ人が握ったトマト畑では働かないと言う声に、この平地のタイ人とバンコックのお金持ちと日本の企業とががらんで、彼らを殺しにかかります。直接というわけではありませんが、交通事故で死ぬような形で彼らの命が奪われていきます。

私は教育という意味では人道主義であってよいと思います。しかし仕組みのようなものがどこかで変えられる事なしに、人道主義的にそこに行って何かをしてあげる事では全く駄目だという事を今少し理解しております。

私は今週の日曜日に1週間という短い滞りではありましたが、スリランカの村から帰って来ました。ここでも同じような事が起きています。氷上郡の春日町という所に中野さん

と言う酪農家がいらっしゃいますが、その方が教えて下さったアジャンタ君を始め、何人かの青年達が村に帰り、村の中でコツコツとミルクを作り、少しでも経済的に豊かな生活をしようという事で小さなグループが活動を始めています。今回は中野さんをお願いをして、日本で得られた知識でこれをどうしていったらいいのか、という事を教えて頂きたいとスリランカにお供をして行ってまいりました。それは彼らの働いている上で起きて来ている問題や乳牛のお乳が沢山出るようにという事など、実際上のアドバイスを現地ですて頂く事が第1点。第2点目は単にミルクを売るのではなく、ヨーグルトに加工するという事です。自分で加工すれば自分で値段を決める事が出来ます。今農村とか、漁村の最大の問題は、自分で作ったものを自分で値段を決める事が出来なくて、消費者が決めますから大変不安定です。彼らの住むボヤボラーナと言う村の土地の6割位をボヤボラーナの2%位の人が所有しています。この地主達が土地のない人に自分の土地を貸して、収穫の半分を小作に、半分が自分にもらうという仕組みになっています。これをもう少し大きく数字で表すならスリランカ全体の富の60%位をその国の人口の2%で持つという事になります。アジアに行かれた方はすさまじい貧困と豊かさとの格差に驚かれた事が多いと思います。私の知っている範囲ではその最大はインド、ネパールです。これは人によって違いますので必ずしもこれが正しいとは言いきれませんがネパールの場合は1%の人が99%の土地を持っています。インドは2%の人が98%の土地を持っています。いづれにしてもたった1握りの人の所あらゆるものが集中していきます。昨年7月に行った時からそういう問題が見られたのですが、アジャンタ君を我々に推薦してくれたのがアリクーンさんという村長であり、大地主自身であった事でアジャンタ君達のグループが一定程度の力と可能性を持ち始めて

来ても、村長と彼らの関係はまだそんなにま
ずくなくなっているのではありませんが、村長は非常に
変化をして来ているのは事実です。つぶしに
かかるとまでは言いませんが、貧しい何も持
たない人々が経済的にいくらかの力を持ち始
めると、近い将来多分直接間接に彼らを潰し
にかかります。

私は貧困と言うのは構造的なものであると
いう事をそういう中で知らされて来ました。
「絵で見る貧困のシステム」をご覧頂きたい
と思います。

これは特定のイデオロギーを持った人と言
うのではなく、神奈川県国際交流課が作っ
たものでありますが、作る中には一切県は関
与せずに中学生、小学校高学年の為の学校の
副教材として作られたものであります。何故
国際協力とか市民による援助とか、或いは政
府の援助が必要なのか？どんな援助が望まし
いのか？こういう事を学ぶ為に作られた教材
の1頁をとりました。これは相当ラジカルで
あります。NHKや朝日新聞はすぐ過激派と
訳しますが、私は最も根源的と言えると思
います。この絵で北というのは第一とか第三
世界という言い方をするなら、我々豊かな
国の人々の事を言います。工業先進国です。
この絵の「北」と言うトレーナーを着た男
の子の左足を見ると、私共とつながって
いる所に、地主がいて、貧しい農民、土
地のない農業労働者がいます。こうい
う人々は、農業とか農村が今顧みられ
るといことがないので、みんなマレー
シアの首相のように2010年迄に日本
の豊かさを作りたいと工業化を進めて
います。農業とか漁業とか第1次産業
である食料の事にはあまりにも無関心
であります。従って貧しい農民はス
ラムに入って行きます。貧しくなれば
なるほど自分の種（人間の家族とか
グループ）が滅びていくかも知れない
という不安が出て来ます。そういう状
況になった時、人間は自分の種を守る
為に沢山の子供を生みます。する事
がないから子供を沢山作る

のだという極めて一面的な見方があり
ますが、貧困が極まれば極まるほど人
口は爆発的に増えていきます。これ
がこの絵の説明であります。今から
このスラムに流れた人達がどんな
生活をしているのか？PHDがスラ
ムに流れる事を防ぐ為にどうい
う事をしているのか、日本テレビ
の撮った映像で少し見て頂きましょ
う。

このビデオに出て来ましたが、ネグ
ロス島と言うのは九州の3分の2
くらい島の島で、88万ヘクタール
のさとうきび畑を中心とした農地
がごぞいます。この農地のほとんど
総てを2560人の地主が所有して
おります。東京都と言う所を全部
合わせると22万ヘクタールだ
そうですが、2560人の地主の内、
860人の地主が24万ヘクタール
を持っています。この無茶苦茶な
構造をずっと守っていく為には、
畑も何も持っていない土民達は
グループを作りながら、さとうき
びがだんだん作れなくなった
という事で耕作を放棄し、米とか
野菜を作り始めます。これがど
こかで気付いて地主に分かると
追い出しにかかります。土地を
守り、豊かさの構造を握ろうと
する人々と、その日を生きて
生存の為の戦争が始まります。
地主が雇った兵がいます。これ
が警察軍、国軍を助ける準兵士
であります。この兵士達の中
にも非常に貧しい人達がい
ます。だから同じ貧しい人々
を殺す事は大変つらい事
です。その為、この準兵士達に
朝からものすごく強い、或
いはメチル度の危ないお酒を
飲ませたり、麻薬を与えます。
そうする事によって仲間を
殺すという事を麻痺させま
す。こういう所に入って行く
事は私自身の命も危険にさら
されているわけです。ですから
私は国際協力、国際交流とい
う事は或る部分では自分の命
も又危険にさらされている
という事を覚悟しなければ
ならないという事をこの村
に入る度に思います。しかし、
勇気を持ってこのしいたげ
られた人々がその日を守る
事が出来るように立ち上
がろうとする事に、共産主義
や社会主

義、資本主義と言ったイデオロギーとは関係なく、自分達で食っていけるような仕組みを

作っていく。その自立の為の応援というのが私の現場であります。こういう所に行きます

絵で見る貧困のシステム 考えてしまった、たみちゃんの家族

なぜ“南が貧しい”のですかって？それは“北が豊か”だからです。



●こうした構造は、たやすく解決できません
図のように、北の豊かさと南の貧困・飢え・北の浪費と南の自然破壊など、これらは密接に、しかも複雑に絡み合っています。

それでは、この構造をなくすために一体私たちはどうすれば良いのでしょうか。

それには、まず私たち自身が日常生活のあり方を見直し、これからの生活を変えていくことが必要なのではないでしょうか。



出典「たみちゃんと南のひとびと」

と今まで思いもつかなかった仕組みが見えて来ます。それが先程説明をしました絵であります。この絵をもう少し見てまいりたいと思います。これでは地球上の北側に豊かな国が集中しております。具体的にはヨーロッパ、カナダ、アメリカ、日本これは殆ど赤道より北にあります。例外的にニュージーランド、オーストラリアは南にありますが、これも便宜上入れて北の国或いは工業先進国或いは第一世界の国、或いは豊かな国、通称「北」と申します。そこにはこの絵によりますと机のようなものがあって上下は見えません。この男の子の右手には色んなグルメな食料があります。左手は様々な商業製品を売る事によって強い経済力を持ち、しかも多くの貧しい人々

を消費者としてとらえて、ここに商品を売っている事を描いています。それはものすごい種類のものであり、様々な日本の商品が売られています。これが売られていく為にはマーケットが確立されていなければなりませんし、そのマーケットを拡大していく為には相手の国の代表的な人々をつながってやっつけていかなければなりません。フィリピンでは大体6%、タイでは15%だと言われております。こういう人をつながって行く事によってマーケットが拡大されていきます。それはその人々の安定した生活を保つ為に政治をやっつけてい事であって、本当に総ての草の根の人々の為ではない。一部の経済的、政治的、宗教的、力を持った人々を代表する政治に日本のODAが

流れていきます。この特権階級が一定の力や或いはステータスをずっと保持していく為にこの後に自動車やカメラやテレビ等があるわけです。この絵の男の子の足は様々な自然の環境を破壊しながらエネルギーとしている事を描いています。

少し古い数字ですが、地球には55億の人口がいると言われていて、その内の20%約10億が工業的に先進国である国に住んでいます。この2割の人々が地球の富の8割を持っています。或いは地下資源などで不可能と言われるようなエネルギー資源の85%を使っています。湾岸戦争は石油の利権を確保する為というのが一番大きなポイントではなかったかと思いますが、地球で公正な分配で食物を食う事の為に、2割を我々がシェアすれば十分な筈であります。ところがそれは62%と言う数字となっているのです。何故でしょうか？鶏を1キロ食べるのに4.4キロの餌がいります。豚を1キロ食べるのに8キロの餌がいります。牛を1キロ食べるのに20キロの餌がいります。この餌はアフリカの人々の主食であるコーラン、大豆、トモロコシ等穀類であります。今アフリカで生産されるこの食料、彼らにとっての主食の6割をきちんとした貿易的な手続きを経て、60%は日本に来ています。それが牛や豚や鶏の餌になります。このようにして人間の主食16%と牛その他の餌46%を加えると、地球上の食料の65%近くを我々2割の者がとっている事になります。ここにおられる20代の若い青年達は随分足が伸びて来ました。食生活、特に動物性タンパク質を沢山取るようになって変わって来たと言われております。世界の動物性タンパク質の8割を我々が取っているのです。だから南の人が苦しいのです。

この南北差、南北構造と言うものを私はPHDの現場の中でだんだん見せつけられてまいりました。こういう理屈で貧しい人達が自分で豊かになる為に応援をしよう等と言うと、

今の日本の社会では「あなた共産党？」と言われる。それよりも24時間テレビ式、黒柳徹子式にワッーと物を集めてワッーと持って行ってあげて、それを渡すところを写真にして見せるというチャリティーの援助方法が日本では非常にアピールします。

PHDはそういう意味のマスコミの時流に乗る事は出来ません。しかし私達の志は、私達の作り過ぎた、奪い過ぎた豊かさを彼らに返す事であり、それをしなければ公正は可能でないという事を我々は経験を通して教えられて来たのです。

「共生・共に生きる」という事を願っていきます時、フィーリングとか、なんとなくのトレンドでもってその事をとやかく言うのではなく、共生が不可能な状況になっている仕組みや、基本的な理解がないと、共に生きるという事は一時的なキャッチフレーズの掛け声で終わってしまうという事。1つは南北の格差をどのようにイコールにしていくかという事の仕組みを学びながら、自分達が奪い過ぎ、豊か過ぎていっているものを削って、それを分かち合うというように、こちらのライフスタイルとか価値観を変えていかないと、共生は出来ない、というような事を私は南北格差の対象の中でPHDの人達から学ばされました。

先週おりましたスリランカは今、350年来の干ばつの中にあります。干ばつの大きな原因はたった2%のスリランカの豊かな人が切っけはいけない森林を盗伐して売っている事です。このようにしてスリランカの島の地形が崩れていきます。もう1つは赤道を前後にして、熱帯雨林というのがあるのですが、その熱帯雨林の中で世界で生産される熱帯雨林の6割を日本が買っている。買うから伐採する人が出るのです。このようにして1国サイドで起きている自然の破壊がその国の気象を変え、世界サイドで起きている自然の破壊が地球の状況を変えていきます。

スリランカの南に天国に一番近い島と言わ

れるモルビルという島があります。或る時期には日本の観光客もずいぶん来ておりました。そのモルビルの大統領は今、小さな自然的な、経済的なネットワークを一生懸命作っています。それはモルビル、スリランカ、インド、パキスタン、ネパール、バングラディシュ及びボンサントという7つの国によって構成され、南アジア諸国連合と呼んでおります。中曾根さんがアセアン、アセアン、と言って何かアジアはアセアンのように言われた、言うならば世論の1つの流れの中で言うとアジアはアセアンです。フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、5つがアセアンの姿です。

サークというこの南アジア諸国連合の中のモルビルの島は吹けば飛ぶような所であり、300位の岩礁で成立しているイスラム教国ではありますが、ここの大統領は日本を含む豊かな国の石油の使用量を軒並みにセーブしてほしい。何故なら石油を使う事によって地球の温度がどんどん上がって行って、南極、北極の水が溶けて水位が上がり、我が諸国が滅びると訴えています。海拔1メートルの平均の線に沿って、私共豊かな国の暮らしの有り様と言うものが自分の祖国を水の中に沈ませていく大きな暴力なのだという事を一生懸命言おうとしております。しかし、大将であるインドは全然取り上げてくれません。私は去年の9月にソロモン諸島にまいりましたが、ここにも同じような問題があります。太平洋の諸国にあるチリバと言う国をご存じでしょうか？ここも海拔1メートルで成り立っており、同じ問題を抱えております。6000人の人達が太平洋のまっ只中で一生懸命声を上げそれと戦っています。

南の国の貧しい人々は貧しくなればなる程、自然を破壊せざるを得ない生活をしていってしまいます。先程も申しましたように、貧しくなればなる程、人口が増えていくのですが、ネパールはこの間まで約3400メートルの所ま

で人が住んでいたのですが、この10年で600万人の人口が増え、その為に彼らの生活していたこの高度がじょじょに上がって行き、もう4000メートルを超える所まで人が住むようになりました。人間だけが住むのではなく、彼らはヤクという家畜やヤギを大事にしています。従って家畜達も人間と同時に上がっていきます。今、インドとネパールの国境近い所では虎が自分の住んでいるゾーンを人間が犯し始めたので人を食うようになりました。

こういう風に私達が直接知らない関係のない所で、私達の幸せが南の貧しい人々をして自然の破壊を拡大しているのです。

先日いしひろゆきさんという方と対談する機会がありました。「草地さんあなたの言われる南北問題を解消するという事はとても大事な事だけれども、これは我々が激しく破壊して、今やもう再起不能の所まで来ていると言われる地球の環境の問題と同一に考えていかないと、貴方の働きは駄目ですよ」と言われました。彼の試算によると3億5000万人の環境難民が出ると言う事です。さっき言った水没してしまう人々。それはこれらの島だけではなく、日本にも沢山の所に同じ事が起ころうとしています。例えば房総半島は半島でなくなるだろうと言われております。推定数色々方法によって違いますので確定的には申し上げられませんが、一番大きな数字は2010年に水位が1メートル70、ミニマムな数字で70センチ位の水位が上がって来るのじゃないかと思われま。確実にその状況は起きつつあると言うより起きてしまっていると言えます。オーストラリアは今、新婚旅行その他で旅行客のメッカであります。今年オーストラリアでは沢山の暑さによる死亡者が出ております。このオーストラリアの一番南のタスマニア島があるあたり、更にもっと南の南アメリカの最先端では人々は外出をする時に帽子を被り、光を遮断するのに強い色のサングラスをかける事、どんなに暑くても長袖、長

ズボンを身につける事を義務づけられています。それはオゾン層が破壊され、そこから来る太陽光線が目をつぶしてしまう事と皮膚癌が多く出ているからであります。このように現在、自然破壊の影響は確実に出て来ております。

先程申し上げているように、政治も経済も1国の中で総てを解決してしまう様な状況を遙かに越えております。1国主義、1国政治、1国に於ける平和は完全に過ぎ去ってしまっ、実は共生が義務づけられている、そういう時代だと私は思います。それをトレンドィに文字にしようなんて状況ではないのです。↗

次に示す地球環境の実態という事で酸性雨や生物の絶滅等をまとめたものを読んで頂ければ結構かと思ひます。高木さんという大阪大学で物理学を勉強された専門家がまとめられたものです。

まとめとして、どれほど問題が緊急であるのかという事を申し上げたいと思ひます。地球は100億の人間までなら、なんとか養っていくキャパシティを持っていると計算されております。55億の内の45億人は大変貧しい国々、南の国々に住んでいます。彼らの使う電気、水その他のエネルギーと関連をしたものの消費量を平均して1と見ますと、5億人であり↘

地球環境の実態 2

1992. 12 TAKAGI

<p style="text-align: center;">【人口爆発と貧困】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・途上国の人口は、もとは自給自足の中でバランスしていた ・先進国から市場経済が入ってくると、換金作物を優先して自給自足が崩れ一時的に豊かになり人口が増える ・人口増加 生活苦 生産性追求 人口増加 の悪循環に陥る ・生産性の追求(単一作付け、化学肥料、農業の大量投入など)は、結果的に土地の荒廃を招き、大量の難民を生む ・難民は周辺に溢れ出し、自給自足の崩壊がナダレ的に広がる ◎ 先進国の大量消費の資源は、途上国に大幅依存 ◎ 途上国から先進国への急速な資源の移動は、必然的に途上国の人口爆発と資源枯渇を招く ◎ 途上国が行き詰ると、先進国の経済が失速 ◎ 今、真に必要なことは、先進国の自立である 	<p style="text-align: center;">【酸性雨と酸性霧】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ものが燃えると、CO₂以外にNOXとSOXが生じる ・SOXとNOXは水に溶け硫酸(H₂SO₄)と硝酸(HNO₃)になる ・脱硫装置や脱硝装置で、ある程度低減できるが途上国は設置できない ・先進国でも、自動車(特にディーゼル車)によるNOXは深刻な問題 ・森林の枯死、沼湖の死滅、土壌の酸性化が深刻化 <ul style="list-style-type: none"> ◎ 自動車(特にディーゼル車、マイカー)は極力減らす ◎ 途上国への脱硫装置や脱硝装置の援助 ◎ 抜本的なエネルギー消費の抑制 ◎ CO₂の地球温暖化問題とともに、原子力発電への追い風となっているが、原子力発電は、世界の大部分はストップの方向(地震、飛行機の墜落、核廃棄物の保存など、安全は保証できない)
<p style="text-align: center;">【生物の絶滅】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生物の絶滅はこれまで、数年に1種程度 ・現在、毎年5万種の生物種が絶滅 ・人類はこれまで500万種を絶滅させ、現存する生物種は約1000万種 ・人間は、自分を支えていた生物の1/5を滅ぼしたことになる ・生命はお互いに深く関わり合い、保ち合っている ・アトピー、アレルギーなど目立ち、子供たちが弱くなり、ガン、エイズ等難病、奇病が増えている ・これ以上生物を滅ぼすと、人間は生きていけない <ul style="list-style-type: none"> ◎ 農業、化学肥料、殺虫薬の廃止、化学物質、薬剤の抜本的見直し ◎ 大気、土壌、水質の汚染抑制と保全 ◎ 森林、湖沼、河川の汚染抑制と保全 	<p style="text-align: center;">【ま と め】</p> <p>重要なことは、「これらを引き起こしているのは私達である」という事実を認識することである。今なお我々は大量生産、大量販売、大量消費を続けている。</p> <p>【消費総量】 45億人 × 1 + 8億人 × 100 = 845億人分</p> <p>地球が永続的に養えるのは、100億人分が限度と言われている。 我々は大量消費と大量生産をスローダウンすることが必要ではないだろうか。</p> <p style="text-align: center;"><u>ハイウェイの先に子供たちがいます</u> <u>あなたはアクセルを踏み続けますか</u></p> <p>「地球は有限である。 必要なものを与えることはできるが、無限の欲望に応えることはできない」 地球サミット事務局長 モーリス・ストロング</p>

ます。私共たった2割、10億の者が100倍も南の人々よりもエネルギーの消費量が大きいと高木さんは計算されています。これを最小限に見積もって10分の1、10と見たら、それだけで145億人分のエネルギーを我々は使っていると言えます。地球は100億のキャパシティしかない、それを最低限に見積もっても145億のエネルギーの使い過ぎを我々はやっ

ているのです。いつ迄もつのでしょうか？高木さんはこれを100で計算しておられますから1045億人分、地球のキャパシティの10倍のものを我々は毎日消費しているのです。それでいくと、2017年にインドネシアの石油がなくなり、2035年にアラブの石油がなくなる。これに代わるエネルギーとしてソーラーその他今一生懸命研究をすすめています。しかし、

私のこういう所からの正直な実感は地球は30年しかもたないのじゃないかという事であります。

開校式のメッセージの中で先輩のロータリアンの方々は「私達は間もなく去っていきます」という事をおっしゃいました。それは思考や経験、ポリシーを引き継いでいきたいという皆さんへの思いであります。それは先輩方が大変な時代を生きて来られ、エネルギーをどのように少なく消費するかという精神、質素に生きるとか、節約して生きるとかもったいないというような先輩方が身をもって体得して来られた事をあなた方に伝えておきたいと願っておられるのです。その心を本当にあなた方に理解をして引き継いでもらわないと、30年位で地球が文字通り消滅してしまうという事を私は申し上げたいと思います。

「共生」は義務なのです。共生せざるを得ない状況であるにもかかわらず、私共は自分さえよければいい、もっとほしい、もっと快適に、と欲望を広げます。私達の生活を取り巻いているアメニティ、コンビニエンスの2つのキーワードが今の私達の価値ではないでしょうか。レスアメニティ、快適さを少し落とし、そのようなライフスタイルを変える事なしに地球は持続する事が不可能です。快適さや或いは便利さを誇った事さえある我々が、南の人達の持っているきわめて厳しい状況の中で全体がもう少し豊かに、もう少し快適に、もう少し便利になっていく事を認めていく事が共生への第一歩ではないでしょうか。便利さと快適さの中に生きている我々、50年前はこうだったとご自分の体験を教えて下さった先輩方を含めて、私共は更にもう一度ライフスタイルや価値の転換を考えるなら、究極の貧しさの中で人生を一緒に楽しんでいる、宗教とか自然の中で見事に生き抜いているシンプルライフをする南の人々から学ぶ事です。この人々から学ぶ事なくしては共生は出来ないのじゃないでしょうか。

ひとつのエピソードを紹介して、歴史という部分を一方では考えなければならないという事も付け加えたいと思います。先週スリランカで何度も聞いたエピソードです。1953年日本が敗戦の中から国際社会に復帰をして行くこうとする時、サンフランシスコで平和会議が行われました。この時、アジアの何人かの人々が日本を許してくれたのです。その1人は今は亡くなった蒋介石という有名な当時の中国の大政治家でした。「恨みにいきるに恩をもってなすべし」という有名な言葉を使って日本の戦争責任と賠償の請求権を放棄するという、歴史を学んだ人にはよく知られているエピソードであります。1860年来以降、日本は初めてアジアで近代化を成し遂げ、そして工業化を進めていきました。アジアの人々は長い植民地の支配から立ち上がり、本音は白人になり代わってアジアを支配しようとする事であったのです。しかしこのもくろみは辛くも敗れた。けれどもアジアの中で唯一白人の支配に抗して立ち上がろうとしたアジアの兄弟の長男、兄貴である日本が今あらゆるものを失くし、苦しみにある時、我々弟分は兄貴が立派に更生して世界の平和の為に寄与する為に佛法の教えに帰依し、兄貴（日本）の過ちを許し、早く本当のアジアの長男として元へもどってくれたらいい。自分の今の貧しさを耐え忍んで日本からの賠償金を放棄するという同じような趣旨のメッセージを出して下さったのがまだ亡命中であります。スリランカの前大統領、ジャマルコスさんであります。この有名なスピーチはスリランカ人全体の誇りとなっており、スリランカの人々はその歴史の故に日本に対して極めて親日的なものを持っています。これは綿々とスリランカの歴史の中でひとつの民族の誇りとして教えられていっているのです。日本にやって来たスリランカの人達は恩知らずという風に言って反日になって帰っていく事をよく聞きます。アジアとの共生という事を考えるに

世界的なグローバルな状況と同時に歴史的、限定的な日本とアジアの関係の中に私は戦争に対する、その時の歴史に対する私共の負の歴史を背負わなければ歴史を担うという事にはならない。これはペコペコ頭を下げるという事だけではない、むしろアジアの人々と共生をするという時に謙虚に私共の犯した過ちをきちんと知ってそしてそれに対するつぐないを呼びかけ、共生していくと言う事は世界全体との共生、国際に於ける共生とは違った

かかわりを私共はもうひとつ呼びかけるという事を先週のスリランカでの生活体験に何度も思い起こされたのでございます。そういったような仕組みであるとか、価値観の転換であるとか、生活サイクルを代えるという事が義務として最早起きているという事、そしてその中で関係の歴史を押さえながら新しく共に生きるという事の生き方を考えなければならないという事を私の生活体験の中で教えられたという事を申し上げて終わりと致します。



地域社会における共生 (男と女・障害をもつ人もたない人)

聖母被昇天学院女子短期大学講師

東野洋子

このセミナーの講師をお引き受けする時に、今井先生に「役割は？」とお尋ねしましたら、「自分が今までやって来た事、自分をまるごと紹介すればいい。」とおっしゃって下さいました。学校では心理学を教えております。カウンセリングも沢山手掛けてきました。私自身は手掛けていると言うよりは、カウンセリングという輪の中でいろんな人と出会って、私の人生を三つも四つも余分に経験させていただいているようにも感じながら、苦難はありますが結果としてうれしく仕事を致しております。心理学の授業では少しは科学的、論理的な話をし、一方では私自身共々、実際に出会った方々との体験の中にあるエピソードの中のメッセージを紹介したり、お伝えしていくのが私の仕事だと思っております。ところで今日は今日からお友達になった皆さんに理論みたいなものは捨てて、私のまるごとそのまま皆さんの顔を見ながら、話したくなった事を話させて頂きます。宜しく願い致します。

まず、何よりも先に今日は私の一番大切な友達の話を書ねばならないのではないかと考えてまいりました。私の友達の中にはいろんな方がいらっしゃいます。皆さんのようにそれぞれの地域でいろんな活動をしていこうという方や、ロータリーのおじさま方のように、深められた英知や心でいろんな人生の教えを持っていらっしゃる方もいらっしゃいます。その友人の中でたまたま音楽を12年間一緒にやっている友人達は知的な障害を持っております。知的障害とひと口に言いましても知的

に優れた人から順々に知的な能力を比較していきますと、最も優れた人からみれば、それぞれ少しずつ知的に劣るごとに障害を持っていることとなりますが、一般に自分で何かを学ぶと、ある程度きちんと順番に覚えられてそして適切な時に順番に知的な力として使い出せる、そういう力を潤沢に持っている人達。特に優れてはいないけれど潤沢に自分の生活の中で年齢相応に知的な応用力を出していける人達を基準として考えたら、それがうまく出来ていないように見える人達を知的障害といっているのではないかなと思います。例えば算数を習いますとだいたいはお店屋さんに行けば普通に買い物が出てきます。そのあたりの計算がうまく出来ない、計算が出来てもうまく使えない、そのために普通に買い物が出てこないというのが知的障害のだいたいの目安のひとつかとも思います。基準としては知能テストがあったり、教育的な試験があったりするのですが、あまりテストも当てにならないところもありますから、生活の中で自分が体験したり、知的に学んだりした事が適宜、応用していけるかどうかを基準と考えたらよいのではないかと考えています。しかし知的障害をもつ彼らも生活面ではずいぶん成長を続けています。例えば私が一緒に音楽活動をしている友達と夕食を食べに行きますね、「洋子さん、おうどん、おうどん、僕は今日おうどんを食べようと思う。」「おうどんいいね。」「これなんだったっけな、なんだったっけ?」メニューの字を順番に読んでいるわけです。広げて見ているからしっかり読めてい

るのかと思ったら読めてなかったりするわけです。突然「僕は今日カレーライスにする。」「ここはおうどん屋さんだからカレーライス書いてないよ。」「あらまっ。」「あらあら。」「カレーライスやめてカツサンドにする。」「カツサンドもないよ。ここはおうどん屋さんだからね、ちょっと見てきてよ、うどん屋だから。」「ふうん、うどん屋だったのか。」「カレーもカツも入ってるカツカレーうどんってのはどう?」「うんうんそれにしよう。」ってことになるのです。代金を払うことになって、たとえばカツカレーうどんが680円とします。「どうする?いくらあるの?出してごらん。」「1、2、3、4、5……。」「次ぎは?」「8、9、10。」とか「8、10。」とかになるのです。10円玉、100円玉をならべてもなぜか数字が飛んでしまうのです。今音楽活動を始めて12年目が終わろうとしているのですが、いつも「これで足りるね?」と言うのです。おうどん屋のおばさんに一人一人払う事を許して頂いているので、彼らは700円ずつ払います。そして20円のおつりをもらいます。時々100玉がないと「洋子さん、これで足りるね?」と1000円札を握っているのです。「うん足りてるよ。お釣りはいくらかな?」するとあてずっぽうで言ってみたりするのです。「あてずっぽうは駄目よ。ちゃんと数えるのよ。」私はいつも100円玉を10ヶ持っているのです、「これと1000円は一緒だからね。」「一緒?違うよ。」玉と紙幣は違うというのです。「一緒よ。同じだけ買えるのよ。同じものが買えるのが一緒というのよ。お金は違うけれども一緒よ。」そんな事を行きつ戻りつしながらやって来ました。彼らは知的障害があって確かな計算は出来ないけれども、おうどん屋さんに行っておうどんが食べられてお金も支払えるのです。私がなぜこういう話をしているのかと言いますとね、皆さん方の中には知的障害のある方達とか他の障害のある方と一緒に仕事をしたり、時間を共に過ごしたりしてお

れる方もあると思いますが、知的障害ということが一つあると、なんでも出来なくなっているのだ、分っていないのだと思う事がよくあります。知的障害が一つあるために何もかも出来ないのではないのです。知的障害はあるけれども、その障害とは別に暮らしの中では自分の持っている色々な力を上手に組み合わせさせてやっていけるのです。本来計算をする時には算数の能力を使ってやります。ところが算数の能力があまり使えない事を知った時、暮らしの中ではほかの要素がそれを補うというか、形を変えて違うものに変える力を人は持っています。

NHKが2年前に私達のグループの結成10年を記念して特別番組で放映して下さいったビデオをごらん頂きます。私の一番の友達を紹介出来る映像というのはありがたいと思います。

〈ビデオ上映「楽団あぶあぶあの10年—かさねあう心、広がるメロディ」〉

さてこのセミナーのテーマは「共生」共に生きるという事。私が彼らと一緒にいて、一緒に楽しい人生の一こまを重ねあっているお話をすることで、共に生きるということの一番大きなエネルギーの一つをお伝えすることであればいいなと思っています。あぶあぶあの友人たちの話をさせていただくときはたいいて私がいままで彼らとの練習の仕方や、どんなふうにして会を作っていくかというところにポイントをおいた話を求められる事が多いのですが、今日は彼らと一緒に活動したい私自身の気持ちを中心に話したいと思っています。どうして私があの人達とこんなに長く、そしてこれからもきっと出来れば死ぬまで楽しくやって行きたいと思っているのかを話させて頂きたいと思います。

まず最初に、彼らと初めて会ったのは、かれこれ12年前の丁度今頃の季節「春」でした。当時10代の終わり頃、養護学校の在校生だとか、今年卒業するという人達と一緒に会を始

めました。もともと私の大学は付属の養護学校を持っていたものですから、そこで「子供にとっての音楽と心」という論文を書くという目的で養護学校にまいりました。その折に論文の内容とは別にたくさんの魅力的な子どもに出会いました。学校も大事なわけけれども、もう少し別な勉強を今頃から始めておいたらいいなという子も何人かあって、絵をやったらどうか？とか、言語障害はあるけれどもこの人とお話作りをしてくれるお姉さんかお兄さんはいないかな？とか、そんな子供が目の前に沢山いるわけです。その中でお話出来るお母さんには順番にそういうことをお話しました。「家庭教師をつけてください。野山を歩く家庭教師を。お子さんは塾にも行かないし、大学にも行かないかもしれないけれど、家庭教師の先生が毎週1回やって来てあなたのお子さんといろんな知的な事も盛りこみながら、野山と一緒に歩き、冬の間この花が自然の中でどうやって生き抜いて来たか、そして今どうやって芽をふいていて、やがて夏にはどんなふうになっていくのか、それがどんなに嬉しいものか、そんな事を語り合える家庭教師をつけてください。」と申しました。でも家庭教師はなかなか見つからなかったもので、今も私がお子さんと山歩きを一緒に楽しんでいます。

又一方にはダウン症の女の子がいて、その子はとても手が小さくて、ピアノの硬いキーは無理じゃないかと思われる手をしていました。しかしその子は玉虫色の、色を取りわけて聞きとるようなセンスがあるのじゃないかと私には思えました。「ステキな音を使いわけけるシンセサイザーのようなキーボードをやってみませんか？」と言いました。このグループのきっかけはそこから始まったのです。その手の小さな女の子が1年かけて「乙女の祈り」という曲を弾けるようになった時に、たくさんの養護学校の同級生や後輩を集めた会をしました。ホームコンサートです。その子

の弾く「乙女の祈り」の曲を聞きにやって来た友達が小さなプレゼントをその子にあげたのですが、あげてうれしい、もらってうれしい、お互いのうれしい気持がこの会を始める動機になったのだと思います。僕達も一緒にやりたいと言葉では言ってはくれないのですが、いっしょに音楽がやりたいねと7人が集まりました。出会ってうれしい……思いがけないそれぞれのうれしい気持ちがふとお互いに思えるような出会いでした。とは言いますが知的障害も言語障害もありますから、やはり明確なことばになって見え、聞こえてくるのではないのです。でも私にはわかった。「一緒に何かやっていけたら楽しくてたまらないよ。やろうよ みんな。ねっ。」という表現が、私の心にとびこんできました。その一番最初に集まった時、私は「音楽が好きなの。」という前にいっぱい好きなもののお話をしました。「洋子さん何が好きなの？」という目で私を見ます。みんなは高等部頃の年齢でしたから今まで学校の先生方がみんなの中ではこういうふうにしたらお話がよく聞けるよとか、お話を聞いたら楽しいよとか、人の輪のなかに自分がいるというふうになんか教えてくださった土壌が彼らの中に既にありました。「私は海が大好きなのね。島でキャンプをして人がやって来るのが好きなのよ。人が来ると楽しい事がいっぱいあるものね。だから好きなのよ。でも風も好き、花も好き。花ってお話しているような気がするのよ。何を言っているのか時々分からない事もあるけれども、きっと嬉しいとか、好きとか、気持ちいいとかそんなお話をしているような気がするわ。」と私が話すと「ふんふん。」と喜んで聞いてくれます。「私はね、音楽も大好きなの。歌が好きだったのね。お母さんと最初に歌った歌は「ぶあぶあ」っていう歌だったのよ。「ぶあぶあぶあ、うわおっ、ぶあぶあぶあってママと話していたんだって。」と言うとみんながすごく喜ぶのです。「ぶあぶあ」

「ぶあぶあ」「ぶあぶあ」そう話している私がとても楽しそうで、この楽しさをいいなあと分ってくれる。自分自身達が好きかどうかという価値基準でなく、私が好きよと言っている事をそれはよさそうだなと思ってくれる彼らです。「私には大好きなだんなさんもいるのよ。」「うんうん。」17、18歳ですから男の人を好きよと言っているのはなんとなく暖かくってなんとなく恥ずかしくって、やわらかな気持ちなのでしょう。青年らしい男女の気持ちを少しずつ分かりかけて来た、ほのぼのとして少しはにかんだような、海が好きというのとは少し違った感じです。私達と全く変わらない、同じです。知的障害があるから何かしてあげなければどうしようもないとか、私がしてあげるばかりではない、たまたま言語障害があるから分るように言わなければいけないし、分っているかどうか確かめなければいけないというように手間はかけなければなりません。みんな心の本質は一緒です。思春期らしい恋も語れるし、花の事も風も海も語れるし、歌も歌える、人間としては変わらないのです。私はここで新しい友達と出会ってとても嬉しかったのです。私が「だんなさん好きよ。」と言うと彼らは「うんうん僕も好きだよ。」「僕も洋子さんのだんなさん好きだよ。」「好き。」「好き。」というように話しているうちに一男君（メンバーの一人）が突然マリimbaを叩きだしました。始めは「…………トン」「…………トン」だったのです。先程のビデオの映像では7年越しの曲を一男君が弾いていました。7年前の事を思うと夢のようだと言われるのはお母さんの本当の気持ちでしょう。でも私達にも7年後はこんなふうに上手に演奏することは予想されていなかったのですが、この楽しさは私には予想されていました。重ねあうものは必ず楽しくなる、心を重ねているかぎり。上手下手は予想外かも知れないけれども重ねあう心の中は予想されます。人間の本質のところに、楽しいものを

重ねる力がありますが、苦しいものは重ねる力はないと思います。そんな中で一男君が「僕も好きだよ。」「何を好きなの?」「わからん。でも好きです。」「好きなのは分かった。何が好きなの?」こんなやり取りを何度かしていると、ほかの子たちもうなづいて「わからんけど好き。」というのは同じなのです。よくよく分からなくても好きなものがここにはあります。何が好きでもいい、その人が好きなものを大事にするということなのです。そんな話の途中、長身で180cmもある自閉症傾向の青年が突如としてダーッと出ていくのです。『レインマン』という映画を見られた方はダスティン・ホフマンがかなりうまく演技していましたから自閉症の人達の感じをなんとなく知っていらっしゃるかもしれませんが、自閉的な自分のどこかでトラブッていて過剰になったストレスをうまく流すためにいろんな事をします。一般に脳障害のある人の中にはいろんな脳内ストレスの流し方をすることがあるようです。自分の心をきれいにトリートして心おだやかにするためにいろんな動作をして解消しているようです。ところがダウン症の人達はどちらかというと、ゆるやかで激しいストレスは少ないので、自閉症の人が人の輪からサーッと席を立っていけばそれが何故か分からず、自分たちの事を嫌いなのかなと思ったり、この場にいるのが嫌なのかなと思ったりします。『あぶあぶあ』の場合もダウンの子たちとその場の雰囲気がかくかく密になってきている時に、自閉傾向の人がすごい勢いで席を立って「うーっ。」と猛烈な速さでうなづいているのです。みんなは出ていった彼を見えています。一瞬、嫌なのかなと思ったかもしれませんがなにげなく見送りました。見送られた彼の方は隣の部屋にいて20分も30分も帰って来ません。私も追っかけずにみんなに話を続けました。「ところで次ぎから何する?何かやろうよね。私は音楽が好きなんだよね。」「うんうん。」ごく自然に「やっ

ぱり音楽がいいか。」そうすると「そうしょう、そうしょう。」「楽器は何かする？」ありがたいことにみんなは学校でいろんな楽器を見て、聞いて、さわっています。「楽器は何にする？」と言った瞬間に180cmの大男がタッタタッタと帰って来て空けてあった席にドンと座り、「アコーディオンや。」というのです。「アコーディオンやったことあるん？」「学校であった。」「いいかなあ。」と私が言うと、みんなは「うんええなあ。」というわけで彼の楽器は早々に決まりました。この時私はきっとこのハーモニーは続けられると思いました。出会った人々がすべて自分の気に入る行動をとってくれて、分りやすい表情で協力してくれれば理解しやすいわけです。でもすべての人となれば程度の差こそあれそんなわけにはいきません。話の途中でとび出していった人をごく自然に見送り又途中で唐突にもどってきたその人を自然に受け入れたこのとき、この人たちとひとつのハーモニーがつくり出せると思いました。お互いがお互いのちがいをごくあたり前に受け入れてひとつになれると思ったのです。思春期の始まりぐらいまではどういう風にしたらみんなと分りあえるかという練習はとても大事だと思います。ある一定の練習が過ぎた年齢に入ったらお互いに自分には分りにくい態度や行動や言葉があっても、「あいつはいい奴だ。」「とんでもない奴だけれども、どこか好きなんだな。」と言う気持ちがつきあいの中で中心になってくる時期が始まります。私達はこれをいとおしく思って生きているのではないかと思います。知的な力が強いと文句も出て言い返しもされたり、言わなくてもいい注意もしたりトラブルの種類にもなりますが、幸いにして彼らはたくさんの言葉を持っていませんからそのまま受け入れます。そこには自分はそういう事はしないけれども、どうやら怒ってやっているのではないらしいと、自然に受け入れる彼らの輪がありました。欠点があってもいい、性格の中

に好きになれない部分があってもいいのです。一緒に何かをやっていけそうな、何もかも解かるわけではないけれど受け入れる気持ちで接していく、そういうものが初日の彼らにはもうすでにありました。何があっても大丈夫、この後どんな紆余曲折があり、どんなエピソードがまじり、どんな事件が起きても今日の日には絶対続くと思いました。私の家はクリスチャンではなかったけれど私は日曜学校で育ちました。やがて大きくなった私は日曜学校を卒業したわけですが、私はずーっと人生で信じ続けるものを求め、教えられる、愛する学校がほしかった。この『あぶあぶあ』の集会のはじまりの日、私の日曜学校がここにあると思って嬉しかった。彼らは聖書を読みません。知的障害のある彼らは哲学書や倫理の本も読みません。キリストがこんな事をいったとか、親鸞はこういうふうにしたという事も知りません。ところが彼らは読んでいるのです。哲学書を聖書を人生の書をちゃんと読んでいるのです。神様は彼らに聖書を文字で与えなかっただけなのです。お経の本を文字で与えなかっただけなのです。彼らは歩きながら、自然を見、人の笑顔を見、泣き顔を見、人の怒りを見、人の嘆きを知り、人の悲しみや喜びを知って、ちゃんと読んでいるのです。知的な障害のない人と同じ方法ではなく、知的な障害のある人達はその人達が持っている学び方があって、それが心の中に年齢相応にたまっています。だから私にとって彼らは先生です。長い間探していた私の先生がいたと思えました。障害を持つ人達と一緒にいる方達はよく「彼らから教えられます。」とおっしゃいますがきっとそういう事なのだと思います。彼らはとても深い人生を歩んでいます。私と『あぶあぶあ』の始まりはこういうふうにして始まりました。私が28歳の時でした。

やがて音楽のおけいこが始まりました。音楽が好きだという意識が音楽をしたいに変わり、したいという意識が続けたいという意識につ

ながるように私もいろいろと考えました。まず、長く続けるには一緒にやりたい仲間がいる事が大事です。趣味というものは一人でやってもなかなか続くものではありません。今、子供の4割～5割の人達は1度はピアノをはじめとして何か楽器を習ったという状況になっています。ところがたいてい好きにはならずにあっさりやめています。何故かというと一緒に楽しく習うお友達がない、いいなあと思いう仲間を持たないからだと思います。私も大学の頃までピアノを習っていたのですが、私のピアノを喜んでくれる人がいるということがピアノを続けていた動機でした。私が隣の友達の弾いているピアノをステキだな、あの子のあの曲好きだなという芸術性とは別に人間を通して覚えていたということが大事に思っていました。この事は『あぶあぶあ』を始めた時にまず浮かんできていました。続けたいという気持ちは自分の好きな事を人もよろこんでくれてお互いの音楽を喜びあっている人がいるという心から生まれると私は感じていたのです。みんなはもうその心の種は持っているのですからそれを自覚まで高めなくちゃとも思いました。よろこびあう仲間がいるという自覚を自覚するにはどうしたらいいのか、なかなか仕組めるものではないので、とりあえずお互いを好きになりながら、いつも音楽という核だけは中心にもっておこうと思いました。最初は半年も1年も、「この曲どう?」「この曲どう?」とみんなで聞きながら楽器をそばにおいて散々遊んでいました。やがて自閉傾向の彼は音楽が鳴りだすと部屋に入って自分でボリュームをコントロールした位置に着きます。あんまり大きな音のしないところにいました。ダウン症の子はガンガンするスピーカーのど真ん中に来てわいわい騒いでいます。やがて自閉傾向の子は隣の部屋に行ったり、もっとしんどくなると玄関の方へ行ったりしてどんどん離れるようにながら聞きます。それなりに聞き方が違い、楽

しみ方が違います。ボクシングの格好をしながら聞く人、じっとして聞く人、みな夫々です。先生という立場からすると、ちょっとでもお互いに確認出来る場所で、見た目からも同じように楽しんでほしい。人が踊るところではみんな踊って楽しむ、人が笑う時には笑って人に伝えるというように、同じようにと言ひ含めがちです。でも同じというのは気持だけでよい、表現は違うけれど気持だけは同じという事が伝わりお互いの見た目のちがいは気にしないと私は思うのです。こうして3ヶ月もすると、どうもあいつはああやって聞けらしい、この子はだんだん好きになるとスピーカーの前でこうやって聞くのが好きらしいというような事が分ってきます。私はうれしくなると歌ってはしゃいでしまいますが、好きになればなるほどじっとしている人もいます。皆さんが青少年活動など色々な場に出られた時に自分とは違う表現をする人がいると、あの人は楽しんでいないのじゃないだろうかとか、自分とちがって淋しいのじゃないかと思われる事があるかもしれませんが、ひょっとしたらそれは違うかも知れませんが、表現のちがうお互いを分るまでには相当の時間が必要です。そうこうしておりますとそのうちに「洋子さん楽器をしょうよ。」という事になり、個人練習が始まります。個人練習をやって自分がだんだん上手になって来ますと他の人が見えなくなります。熱中している間は自分の周りに誰かいるという事を忘れてしまいます。それも大事な時間なのですが、「一男が一生懸命練習したんだけれども、ここの所が出来てないのよ。」「うんうん。」と聞いてはいますが、最初の1～2年はそれで終わりです。聞いていないみたいに他所をみている子もいます。でも2年3年とたつて自分がある程度出来るようになると、「洋子さん一男がんばってる?」と聞くようになりました。「うん頑張ってるよ。」そして次に一男には「敏君が一男は頑張っているかと聞いて

いたよ。そしてまあまあだと言っといた。」
と言います。私はみんなの気持ちのはしわたし
をしているわけです。これが4年5年すると私
なんか抜きになり、はしわたしはほとんど
いらなくなって来ました。「おまえやと
るか?」「うんやってるよ。」となります。言
語障害がありますから、しばしば誤解があ
りますが、みんなが気持ちを表現出来るよ
うに、伝わるようになってきている事を年々
感じます。この事はあたかも私が仕組んだ
ように見えますが、初めからみんなの中
にあったのです。あったけれどもどうし
ていいのかわからなかっただけなのです。
私にもあった筈なのです。彼らと一緒
にしながら自分が何を望んでいるかを自
分自身で確かめるためにやって来たよう
に思います。言うならば私は彼らの望ん
でいるものを見ながら自分の望んでいる
ものと同じだということを感じる日々を重
ねたこととなります。彼らの望んでいる
のは、楽しいという、嬉しいという人生
です。自分の嬉しいという人生は人の喜
しいという人生があって、やっと自分も
うれしいのです。その事を誤解なく、お
互いが知り合う事が出来たらと思いま
す。隣の人があなたはいいねと思っ
てくれている事を私が知る事が出来たら
こんな嬉しい事はないでしょう。彼らも
同じことを望んでいたわけです。知的障
害がない人たちの中には、あの人が喜ん
でいるから私も嬉しいと思っても、しば
しば知的な体験が邪魔をするのか、心
がもともと望んでいたこととは裏腹に
隣の人がうらやましくなる人がありま
す。でも本当に隣の人が幸せだったら
自分がつまらないのかというと、そう
じゃないと思います。いろんな体験とか
、価値観とか、今持っているものの中
で比較をするからあっちがいい、こち
ちがいいと思うので、自分が本当に望
んでいるものが霞んでいっているよう
な気がします。一番望んでいるものは
、もし持って死ねないものを全部お
いてしまったら、自分の望んでいるもの
はたった

一つだと思います。“嬉しい”という気
持ちはいつも抱いていたい、これしか持
っているものはないでしょう。『あぶあ
ぶあ』の友人たちは心嬉しいことに向
けてせっせと努力しています。体験がそ
のまま知恵となって、心嬉しいことに
向けてとっても真摯に挑みます。私は
それをはしわたししたいと思っています。
はしわたししながら私自身を確認する
事になり、彼らに育てられる事になっ
たと思います。このRYLAに来て思う
事は、沢山のおじさま達が若い皆さ
ん方を囲んで一様に何かを願ってお
られるという事です。皆さんの人生が
良いものにむかい、その人生が人と
分かち合うものであったらいいの
になど願っておられます。それを感じ
て私まで嬉しいと一緒に思っています。

少し話がそれますが、保健所では1
～3歳の幼い子供をかかえた母子の
検診をしていて、私はそこで心理相
談の仕事をしています。小さい子供
が母親とやって来ます。私の部屋に
来る母子は何かトラブルを持ってい
ます。3歳というのにやっと話し
始めた言葉がどもる、吃音の子
ども。やっと周りの人達の感情が
つかめて表情に出せる3歳になっ
たというのに、暗い顔をしてい
つもボソボソとして喜びを顔
に出せなくなってしまいうも
います。我が子を案じるお母
さんと一緒になって泣いたり
笑ったりしながら話を聞
いているうちに、ふとお母
さんの気持ちが和んだ瞬間
、そばにいた子供の顔が
変わります。今まで向こう
で遊んでいた子が近寄
って来て、私にちょっとさ
わったり、背中にもたれ
たりします。初めて出会
った日だというのに親愛
を示してくれます。小
さな子が母親の気持ち
をいかに案じていたか
ということに気付かざ
るを得ません。お母
さんが安心して接して
いる私をこの人はいい
人だとすぐに表現して
くれます。私はその子
がそうしてくれた事
によって意を強くして
、よかった、この親子
はきっとうまくやっ
ていけると思ったり
します。子が親を案
じ、その子

を親が案じている、お互いの気持ちは同じなのです。いくつになってもこの気持ちは人間である限りは変わらないと思います。『あぶあぶあ』の友人たちもその小さな子どもたちの母の心と同じなのかもしれません。

『あぶあぶあ』のみんなと一緒にやっている時に私の思う事は人間が本当に望んでいることを彼らがストレートにやろうと努力しているという事です。私の夫の東野も『あぶあぶあ』の一員ですが、私たち夫婦の間でちょっとした言葉のやり取りに少し刺があったりすると、彼らはすぐに寄って来て「やめなさい。」といいます。それ位の事は私達夫婦の間ではなんでもない事で「けんかじゃないから。」と言っても「だめです。けんかになります。」「分りました。」というような事がよくあるのです。東野はいつも「彼らが僕達に望んでいる事はたった一つ、僕達が幸せな事。僕達の幸せをこんなに願っている人はいないよ。小さな刺がいくつか刺さったら、全部抜けるとは限らなくて、長い人生の終わりにはきっと不幸な小さな実になるかもしれない。彼らはそれを知っているのだろう。小さな刺さえも抜いてくれるほど僕達の幸せを願ってくれている。」と言っています。誰でもそうですね。家の中でお父さんとお母さんのちょっとした諍い、1週間もすればなんでもなくなるような諍いでも嫌ですね。何故かというと、小さな刺が不幸の種になるかもしれないと思うからです。そういった現実に鈍感に生きるという事も出来るかもしれないけれども、いつかそれは悔いる時がやって来ると思います。そういう意味では私達は『あぶあぶあ』のみんなという中で周りにいる人達から小さな刺を抜いてもらっているのではないかと思います。そういう風を感じながらあぶあぶあに参加している私自身です。共に生きると言うのは一つ屋根の下で暮らすという形の暮らしを夫々が続けながら一緒に暮らさない人達もまた一緒に幸せになる努力をするということなのか

もしれません。

10周年の時、10年を振り返って何があったかと東野と話したことがあります。今の流れの中で一つあるもの、それは大事にしあうと言う気持ちなのですが、10年たって私が今まで思いもかけなかったことは何かと聞かれたら、振り返ればそこに信頼があったという事です。決して崩れる事のない信頼がありました。人が心を重ねていくという事は信頼が生まれるという事なんですね。ごく当たり前の事なのでしょうが、10年たって信頼があったという事なのです。どんな信頼なのだろうと考えると、お互いの不幸を少しも許さない。そういう信頼なのです。裏切られる事も絶対にない、裏切るなんて考えられませんし、裏切る事は自分を裏切る事であり、自分が死ぬ事でもありますから裏切れない。そういう友情を確かめる10年でした。私はこうして沢山の言葉を駆使して信頼があったと語りますが、彼らは知的障害があるので言葉を駆使しては話しません。彼らは先程見て頂いたビデオの映像にあったような音楽会で姿、形でそれらを表します。

昨日、草地先生が今の世界には構造的貧困があると言われました。構造的に貧困者を必要とするように社会が存在しているので、貧困者に対して人間の持つ気持ちと優しさを物品援助に変えて、貧困者を救い出そうとしても事象はマイナスに働く事が多いようです。でも人の心は優しさをなんとか貧困撲滅に働きかけていくというのにうまく解消しないジレンマをお話になっていました。この構造的貧困を生みだしたいかにも貧困な人間の心があるわけですがその貧困な心よりもっと人の心の原初に近い人の心、構造的貧困社会を生み出してしまったその前の前あたりの自分達の思いや願いに立ち返る時に来ているのかもしれない。『あぶあぶあ』の周囲の人たちの持っている生き方、メッセージはひょっとしたら世界を変えるかもしれないと最近思い

ます。何故そう思うかという、裏切る事の出来ない信頼があるからです。ごく自然に信頼を持つ人達が信頼し合っているという姿を構造的貧困社会を生んだあたかも論理性の高い言葉を通さず、文字にも表さずに、饒舌に喋らずに、ただそこに居るだけで、接するだけで伝える力を持っているわけですから、世界を変えてしまう程の力をもっているのではないかと思うのです。

『あぶあぶあ』の演奏会をしている中でこんな事があります。「僕達より低い人達があんなに努力をして、あんなに出来るのだから、立派だね。僕らは何をしていたのだろう。努力しなければ。」という人達がおられます。そう思っている人達にとっては、それが真実です。でもそれにはどこかであの人達は出来ない人達だがあれだけ努力している。自分も出来ない事があったら同じようにすればもっと出来るようになると思って励みにされるのでしょうか。一生懸命努力している人を見て、自分はあの人達よりもともと上だからあの人達以上の努力をすれば自分ももっとよくなる考えると、これは構造的貧困を生んだ土壌につながるように思います。勘違いやすり替えがおこっているように思います。能力の少ない者が好きと楽しみとお互いの分かち合いの中でやって来たものが深まってくるという事は確かに人々の大きな励みになる事だと思います。でもそれには彼らの壮烈な努力を見逃しては駄目です。1曲覚えるのに1年かかり、すばらしくちゃんと合奏するのに3年はかかるのですから。間違わないでほしいのは、自分は能力があるからもっと上手になると思われる事、彼らを下にみしてしまうことです。演奏会を何年かやっているうちに彼らの表現する力がどんどんパワーアップして来ています。演奏をし終わりますと、そんなに技術的に上手ではなくても、彼らの演奏が聞くだけのものではなくて、耳の奥に残る強烈な喜びのメッセージというか、子供の賛美歌を100曲ま

めて1曲にしたような、喜ぶ為の心をかきたてるようなところがあります。演奏が終わってロビーに出た彼らに見ず知らずの方が「良かったですよ。今度はお友達も連れて来ますから。」と言われます。彼らも一応30歳の大人ですから「はい、どうも。」ともしっかり答えますが、やはりぎこちなさも多くありその方は途中でハッと気づかれます、彼らに障害があることを。来られていた学校の先生も「良かったなあ。」と感激されると「先生どうもありがとうございます。」などと立派に应对し、先生は一段と大人になった彼らに喜んで帰って行かれます。彼らは同じ場所を同じ時を共有した人と喜びを分かち合っていることで、同情などの感情を感じさせない演奏会をやるようになっていきます。彼らの熱気が演奏と共に障害者というカーテンをとり除き、我を忘れて居合わせた人々がお互いに喜びあっています。心を病む人も多い今の時代に彼らの力は大きな役割を果たす力の一つになるのではないかと、決して障害をもつ不幸な人たちが立派にも努力を重ねているのを見て、障害をもたない人が“励み”に思うという意味での感動ではないのだと私は感じます。それは人から人へ届く“楽しく生きる”という太古から人が人から人へと直接伝えた心のあり様、生き様の伝承の場合なのだと思います。私はそのうれしさの渦中において心のごちそうをもらっている楽しさをありがたいと思います。

人は夫々の時期に頂いたものを使う役割があります。皆さんはもっと若い人達と一緒に何かを積極的に語れると思います。皆さんの今持っているものはみんな他の人達からもらったものだと思います。今度それを子供達に上げなければいけないと思います。『あぶあぶあ』のみんなは知的障害がありますけれども、30歳という年齢になってごく普通にそれを人々に戻しつつあります。彼らも彼らの人生の中で役割を果たすべく、彼らに与えられ

たものを消化して他者に出し始めています。みなさんもきっとこういう風に自分に備わったものを周囲の人々に差し出して行くという人生を歩んでおられるのだらうと思います。私はこういうことは愛さなくては出来ないことだと思います。『あぶあぶあ』のみんなと居ると私はとてつもなく私自身が愛されているのを感じます。

ある時、私が怪我をして包帯をしていたのですが、1週間たって次の練習日の時、指はなおったかと聞くのです。夫と話しました。簡単な計算さえよく分らない彼らがどうして私さえ忘れていたような怪我を覚えていて、直ったかと聞けるのかと。彼らは脳みそでは覚えていないのです。心で覚えているのです。大事なことは知的レベルで覚えても忘れます。心で覚えているものは人間をいかに人間らしく支えるかということを感じます。父が亡くなったのはちょうどクリスマスコンサートの時だったのですが、演奏の前に話すときちゃんと演奏出来なくなるかもしれないので、ちょっとした怪我ということで休みました。ところが1曲終わるごとに「洋子さんどうした？」と聞いてばかりいたそうです。10日ぐらいして次に会った時にみんなにグルッと囲まれました。自閉傾向の子は離れたところでじっと私の目を見ています。普通の自閉傾向の人は目を他人となかなか合わさないので、

少し自閉傾向の説明をしましょう。自閉症の人達は感受性が乏しくて、どちらかと言えば人間とのコミュニケーションが嫌いか苦手だと思われがちです。無表情だったり、パニックを起こしたりもします。実は自閉傾向の人は他人の気持ちが非常によく分っていると私は思います。ところがその他人の気持ちに対して対応がうまく出来ないことで他人と視線を合わそうとしないことによって頭の中のパニックをコントロールしているように思います。その彼が私の目をじっと見ています。何か気付いているのだなと思いました。私は目で

「だいじょうぶ。」というのですが納得せずにだまってじっと見ています。それではっきり「敏君大丈夫よ。」と言うとやっと彼は視線を離しました。ところが練習が始まってはまだじっと見ています。それで本当は父が亡くなったという事を話しました。ダウン症の一男君は「だいじょうぶ、だいじょうぶ、人生は楽しくいきましょう。」と私の肩をだいて言い、別のダウンの女の子は「私のベットに寝かせてあげる。」と言います。自閉症の人はふつう手で触れたりもしないのですが、帰り道私の肩にそっと触れるのです。夫々の表現で私をなぐさめ力づけてくれました。多くの人が多くのを多くの体験を通していろんなアドバイスをくれますが知的障害のある人達も又自分の経験の中からいろいろと心尽くしています。たまたま知的障害があるとこちらが分からないことがあるかもしれないだけです。

人生を生きていくのに、ロータリークラブの信念もそうなのだと思いますが、人の幸せの中に自分の幸せがあるということを彼らは教えてくれています。幸せに嬉しいと思って生きようとするなら、「自分の持っている力を人の幸せのために遣う。」のはうれしくなる方法の一つだと思います。これは多くの人々の言うところです。人が生まれてから今日までそして21世紀になってもずっとそうだと思います。『あぶあぶあ』の彼らも自分の持てる力を人のしあわせのために使っています。

人間の中に自立という言葉はよく使われますが、自分の持っている力を人の幸せのために使うと言うのが自立の中で核になっていると思います。障害をもつ人の中には日常生活に介助を必要とする人がたくさんいます。そういう意味での自立は出来ない人もおられます。自分で働いて収入を得る事は出来なくても彼らは人を幸せにする事が出来ます。いつ誰にでも障害をもつ人生が訪れるかもしれません。しかしかなる状況にあっても人の幸せや自立は誰にでも必ず存在します。「人が

自立するということは持てる力を人の幸せの為に使う。」これが一緒に生きるということだと私は思っています。私はこれからの人生、きっと楽しいことばかりに違いないと思っています。いろんな試練、苦労はあると思いますが、私の持っている力を誰かのために使えるなら、不幸になるわけではない。『あぶあぶあ』の友だちを見ながら彼らのように生きれば不幸にならない。そういう人生が生まれて来た人々すべてに保証されていることを思います。自分の保証されている人生は自分の持っている力を人の幸せのために使えばうまくいくわけだと思います。

男と女がまず精神的に愛したいと思うところから始まる新しい人生があります。人と人が共に生きるということを考えてとき、その生活を鮮々しく支える源のところや土台とな

るところに、その男と女のつながりがいつも大きくくいこんでいることが多いと思います。

今回は地域における共生というテーマの中で、まず障害をもつ人、もたない人が一緒にそこにいるあたりまえの社会の中で私が生きて、人と出会い、感じてきたことを話させていただきました。その個人個人の背景にこれもごくあたりまえにある男と女の間について、そのいとおしさとむなしさにも似たへだたり、そのへだたり故に又一緒に生きるうれしさも湧いてくる、そんなお話を続けていたく思っておりましたのに、残念ながら時間がなくなってしまいました。ごめんなさい。また次の時にお話しできますことを願いつつ。ありがとうございました。



ま と め

国際ロータリー第2680地区パストガバナー

今 井 鎮 雄

私はこのRYLAで皆さん方といろいろ話をしたこと、あるいは今回の講師の草地先生、東野先生のご自分の経験を踏まえての話、そして皆さん方のフォーラムを受けて、まとめの話をするようになっております。

昨日までのお2人の話を聞いて私達はいろんなことを感じました。第一に共生について。世界的な視野、国際的な視野からの共生、地域社会の中での共生、あるいは個人にとって共生とはどういう意味を持っているかについて考えてほしいとお願いしました。どちらかといえば皆さんは身近な共生ということにもかかわらず、大きな戸惑いを持っておられるようでした。

1. 共生に対するイメージの多様性

共生については、世界的な環境破壊という大きな問題は大事かもしれないけれどもちょっと手が届かない、どうしていいのか戸惑いがあるってわからないという意見がありました。しかし、中にはできることから始めようと考えた人達もいました。中には教育のスタイルとかシステムをもっと研究してみる必要があるという意見もありました。また地域社会における共生を考える時に住民としての役割を考えたという班もありました。身近なモラルの問題について考えたらいいのではないかという意見もありました。これは教育につながっていきます。また福祉という言葉が使われていました。現在、福祉に対する考え方は大変多様になってきました。共生についても同様です。あるいは教育という言葉も国家という考え方についても大変多様になってきました。

そこでなぜこんなに多様化したのかということを考えておきたいと思います。

2. 人間社会の歴史的過程

アルビン・トフラーという人が1980年に『第三の波』という本を書き、日本でもベスト・セラーになりました。『第三の波』の中で彼は人間が文化を持った、言い換えれば人間が動物から分かれて人間として生活しようとした最初の文明、「第一の波」は、農耕文明社会だといっております。農耕社会というのは皆が一緒に田畑を耕したり刈り入れをするというように、農耕を中心に皆が力を合わせてやっていかねばなりません。そこでは村というものが中心となり、村の長老という大切な存在があり、また村をまとめていくための一つの秩序、秩序を守るための約束事があります。長老の経験は村を作っていく上で非常に大事なことでしたから、長老に対して皆は大変敬意を払っておりました。

人間が自分で文明を持ち始めたのは6～7千年前であり、チグリス・ユーフラテス、あるいは黄河文明の開かれたのはその頃です。長く続いたこの農耕文明社会から、人間は新しい文明を創造しました。これをトフラーは「第二の波」といっております。それは産業革命による産業社会であります。産業社会とは機械文明の社会であり、そこでは工場が作られ、農村から多くの人が都市に移動し、工場で働く人を中心にその妻子で構成された核家族が誕生します。そこでは家族が中心となった都市化が行われます。農耕社会では家を中心としてたくさんの家族がともに住んでいま

したから、特別に学校のようなところがなくても祖父母、伯父伯母といった人達や近所の人々からも日々の暮らしを通して教えてもらうことができました。したがって教育は「まねる」こと「学ぶ」ことでありました。産業社会になると家庭が個別化しますし、工場で働く両親をまねることでなく、学ぶための組織が必要となり、初めて学校という形を生み出すにいたりました。もっともこれより以前にも、例えばお寺やカトリックの僧侶のための学校というようなものはありましたが、庶民が学校をつくるようになったのは産業社会に入ってからです。産業社会を今後伸ばしていくための知識を教えなければならず、学校教育が誕生したのです。

アルビン・トフラーは更に新しい「第三の波」が今生まれつつあると言っております。トフラーは人類はまさに変化の時代を迎えた、農耕社会から産業社会に変わったのと同じように大きな変化が今来ていると言ひ、それを脱工業化社会あるいは情報化社会、高度技術社会と呼んでいます。この社会の変化は農耕社会が産業社会になったよりもっと大きな変化であると指摘しています。産業社会の中で私達が常識的に考える考え方を直線型思考といいますが、情報化社会、コンピューターの世界は指数型の思考、二桁思考の世界であるといえましょう。これは今までの考え方や世界とはまったく違ったものです。例えば公害問題にしても環境問題にしても、今から50年前まではあまり考えなくてもよかったです。汚水も海や川に流していました。ところがこの50年の間に、今のような指数的な発展の中では、これまで考えることのできない、質的にも違った大きな問題が出てきました。ポイントのひとつは皆さん方若者の住む世界は、私達がこれまで住んできた世界と今述べたような意味でまったく違う世界であり、私達は頭を切り替えて生きていかねばならないということです。考え方のずれということをここ

で申し上げておきたいと思います。

3. 発展の段階における共生

もうひとつのポイントを考えておきましょう。一昨日は草地さんが国際化ということ、地球社会の中における共生ということを考えて時、それは国が何かをするということではだめで、構造的な問題を含んでいる。構造的な問題を理解してもらわなくてはいけないと話をされました。言い換えると、工業生産を超スピードでできる社会と、片一方には太陽の光の射す時間だけ外で働き、夜になると寝るという生活をしている社会、この二つの世界があるということです。農耕社会が続いている社会と構造の違ってきた先進工業国の世界、その差はどんどん広がっています。富とかお金とか機会とかで測る考え方では、開発途上国と先進工業国の構造的な格差はその貧富の差がますます大きくなってしまおうということが問題として指摘されました。

一方、昨日東野さんから指摘された問題は、情報化社会であろうと産業社会であろうと農耕社会であろうと、基本的に人間は友人が友人としてお互いを認め合うこと。何ができるか、できないかではなくて、人間としてのあり方は何かという次元に立った時に本当の友達ができる。東野さんが「アブアブアの障害を持った青年達は私のいい友達です」と言われたことに私達は胸を打たれました。それは人間としての基本的なところで繋がっているからです。

しかし情報化社会、高度技術社会が技術的に成功してきた中では基本的な人間関係が疎外されつつあります。そこに住んでいる私達は人間をどう理解し、その抱える問題をどう解決していけばいいのかが問われています。さらに困ったことに、今まで自然は無限にあると思っていたのに、地球も資源も無限ではなく有限だとわかりました。このような大きな歴史的变化は私達の社会構造そのものを変化させ、したがって人間の生活構造や意識の

構造を変化させていきます。

たとえば一つは家族の問題です。農耕社会では家族というのは拡張家族、白川村のように大勢の人達が一緒に住んでいる社会。そこではその社会にふさわしい秩序がないとうまくいかなかった。お嫁さんの仕事、ご主人の仕事というように、それぞれに果たすべき役割がありました。その時代には男も女も田畑に出て働く。子どもは藁で編んだふごに入れて畦道に置いたり、少し大きくなると働いている親の近くで遊ばせたり、少し大きくなると親の手伝いをさせたりして育てました。手伝うことによって、親の仕事をまねることによって子どもも社会の一員としての役割を担う。ところがこれが産業社会になると、工場に近いところに家族が移り住み、お父さんもお母さんも働きに出ます。この社会が進み、働く賃金が上がるとお父さんだけが働けばよく、お母さんは家庭にいて子どもの面倒を見るというようになって、自然に男女の性別による役割が出てきました。産業社会という社会構造、社会の実態が、男女の性別による役割を生んでいったわけです。同時に子どもの教育のために学校をつくるようになりました。学校は読み書きや算盤を教え、新しい産業社会でより効率的に働くために学ばせることが新しい教育の目標でした。

しかし今の社会は動きが激しいものですから、家族の形態すらどういう形をとるのか、いまだによくわかりません。世界中の先進工業国の社会的なもっとも大きな現象は、家族の崩壊ということです。東野先生の昨日の話の中にも家族の形態が進んでいくと自分の親、兄弟から離れて他の親しい人と一緒に生活を始める、その単位が家族なのだとおっしゃいました。そこには男性と男性が結婚するというパターンだってありえますし、男女が3人集まって家を作るという形なども出てきたり、今はまだわからないいろいろなことが渦巻いています。こういう家族の形というもの

は昔から見ると基準が異なっています。これを今までの家族の基準から見ると家族の崩壊とも考えられます。

小此木圭吾さんという慶應大学の精神科のお医者さんが『家庭のない家族の時代』という本を書かれました。この本の最初のところにアメリカの映画のストーリーが引用されています。主人公はシカゴの有能な新聞記者です。ある時この新聞記者がコロラドの山の中に行き驚く生態研究をしている女性の生物学者を取材してきなさいという命を受けました。この新聞記者はコロラドに行き女性の生物学者の取材をしているうちに愛が芽生え、二人は結婚することになり、山から下りてデンプターの町で結婚式を挙げます。牧師が結婚の宣言をしたとき、二人は「ああ嬉しい、これでやっと離れて暮らせるね」と言いました。結婚をしていなかった今まではシカゴとコロラドの山の中で離れ離れで落ち着かなかったけれど、結婚したらその日から安心して離れて暮らせるというのです。牧師をはじめ結婚というのは二人と一緒に暮らすものだと思っている人達が非難すると、二人は「結婚というものはもっと精神的なものなのだ」と言って帰って行きました。この話は『家庭のない家族の時代』のプロローグに引用されています。

小此木さんは、私達は好むと好まざるとにかかわらずそういう生活をしなければならない時代になって来たと言っています。皆さんはへえーと思うかもしれないけれど、現実には私達の身边にもそういう事例がたくさんあります。現在ではもう単身赴任は珍しくなく、金曜日の夜の新幹線は故郷へ帰るサラリーマンで一杯というのが現実です。高橋展子さんという、女性ではじめて大使となった人がおられます。高橋さんは1950年に一緒にアメリカに勉強にいった姉の友人ですが、家庭的ですばらしいご婦人です。転勤のない技術者のご主人は東京に住み、奥さんである高橋展子

さんは大使としてデンマークに赴任していました。彼らの子ども達はそれぞれ留学していました。4人の家族がばらばらに違ったところに住んでいても家族といえるのだろうか。彼らには家庭はないけれども家族であります。今までの家庭のルールはそのような新しい社会では通用しないのです。こういう家庭が今増えており、一見それは家族の崩壊のように見えますが、新しい時代の家族のあり方がそこに暗示されているのかもしれない。『新家族の時代』を書いた菅原真理子さんは、これは新しい家族の創造への過程であると見ておられます。

『断絶の時代』という本で有名になったドラッカーは『あらたなる現実』という本を書きました。皆さんは工場では労働者が働いていると思われるでしょうが、今の工場を見て下さい。そこではロボットが働き、それを操作する技術者がいるばかりで、労働者はいなくなりました。新しい情報化社会では労働者ではなくロボットが働く社会になってきているのです。日本は飛躍的に生産力が上がって世界のトップを占めるようになりましたが、それは産業ロボットの数が世界中で最も多かったからだといわれます。世界の70%以上のロボットが日本にあったといわれております。世界で最も精度の高い時計もカメラも自動車も、ロボットの力によるものです。

では、このような社会の中で私達はどこで人間として自分を見つめることができるのでしょうか。産業を支えているのは技術者であって労働者ではない。医療を例にとっても、かつて病院でお医者さんが打診や聴診で診察するのにかわって検査が主流になって、病院に行くことは診察を受けるのではなく検査の結果を聞きに行くことなのです。お医者さんはデータの結果を見て診断を下すようになっていきます。すべてが技術者で構成されている地域社会では、非人間化という現象が起こります。非人間化という現象が起こると人間性を回復

することがむつかしくなりますので、精神科の分野が忙しくなります。私達の生活や考え方が変わってきたのは時代が変わったからだといわれますが、時代が変わるということは元に戻らないということです。昔のような秩序があったらと思うこと自体が間違いだといわれます。新しい社会の中の新しい秩序や新しい問題、新しい人間のあり方を考えなければなりません。

4. 新しい世界の中の共生

1985年にゴルバチョフがペレストロイカを言い、そこから回り舞台のように世界は変わって、私たちの世界はまったく違ったものになってしまいました。その下敷きになったのが、今のような基本的な変化です。例えばそれまで共産圏のスーパー・パワーであったソ連が、自由圏のスーパー・パワーであるアメリカと互いに冷戦構造の中で世界の仕組みを考えられたのは、ひとえに鉄のカーテンにさえぎられてまったく向こうが見えなかったからです。ところが偵察衛星ができて、観察したことをコンピューターで解析すれば鉄のカーテンで隠れていたソ連の力もすぐ明らかになります。その結果が、突然に起きたように見えるベルリンの壁の崩壊でありましょう。情報化社会が進展すればするほど、今までの認識が役に立たなくなってしまうということでもありましょう。

今までは国家というものを一つの枠にしておりました。これを私達は主権国家といたり、国民国家という言い方をいたしました。ソビエト社会主義共和国連邦、アメリカ合衆国、日本というように、皆一つの国です。この国という考え方が産業社会の中では最も効率的でした。農耕社会では国についての考え方はもっと細分化されていきました。日本では1868年に大政奉還が行われましたが、それまではいくつもの幕藩にわかれ、藩主がおり、町民がおり、農民がおり、それぞれの藩によって政を行っていました。ドイツも同様にたく

さんの国に分かれ、それぞれに王様やお姫様がいたがゆえにおとぎ話が生まれたのです。ドイツが連邦国家となったのは日本が明治政府を作ったのと2年ほどしか違いません。イタリアも同様です。いいかえればその頃、世界の国々が国民国家という形を整えてきたのです。西欧近代の成立であります。

では情報化社会といわれる次の時代はどうか。民族とか自分の部族を大事にしたい。例えばチェコスロバキアは、チェコとスロバキアとが一緒になって主権国家をつくっていましたが、今ではチェコ人とスロバキア人がそれぞれ自分の民族を大切に考え、自分のグループを作りたいと2つに分裂しました。東欧諸国がいくつもの国に分かれる理由は自分の民族や部族を大切に考え、自分たちの仲間を作りたいということです。そういう困難が一番深刻になったのは1989年から現在までであります。カンボジアの問題についても、あるいは南北朝鮮の問題についてもいろんな問題が起こっております。

シュレジンジャーという歴史学者が『アメリカの分裂』という本を書きました。これには「多元文化社会の悲劇」という副題がついています。今アメリカは大変な危機に遭遇しております。ことに1991年頃から大きな危機に見舞われました。ロスアンジェルスで黒人が警察官に殴られ、その裁判結果への不服から暴動が起こったことは記憶に新しいところです。アメリカは今、アフリカ系のアメリカ人、アジア系のアメリカ人、中南米系のアメリカ人等々が、それぞれに自分のグループのアイデンティティを望んでいると言い出したのです。アメリカはこれまで多元的社会、いろんな国の人がある文化を持ってアメリカを作ったということが国としての特徴であり、誇りでした。それが、民族によって違うということをはっきりしようと言い出しました。そのことをシュレジンジャーは嘆いて『アメリカの分裂』という本を書いたので

す。

一方経済の問題を考えると、これはまた違ったあり方で、なるべく経済を効率的にするためにはブロックを作ろうという動きが起きてきました。ヨーロッパでは国は違っても経済は一緒にしていこう、合衆国のような形ではないけれどもECといった形で皆で集まる仕組みにしようじゃないかといっています。こういう状況が今生まれております。

さて、このような時代に私たちはもう一度考えておかなければならないことがあります。昨日、フォーラムで親の教育の問題が出てまいりました。新しい時代のマナーを身につけよ、と若い人達から言われました。こういう変化の中で教育の新しいあり方が求められ始めました。日本が明治になって主権国家として統一され、新しい国造りを始めた時、今まで知らなかった西欧諸国の技術、知識を身につけようと外国から技術者を呼んで技術を教えてもらいながら国造りをしました。そのときの教育の目的は「富国強兵」という言葉で表されるように、早く国を富ませ、強い軍隊を持ち、資本主義の社会を守れるような国を作ること。それに必要な国民を作ろう。まず最初に今までばらばらだった藩から今度はひとつの国であることを意識させるために国が小学校を作りました。教育の焦点は、読み書きそろばんを教え、国のことを考え、家庭を守る人になるように教えることでした。江戸時代(1650年)において世界で最大の都会は江戸で、当時江戸はすでに50%以上の識字率がありました。その頃ロシアの識字率が17%でしたから、日本がどんなに高いレベルにあったかがわかります。それが明治になって開国した時、全く違った西洋社会の文化を受け入れる基礎となったのです。外国の人が来た時に驚いたのが日本人のレベルの高さであり、礼儀の正しさでした。

ところがそれから300年足らず、1945年昭和20年に日本が敗戦し、民主主義、皆が一緒

に生きようという社会を創ること、一人一人の人間を幸福にすることが教育の大切な目標となった時、富国強兵の姿勢は民主主義を学ぶ姿勢へと変わっていきました。父兄会という名前であったものがPTAという名称に変わったのもこの頃です。しかし1957年に、ソビエトが人類初の人工衛星「スプートニク」の打ち上げに成功しましたが、これにはアメリカをはじめ世界はびっくりしました。ソ連に遅れてはならないと若者に大学に行くことを勧め、勉強をさせました。この影響を日本も受けて同様になり、文部省は私学に大学を創ることを要請し、日本の大学生の8割は私学に学ぶことになりました。言い換えれば私立大学が国の代わりに補助金を貰いながら努力してきたというのが、戦後の傾向でした。

しかし今この教育のあり方に疑問が持たれ始めました。卑近な例を挙げれば、神戸大学では教育学部、教養学部を廃止して人間発達科学部、国際文化学部という学部を新しく作りました。情報科学を勉強し、事実上一つになった世界で私達がどんな役割を担えるかを勉強しようという学部です。再来年関西学院大学でつくる学部は総合政策学部といいますが、エコロジーを政策的に考え、地球の問題をどういうふうにかえたらいいかを考えるものです。文部省はかつてのように時代の必要に応じて大学をコントロールするのではなく、各大学が考えればよいというふうに変わってきました。ですからこれまでのように、よい大学を出ればよい会社に勤められてよい生活ができるという考え方はもう成り立ちません。その結果、学校の週5日制、偏差値教育の是正、業者テストの廃止がいわれ、今は少し混乱を起していますが、方向としては新しい時代の新しい教育が求められているのであり、どんなシステムを創り上げるかが問われているのです。その際、一番大きな問題は高度情報化社会になれば国の枠を越えて、世界との共生を考えなくてはならないということです。

そのためには今までのように、どうすれば自分の国が儲かるかとか、こうすれば私の国にとって損だなどとは言っていられなくなるでしょう。世界の人々と一緒に生きるためには、どのような役割を私達が果たさなければならぬかが問われるようになりました。

5. 21世紀は共生を必要としている

1993年3月17日の新聞の論説によりますと、環境政策における政治的意識について、日本の環境政策が通産省と環境庁とではポリシーが統一されていない。環境庁は世界を視野において日本の国の環境政策を考えろといっているのに、通産省はなるべくエネルギーを節約して日本の経済を慎重に守っていこうといっていて、国の政策もはっきりしていない。このように二つの省間が分裂していることはおかしい。環境問題は国のレベルではなく、世界のレベルで考えなければならない。日本はもう少し広い視野を持ちなさいと書かれております。もう一つ、3月15日の新聞の論説があります。緒方貞子さんという国連難民高等弁務官—この方はもとロータリーの奨学生でロータリー財団から奨学金を受けて立派な学者になり、難民問題に取り組んでおられます—が国連の欧州人権委員会でスピーチをされた。そのスピーチについて犬飼美智子さんが「緒方さんの人権に共鳴するが、人権という問題に対しては皆が違った考え方を持っている。人権というのは優れて政治性を持っているから、皆迷っている。けれども本当は人権とは何かというと、一般国民が思いやりと名づける心的態度こそが人権思想の基礎であろう」と書いておられます。昨日東野さんが、私達は互いに相手のことを考えて皆が私の友達だという思いやりの中から世界の人権にかかわることができると話されました。はからずも、そういう考え方をもう一度考えなければならないと、この二つの新聞の論説は述べております。

我々ロータリーはこれからも一生懸命やっ

ていこうと思っております。ロータリーはつい2年ほど前バーツラフ・ハベルという方にロータリー国際理解賞を差し上げました。彼はチェコスロバキアの大統領でした。今はチェコとスロバキアが分かれたのでチェコの大統領ですが、彼は政治家でなく劇作家です。全く政治に素人の劇作家が圧倒的な人気で大統領に選出されました。彼が言うのには、人間の世界は二つに分けることができる。一つは我々が生きて、生活をしている場であり、これを生活世界と名づける。この生活世界では我々は一人一人の素朴な幸福を願っている。もう一つは皆が豊かになるために一つのシステムを創った。このシステムの世界とは経済とか政治、科学というものである。我々はこのシステムを使って自分たちの生活を豊かにするため努力をしてきた。ところがいつの間にかこのシステムは非人間的な世界となり、生活世界を脅かすことになってきた。例えば自動車を大量に生産することについて皆は否定しなかったが、その自動車の排気ガスでオゾン層が壊れ、皮膚癌が増えることになれば困る。温暖化現象で極地の氷が溶けて海面が上昇すれば多くの土地が海に沈んでしまう。

そうなれば人間の生活そのものが脅かされることになる。そこでハベル大統領が「皆さん、正気に戻ろう。世界とは何か。本当の人間の幸福とは何か、人間を支えるシステムが勝手に一人歩きするようなことはやめさせよう」と呼びかけております。「正気に戻ろう！それはずいぶん遠い道程であるかもしれないが、やろうじゃないか」と彼は言っております。そしてロータリーはその人に国際理解賞を差し上げたのです。

いま私達は同じことを皆さんに申し上げます。皆さんに国際理解賞を差し上げたい。そのためには皆さんに正気に戻っていただきたい。それは素朴なことなのです。人間がどうすれば人間として豊かになれるのか？それは東野さんがおっしゃったように、障害者も健全者もなく互いに友情を持ち、時がゆっくり流れる中で純粋に生きていく。その感覚を世界の友人のところまでずっと伸ばしていくことが共生ということではないでしょうか。

昨日、一昨日の私達に対するメッセージはそういうことを言っているのではないかと思います。



〔フォーラム〕

リーダー

国際ロータリー2680地区パストガバナー
深川 純一

テーマ（自由選択）

「地球における共生」 貧困・環境保全

「地域社会における共生」 男と女の問題・老人と子供の問題

「個人における共生」 共生を妨げるものは何か

リーダー 時間が参りましたのでフォーラムを始めたいと思います。

今日午後、各班でバズセッションをして頂きました。色んなご意見があらうかと思いますが、ここでA班から順番に前に出て意見のまとめを発表して頂きます。

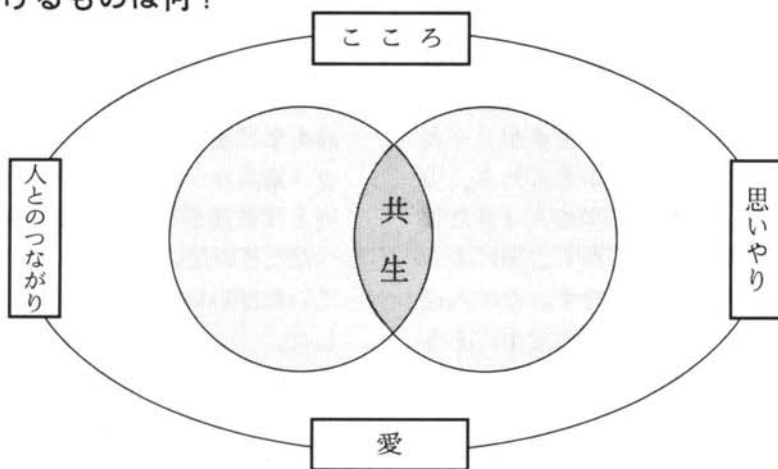
その後で問題点についてフロアーから全体としてのご意見をお伺いしたいと思います。

それを踏まえて、皆さん方が地域に帰ってお考えになる時、実行していかれる時の為に問題点を今井先生に総括して頂きます。ここではどんな意見でも結構であります。自分の意見を出すという事が、みんなが学び合う糧になるという気持ちでご意見を出して頂ければと思います。では先ずA班から発表をお願いします。

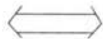
A 班

「個人における共生」

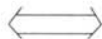
共生を妨げるものは何？



個人との共生



地域における共生



地球における共生

共生を妨げる問題点

- ◎「同情（かわいそう・気の毒にという感情）」
- ◎「物事に対する先入観、固定感、偏見」
- ◎「ブームにしてはダメ」
- ◎「自己中心的な発想」

共生において必要な事

- ◎素直さ
- ◎GIVE & TAKEの姿勢
- ◎意識向上的な競争社会
- ◎国民的レベルでの意識改革



A 班 A班は3つの中から「個人における」共生についての問題点をクローズアップして、バズセッションを行いました。前に書いたものを見て頂ければ分かると思いますが、一つは自分達で考えたものを図的に説明したもので、もう一つはその内容を簡条書きにしたものです。先ず最初に個人の共生について沢山の中から四つの妨げを挙げてみました。

☆ 同情、可哀想という事

可哀想だけで何もしようとしない。何かしてあげる事がないのか、助けてあげようと一歩進む事が共感ではないのか、本当に必要なのは同情ではなくて、共感ではないかと話し合いました。

☆ 物事に対する偏見

物事に対する先入観、固定観念、偏見について考えた例を少しあげてみますと、ご飯を食べる時、みなさんはお箸を使いますが、一人だけ手で掴んで食べている人があったら、少しびっくりします。これを大半の人はきたないとか、不潔に思います。しかし、国によっては手で食べる国もあるわけです。その人達は不潔なんて思ってないと思うのです。そう言う固定観念も共生を妨げているのじゃないでしょうか。

☆ ブームにしては駄目

今、福祉活動は活発化していますが、それを一時的なブームにしては駄目という事を話し

合いました。

☆ 自己中心的な発想

人は皆自分が可愛いというエゴがあると思うのです。子供が可愛いと思っても最後には自分が一番可愛いと思うのです。それは共生の妨げと言えらると思うので、絶対それを無くす事は出来ないけれども少しでも無くして、他の人の事を考えるようになったら、共生に近づくのではないかなと思います。

次に共生においてどういう事が必要なのだろうか、最低限これ位の事をしていかないと共生という事は出来ないだろうという事について話し合いをしました。

沢山あった中でピックアップしたのですが、共生において必要な事というのは、我々個人の心の問題だと思います。先ず課題となるものを挙げました。

☆ 素直さ

例えば私達が子供の時に持っていたような、へだたりのないつきあい。そういう態度を持っていればいいのじゃないかという意見が出ました。

☆ Give & Takeの姿勢

共生というのはTakeだけでなく、Giveつまり与えるという事があって初めて成立するものであって、例えば親切にして頂いた事に対して感謝の言葉1つでも、それは素晴らしい

いコミュニケーションになると思います。

☆ 意識向上的な競争社会

現在の学歴社会とか競争社会で出来る事は何かという事で考えてみました。

それは意識向上の競争に置き換える、つまり徳を高めるといふ事を子供の頃から競争させていくという事は人間として大切じゃないかと話し合いました。

☆ 国民的レベルでの意識改革

昨晚、私達はキャンプファイアーをしました。RYLAを受講して心に灯したものをみんなで集めて大きくして、夫々の地域に帰って燃やしていこうという事です。

まとめ 例を四万十川にとっても、日本最古の清流と言われている四万十川は全長300キロ近くありますが、ダムが一つもございません。そのダムを作らなかった為に自然が残ったと言われています。しかし、10年前、20年前の川と比べれば川は確実に汚染されています。昔はよく採れていた鰻が全然採れなくなっています。やはりどこかのシステムが狂って来ているという事です。今日私達は個人における共生を妨げるものは何なのかという事についてバズセッションを行ったのですが、それは一番難しいような気がしたのです。しかし先ず自分の所に意識を持って来ないといけないという事になりました。共生と言えど先ずどういう事をイメージするだろうとみんなで考え、出て来たのがこの四つでした。心、思いやり、愛、人とのつながりを私達は共生という事から連想します。こういうものがあって人と人との輪の重なり合った所が共生じゃ

ないかと思いました。一人一人の共生が出来れば、自づから地域に於ける共生は出来て来るだろう。それが出来て来ると、そこから国全体の動きにそして地球規模の動きに発展していくだろう。今日も話の中で出ましたが、何かしないといけない、何かしてあげたいという気持ちは皆さんお持ちだと思います。それをどうしたらいいのだろう、どうすればそういう方法が生まれるのだろうという事が分からないが故にジレンマに陥ったり、身動きがとれない状態になっているのだと思うのです。日本の平均年齢が80歳といひます。80年で出来る事という、ごく僅かな事です。でも毎日こつこつやると以外に大きな事になるのではないのでしょうか。しかし、200年300年と生きるわけにはいかないので、子孫に引き継いでいく事になると思うのです。昨日、班で話しましたが、なかなか実行の出来ない事を言っても仕方がないので先ず身のものから始めよう。例えば空き缶をひらうという事でも、みんなで有言実行しながらその輪をひろげよう。有言実行というのは簡単でも、なかなか難しい事だと思います。それならばこのRYLAで聞いたり、話したりした事を、自分の住む社会に帰って、それを話し、こういった事をしようじゃないかと。昔、日本で言った沈黙は美德という事は終わったと私は思います。今は自分の持っている意見というのを主張して、何か一つでもいいから変えていこう。そうする為には先ず自分からやっといこう。個人に於ける共生とはほんの少しの努力から共生が始まるのだと思います。

B 班

「個人における共生」

現状（妨げるもの）

- (1) 時代の流れに流されている。
利己主義（思いやりの不足）

- (2) 情報が多すぎて知識が少ない。(誤った知識)
- (3) 周囲の人々の目を心配する
- (4) その他

倫理観、欲、お金、施設、言葉の違い、仕事、家庭、規則・ルール、ゆとりの不足、プライドが高い、時間、先入観、価値観の違い



方法

- (1) 知識、理解を深める。
 - I 学校教育、マスメディアと情報判断能力
 - II 機会を積極的に利用する。
- (2) 接して相手の気持ちになってみる事によってお互いに理解しあう。(信頼関係を作る)
- (3) 自分の出来る事から始めていく。
- (4) みんなでやれば恥ずかしくない。
- (5) 施設や環境の充実(外国人、身障者)

93'3.25~3.28YOSHIMA



理想

- (1) 健常者と身障者が同じ社会で共に生きる。(相手の価値を認めている)
- (2) 差別意識がない。
- (3) 正しい知識による思いやり。
- (4) 共生の自覚を自然な形で持っている。
- (5) 信頼関係が出来ている。

B 班 共生を問題として取り上げなければならぬ日本の社会を見つめてみますと、今の子供達をとりまいて環境社会は人と人との横のつながりは少なくなり、世界中から情報は一杯流れて来る情報社会です。環境破壊のお話を伺い、具体的に数字をあげて言って頂いたのですが、あまりにも現実に捕らえられていないので、実際身近に迫って来ないとなかなか解らないのです。痛みたいなもので解った時にはもう手遅れという状態なのだろうと思います。そういった事をどの規模で考えようかとみんなで話し合った結果、やはり先ず自分に返していこうというわけで、個人における共生を取り上げました。先ず現実を知る為に現状という項目を上げました。表の中で、情報が多過ぎるというのがありますが、情報は確かに多いのですが、誤った知識として把らえている点が多いと思います。人の目を気にするというのは日本人の悪いところだと思います。

現状を見た上で理想的な共生を考えてみま

すと、障害者と健常者が同じ社会で生きるには、相手を認めるという事だと思います。差別意識をなくし、正しい知識を得る事が思いやりにつながっていくと思います。共生という事を自然な形、お友達同志というような、信頼関係のある形で持ちたいものと思います。方法としては、行政その他でも色々考えていると思います。十分ではありませんが、B班でも考え、話し合いました。

正しい知識を持つには学校や職場によって知識や理解を深めていく事が大切であり、信頼関係を持つ為には先ず相手の気持ちになるという事だと思います。例えば、東南アジアの国に中曽根首相が立派な建物を作ったが、それが全然使われていないという事は、本当に相手の困っている事が分からずニーズに合わないという事ではないでしょうか。

今回RYLAセミナーが何故20歳以上でないといけなのだという事を考えた時、これは私の意見ですが、多分選挙権の問題だろうと思います。国際問題とか、環境問題になっ

て来ると、国民の意見というものを反映していくにはそれを代表してくれる代議士を国会に送り出さないといけませんし、投票権を持っているという事は大切な事だと思います。

又自分の出来る事からという事では、やはり自分の職業を通して自分の身近にある事をきちんと見つめて、職業人の使命というものをそこできっちりやっていく。ごまかしはしない、不正はしないというような事が大事ではないかと思っています。昨日カウンセラーの方から聞いたのですが、ロータリーも同じように職業奉仕という事があるそうで共鳴するところがありました。

みんなでやれば怖くないというのは、こういうセミナーを通して何か一つの目的なり、心掛けなどを持った人が多くなって来ると、一人ではなかなか出来ない事も二人、三人となれば出来ていくと思います。

最後に施設や環境の充実というのがありますが、施設と環境の二つに分けて考えました。我々が取り上げた個人における共生には理想と現実の間に色々のギャップがあります。そのギャップをうめてくれる総てのものとは限りませんが、我々の考えた方法というところにあたると思います。

リーダー ありがとうございます。今の発表について何かご質問はございますか

発言者 具体的に何か問題があって、これをどうしたらいいかというような話し合いから結果として、こういうまとめをされたと思うのですが。もとの問題点というのが分からないのですが。

B 班 今からお答えする内容はB班の全員の考えになっているかどうか分かりませんが、個人的な事でお答えしたいと思います。大きな流れというのは環境の問題でしたが、私達が子供達に譲り渡す時にこのままではあぶないという事。もう一つは、これだけ豊かになったのに、なかなか豊かさを感じられないという心の問題もあります。この二つが大きな問

題点の根本としてとらえているものです。

発言者 方法論のところはかなり展開されると思うのですが、今発表されるのを聞いて、結構行政だとか、市民レベルでという考え方がありましたが、例えば昨日の草地先生のお話では国がという事ではやっていけない、だから我々がやっていくというところをすごく感じたのですが、B班でもそういう意見が出たと思うのですが、貴方なら国の行政というものを離れてどういう風に来れるのかという事をお聞きしたいと思います。

B 班 行政に関しては少し大上段に構えたところがありましたが、あくまでも下から上への話であって上から下への話ではありません。行政というのは国全体であるとか、大きな規模でどうするかというような事であると思うのです。こういう大きな問題とあと一点、自分の地域や組織の中で色んな役割があると思うのです。その中で自分の使命を果たしていく事が地域や自分が属している組織の中で何かの形で浸透していけば、それが又共生という事につながると思うのです。方法論については我々は五つの事をあげましたが、本当にこれでいいのかという事についてはもう少し検討なり、実際にアクションをしてみないと、私自身もこの内容だけではきれいな事に終わってしまうのではないかという危惧があります。しかし、先程も申しましたように、自分の職業の中で使命を果たしていくという事は、あたりまえの事をしていく事であって、我々が急に発展途上国に行って何かするという事は出来ませんが、行政というところから視点を変えて周りからやって行きたいと私は思っています。

発言者 草地先生のおっしゃっている中で他力本願的な、誰かがやってくれるというのが、どこかに見えて来るというのではおかしいのではないかという事が出て来たので、核心的な事が聞きたいと思ったのです。

リーダー 大変大事な事ですが、内容につい

C 班

「地域における共生」

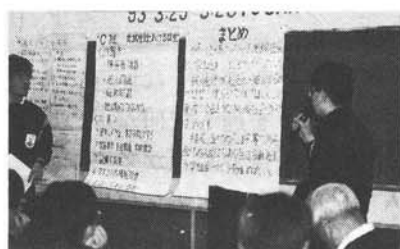
《問題点》

- ◎障害者問題
- ◎老人問題
- ◎同和問題
- ◎地域のつながり



《対策》

1. 絶対に出来ない事を手助けする。
2. 家庭教育、社会教育、学校教育
3. 設備の充実
4. マスコミの情報提供
5. 意識の改革（人間性）



ま と め

弱い立場の人々が地域社会に溶け込むにはどうしたらよいか。

彼らを地域社会から追いやるのではなく、彼らが「こうしてほしい」と発言できるような地域社会作りをめざす。

結局、全ての人は平等である。

全ての人がよりよく生きられるような社会づくりを進めたい。

C 班 C班の発表を致します。私達C班では地域社会に於ける共生をテーマに考えました。このテーマが何故上がったかと言いますと、色々な意見に別れましたので、単純に多数決としました。

先ず地域社会に於ける共生という事を各グループで話し合っ、色々出た中でC班としては呈示したように四つの問題にまとめました。これらの問題に対応する共通の対策として五つにまとめました。

1. 絶対に出来ない事を手助けする。例えば身体障害者の方で車椅子を利用しておられる場合、階段は上がりません。その場合の階段の上り降りを助ける。

食事をとる場合、スプーンなどにより動く

手で食べられるけれども、時間がかかって気の毒だから助けてあげようというような事は障害者の方に対して大変失礼じゃないかという事です。時間はかかっても自分が出来る事をやるには手伝わぬ方がよいのではないか。お年寄りも同じ事で、何もしないでじっとさせておくのでは年寄りにとって生きがいもなく、可哀想だと思います。どんな場合も出来る事は自分でやる、それが必要ではないかと思います。

2. 家庭教育、社会教育、いろんな場面で教育になる事があるのではないか。

例えば同和問題にしても、子供にそういう事を教える必要があるのかどうか。

今まで知らなかった事を教えた事によって、

かえって部落差別になるのではないかという意見も出ました。私は中学校で教師をしています。私自身最初はそういう気持ちを持っていました。しかし、何も知らずにそのまま一生を終えるのであればいいのですが、必ずどこかの段階でどこからか歪んだ知識が入って来る可能性が高い。ですからその為にも小学校、中学校の段階で正しい知識、差別はこういう風にして生まれた、絶対してはいけない事なんだと正しい知識を教えれば、大きくなって、間違った考え方や行動をシャットアウトする事が出来るだろうという事です。教育をしっかりする事は大事な事だと思います。家庭教育ではお母さんが大きな比重を占めているのではないのでしょうか。又近所の大人が色々な事を教える場合も多いと思います。

3. 設備の充実。障害者問題にからめてみますと、点字の表示とか、盲人用の信号機、車椅子などの設備も整って来ていると思います。又生活環境の悪い所などを整え、充実させていく事も大事だと思います。唯設備の充実の中で問題になるのは、老人ホームが建てられ

■ ま と め ■

書いてあるとおり、弱い方については地域社会に溶け込むにはどうしたらよいか。彼らを地域社会から追いやるのではなくて、こうしてほしいと彼らが堂々と発言出来るような地域社会を作る事を願っている事です。全ての人は平等であり、全ての人が堂々と生きられるような社会を作る事が大切と話し合いました。一番メインになって来るのを挙げたいのですが、C班では沢山の意見が出て一つだけを挙げられない状況でした。もしこれに関して話したいと思われる方は朝まででもC班のキャビンで話し合いたいと思いますので来て下さい。

話は変わりますが、人生では体験を通して色々な事を得ます。今回RYLAセミナーに参加して思った事をC班を代表して言ってみたいと思います。本を読むのも大事なんです

た、障害者の施設が建てられたのはいいのですが、それが普通の人々が生活していく所から離れた遠隔地であったりする事もある。それは差別につながるという意見もありました。

4. マスコミの情報提供。生活の中で実際自分が見た、聞いたという事は少ないと思います。例えば、独居老人が誰も知らない間に亡くなっていたとか、今日の東野先生のお話のように障害を持った人達が頑張っているとか、テレビや新聞等マスコミで知らせる事によって情報を受ける方は、可哀想だとか、頑張っているんだとか意識を多少なりとも高めていけるのではないかと思います。

5. 意識の改革。例えば盲人用の信号機を使うのは盲人の方だけです。健常者は口には出しませんが、少数の人の為に立派なものを作っているという意識を持っている場合があると思います。これで盲人の人は助かるだろうか、うれしいだろうかとか、自分で活動が出来てよいとか、自分で意識をいい方に持っていけるような自己変革、意識の改革も大事ではないだろうかと話し合われました。

が、友達同志や会社の仲間にもこのような事をみんなと一緒に話を出来ますか？世間体を気にしませんか？同和問題というのも各県においてはかなり積極的に取り組んでいる所もあります。本も沢山出ています。でも差別というものは実際なくなっておらず、数多くの問題があります。私達はこのRYLAでそういう事も含めて、人間本来大切なものを学んだような気がします。この3泊4日で学んだ事を地元に戻っていかにかに他人に話せるか、広められるか、地域社会で本当に交流出来るかという事も頭の中において、考えてほしいと思っております。我々のテーマは地域社会における共生としましたが、決してそれだけじゃなくて、本当にお隣のおじさん、おばさん、子供から全人類にいたるまで、又動物も植物も鳥もみんな共生していく事が出来たらと思

います。そしてそればかりではなく、男と女
の関係もうまく共生出来たらと思います。この
RYLAに参加出来て、私自身今まで機会のな
かった発表というような体験も、C班の励まし
によって出来ました。こういうちょっとしたふ
れあいと言うのが、非常に素晴らしい事だと思
います。みなさん地元に戻られたら、その感慨
を実際に議論出来る友人になってあげて下さい。
リーダー 今の説明で分からない所のあった
方はご質問下さい。

発言者 同和に対する教育を学校、社会、家
庭と別の項目になっていますが、大人に対す
る教育はどうなっていると考えられましたか。

C 班 子供のうちから学校でも家でも地域
でも前向きな教育をしておけば子供が大き
なったら次々又自分の子供に伝えるだろうと
思うのです。

発言者 (R) 質問ではなく、確認ですが、
同和問題という言葉の意味なのですが、私の
聞いたところではみんな部落差別問題イコ
ールと考えておられるようですが、部落問題
イコールではなくて、差別と言うものを考
える事が同和問題だと私は聞いておるの
ですが。

C 班 これは部落差別についてです。

リーダー 外にご質問がなければD班にす
ずんで頂きます。

D 班

地域社会に於ける共生

地域社会とは

地域を構成するもの (例) 子供会・婦人会・自治会
子供を中心に地域社会とのつながりが少なくなっている。

共生とは

- | | |
|------------------|----------|
| 1. イソギンチャク・クマノミ型 | (相互利益) |
| 2. コバンザメ型 | (片方のみ利益) |
| 3. 寄生虫型 | (片方のみ損) |

具体的には

ボランティア活動 NGO、福祉、自然保護
参加者全員が楽しく、重荷にならないことが基本であり、継続していくことが大切
ボランティア活動を広げていくことも目的とする。

東野さんの活動

健常者と障害者との接点を持ち、障害者に生きがいを与えている。

ロータリーの活動として期待できるもの

- ◎ ごみ処理、リサイクル、捨て犬などの問題を取り上げてはどうか
- ◎ 手話を通して障害者とのつながりを持つ

共生を実現するために

- | | |
|--------------|----|
| 1. 個人のモラル | |
| ↓ | 個 |
| 2. 仲間、団体での活動 | ↓ |
| ↓ | 全体 |
| 3. 活動の拡大 | |

正しい情報を得て、判断することが大切。



D 班 D班では先ず話し合いに入る前に4グループに分かれ、夫々が地域社会に於ける共生について考えるという形ですすめました。その結果として以上のようなものが出たわけですが、十分な時間がなくて、はっきりとした1本の線が出たわけではない事をご理解ください。先ず地域社会における共生について四つのポイントに絞って考えてみました。一つは、地域社会とはという事の意味とはなんだろうか、その手段としてボランティア活動だという事。ロータリークラブの方でも共生という事を取り上げておられるようですので、ロータリーの活動として私達が期待しているもの、最後にまとめのような感じで共生をひろめる為にはどういう手段が考えられるだろうか、そのような形にして考えてみたいと思います。

先ず地域社会とはなんだろうという事を話し合ってみて、子供会とか婦人会とか自治会はどこでもあると思います。その他学生の方でもバイトとかサークルというのが一つの社会になるのではないかという話になりました。地域において子供を中心に地域社会とのつながりが今はだんだん少なくなって来ているのではないかという話も出ていました。

次に共生とはなんだろうかという話になって、自然界の事を例に考えてみました。自然界にも色々な動物達が住んでいます。イソギンチャクとクマノミの関係で、イソギンチャクに魚が近づくと毒のようなものが出るらしいのですが、それはクマノミにはかからないそうです。イソギンチャクの周りに他の魚が寄って来て、イソギンチャクは魚を取る事が出来るし、クマノミはイソギンチャクによって他の大きな魚から食べられる事もなく、お互いがお互いを助け合って生活します。二番目はサメの下に小さい小判ザメと言う小さいさめがいます。サメ自体は何の利益もありませんが、小判ザメは鮫と一緒にいる事によって敵から自分を守る事が出来ます。

もう一つは昔は人間の体に寄生虫がいる事が多く、この寄生虫は自分だけでは生活出来ないのですが、動物を頼る事によって自分が生活をしていきます。人間とは全然関係ないように思いますが、これを自分達の身の周りの地域に比べてみますと、お互いが他人と生活していく上でそういう事も行われています。例えばみんなで溝掃除をしましょうと言われてたら、自分の家に直接利益があるわけではない所でも、その村にとっては利益となるし、人の為に役に立ちます。

この三つですが、人の心の持ちようによっては三番が二番にもなるし、一番にもなります。三番も単なる慈善で終わる事もあるし、自分が納得する事によって二番、一番ともなるわけです。続いて地域社会の共生の手段の一つとして、ボランティア活動を考えてみたいと思います。一口にボランティア活動と言いましても沢山あり、NGO活動、老人福祉障害者福祉活動、献血なども一つのボランティア活動だと思うのです。自然保護に関する活動等色々あると思います。このセミナーに参加しておられる皆さんも何らかの活動をしておられると思うのですが、こう言うボランティア活動をしていく上で、俺はこれをしてやっておるんだと考えていますと、長く続かない、疲れの方が先に出てしまうような気がします。又相手にもそういう雰囲気は伝わりますからだんだんいづらくなると思うのです。ボランティア活動をする上で、参加者全員が楽しく、重荷にならない事が大切ではないかと思います。大きな活動でないにしても、続けていく事が大事だと思います。そしてその活動を広げていく事も大事ではないかと考えます。

ロータリーの活動に私達が期待している事に移りたいと思います。我々の囲りにはごみ処理に関する問題が沢山あります。一口にごみと言っても焼却してしまうものと、修理してリサイクル出来るものがあります。そういう事をロータリーのようなところでもっと

組織だってやれば大きな事が出来ると思います。この頃リサイクルバザーもよく行われますが、家庭用品ばかりで若いものは来ません。高知市では毎週日曜に日曜市をやって県外から来る人も沢山買い物をして行くので市は結構うるおっています。過疎の所にはこういうのもいいと思います。私の家は神社でそこに動物を捨てに来るので困っています。そういう事の対策もロータリーでも考えてほしいと思います。自分達の班で福祉という事について考えている時、大変静かになってしーんとした静寂が訪れました。福祉とかボランティアは若い者がやるべき事ではあっても、若い者の好きな事ではないのです。例えばバンドを作って儲けたお金で何か福祉に役立てるといように、楽しみながらやる方が本当の福祉ではないかという事です。ロータリーのサポートを受けてローターアクトの人達が色々な国や地方のローターアクトと組織の中で楽しみ、交流出来るのは非常にいいなと思います。あんまり堅苦しく考えないで、楽しくやりたいと思います。

共生を実現する為にといい所に入ります。私達はこの地域社会に住んでいる一人の住民ではあります。その一人として私達はいったいどうする事が出来るのか？何をやる事が出来るのか？する事があるのか？について考えを發表したいと思います。私達は一人では大きな事は出来ません。身近な事からやり始めようと言うので、若い私達に出来る事を考えてみました。共に生きるという事は簡単ではないと言う事に尽きるのです。言ってしまうば、奉仕とかボランティアというのは心の問題です。例えば母親が子供を可愛がるという事で分かると思うのですが、親は子供に出来る限り総ての事を与えます。子供から何か返って来る事を期待してはいません。勿論立派な大人になってほしいという願いはありますが、直接何かをしてほしいというものではありません。そういう見返りを求めないのが

本当の愛だと思います。家族の愛というのは地域社会の中の一番小さな単位の愛じゃないかと思います。もしも家族の中に愛情というものがないと、当然他人の事は考えられません。私達は親の愛とか、色々な大人の人の愛を受けて大きくなって来ました。今までいっぱい受けた愛を今度は私達が少しずつでもいいから、他の人達や私達の子供達に愛を返していく番じゃないでしょうか。

最近女性の社会進出が盛んで色々な問題があります。女性が社会進出をして男の人達と対等に働くという考え方は、それであっているのか？それならもしも女性がみんな男の人と対等と言っても、結婚なんかしなくていい、子供なんかほしくない、と言ったら未来はどうなるのでしょうか。私達はこれからどんどん働いていかなければと思うのですが、その前に次の世代を支える子供というのを考えなければいけないのじゃないでしょうか。勿論自分が社会に出て働いて海外旅行に行きたいとか、いい服を買いたいとか色々あると思います。でも自分の為だけにエネルギーを使っていたら将来をつないでいく者がありません。子供に与える愛というのは次の世代に対する奉仕になるのではないのでしょうか。私達は子供に色々な事を伝えて、もっともっと将来を考えてくれる子供を作るというのはやはり大切な事だと思います。勿論それは自分の子供だけじゃなくて、他人の子供でもいいし、又子供と限らず周りの人に愛を与えていくという事が共に生きるという事を考える時の原点じゃないかと思います。

共生を個から全体につなげる時、その手段は色々ありますが、ボランティアなどを当たり前の事と考える人が広がっていけばいいのだと思います。そのようなボランティアグループに参加する時に色々な戸惑いや不安もあると思いますが、ちょっとの勇気と度胸でその地域も変わっていくのではないかと思います。そのような気持ちを持つ事も大事だと思います。

リーダー 何か質問がございますか

発言者 一つは健常者と障害者の接点のところで障害者に生きがいを与えていると書かれています、どうもワンサイドのような気がするのです、健常者側からはどう考えられるのか。もう1つはロータリーの活動の中でロータクトの事をどう考えておられるのかという事。

D 班 障害者の方が生きがいを持たれる事は健常者もお互い楽しくやっていく上で、決してやってあげているだけの場ではなく、共に学び合う場と考える事が出来ると思います。ロータクトの事は我々もよく分からないし、一言では言えない事だと思います。

リーダー 内容を深く討議する事は後の時間に譲りたいと思います。

今、4つの班から大方のご意見が出ました。先ずB班の意見の中で、全体の意見として、国や行政に頼っているのじゃないかというご質問があったと思います。それについてそうじゃないというご意見がありました。その事をちょっとおっしゃって下さい。

発言者 A班でもそういう事が出たのですが、先ず自分が何が出来るのか、どうしていったらよいのかという所が中心にあるのです。行政であるとか、国であるとかというよりも自分達個人で動いていく事であって、他力本願的な所を感じたので質問をしました。

リーダー 今、このようなご意見がありました、D班の方それについて何か？

発言者 さっきから行政、行政と言われていますが、行政ではなくて、選挙で一票投じる時に政策を出せる人を選んでいく事も大事だと思います。

リーダー それについてどうですか

発言者 一票を投じるという事は確かにそれは主体的な事かもしれませんが、そこへ持っていくというのは何か違うような気がするのです。だから自分で先ず何が出来るかという部分を他人に託すという感じを受けましたので。

リーダー この問題は色んな考え方があると思います。今おっしゃったのは国というものがどれくらいの事が出来るのか、かなり疑問を持っておられる。本当に福祉とか南北問題とかいうものは、国のレベルでは解決出来ないのじゃないかと思います。それは昨日草地さんがおっしゃった事でもあります。その事につきましてもロータリーはかなり前からその点の自覚を持っておりました。第2次世界大戦が終わりました時に、ソ連との冷戦の関係を考えながら、一方でこの地球が貧困の問題を必ず持つようになるだろうと、1952.3年頃からこの問題をとり挙げて色んな事をやり出したわけでありました。他方、このロータリーの動きとは別に今から30年位前にブラジルの国際経済学者が地球上の富の70%というのは地球上の30%の先進工業国の民族が支配している。残りの僅か30%の富を残りの70%の民族が分かち合って生活している。正に赤貧洗うが如き状況である。そして、神様はSEXの快樂だけは平等に与えているものだから貧しい国ではどんどん子供が増え、人口が増加していく。このままでいくと、後10年も経てば飢饉が訪れるだろうし、先進国の今の繁栄を維持する事は出来ないだろうと予言を致します。先ほど申しましたように、ロータリーはこれより数年早く1952.3年頃にこの事を予測致しました。その時、そういう事は国家がやればいいじゃないかという意見もございました。しかし、国が何かをするという事は、国民の税金を使ってするので、自分の国が損になるような形では税金は使えません。したがって国が動く時は必ずその国に見返りのある形でしか動きません。ですから本当に助けてもらった国の為にはなっていないのであります。ロータリーでは1962年インドから出ました、国際ロータリーの会長、Nitish Laharryは“Kindle the spark with in”「世界中のどこかの片隅に一人でも不幸な人がいるかぎり、我々ロータリーアンは永久に

しあわせになることは出来ない。心の中に火を灯そう」というターゲットを出し、世界中にロータリーアン個人として何かをしようという運動を起こしました。但しそれは失敗に終わりました。何故失敗に終わったのかについては色々原因がありますが、昨日草地先生から貧困の構造について伺い、なるほどという気が致しました。しかし、ロータリーがこの事をやり出したのは約30年前であります。その後若干レベルを落として、困った国の人達からのニーズをライブラリーにして、それに対してロータリークラブが援助をしていくという方法がとられております。したがってそういう意味から考えると、ロータリーは、行政とか、国のレベルでの援助は考えないで、ロータリーとしての1つのNGO（Non Government Organization）ロータリーとして何かをするという考え方を持っております。しかしそれが絶対であって行政に頼ってはいけないのかと言うとそれは簡単には言えない事だと思います。時間もございませんので次に進みます。C班の発表の中に、家庭教育、社会教育、学校教育の論点の指摘がありました。その時に大人に対する教育はどうなっているのかというご質問がございました。質問者の方はその趣旨をもう少し詳しくおっしゃって頂けますか。

発言者 私は川西の駅前を掃除するボランティアをした事があったのですが、その時、煙草の吸い殻とか、ガムが道路にへばりついていて、取るのに大変苦労したのです。又車のドアを開けた女の人が道に灰皿をひっくり返されて、みんなはひどくショックを受けてしまったのです。学校教育というのは大体小学校、中学校までは道徳で色々学びますが、それ以上になると、あまりそういう事を学んだ思い出がないような気がします。兵庫県では500人委員会と言いまして、25歳以上の人を集め、2年間心豊かな人作りを目指して教育していますので、そういう所に参加される大

人の方は色々な分野で大きな目で学ばれます。しかし一般に大人の教育というものがされる機会がないのじゃないかと思いまして、質問させて頂きました。

リーダー 共に生きる社会を実現する為には家庭教育、学校教育、社会教育が必要だが、今生きている大人に対する教育が出来ないじゃないかという意味ですね。このへんの所をC班の方で何かお考えがございましたら

C 班 家庭教育、学校教育、社会教育というものが出たのは、話し合いの中で部落差別問題の話になった時でした。今30代の人間が小学校の時に同和教育というものが最初にやられたと思います。全然知らなかった事が聞いた事もない同和という言葉で始まってすぐ戸惑った事を思い出します。その教育の内容がよかったかどうかという事は別にして、今の若い人は我々以上の人と比べると、そういう意識が気楽になっていると思うのです。私達の親というのはやはり非常に偏見があります。それでこれから若い人達がそういう事をちゃんとやっていってもらう為にも家庭でも、社会でも必要だという事で書いたわけなんです。確かに家庭で教育する場合に大人の教育というのが大切ですが、我々がそれをするという事までは話し合いませんでした。将来子供が親を教育するという事も考えられると思います。

リーダー D班の奉仕と言うのは心の問題であって、見返りを期待しないものであるという事が出ました。A班でも give & take の姿勢が必要だという事がでております。この考え方にに関して、そうじゃないだろうという考え方があったら出して下さい。例えば give & take の姿勢だけれども take はあまり念頭にないという考え方やもっと進んで give だけだという考え方とか、そのへんの事で何かご意見がございましたら

発言者 (R) give & take の問題ですが、ロータリーの基本的な考え方の1つに「利己

と利他との調和」という事がございます。自分の利益と他人の利益を調和させる。give & take の場合、日本のように富んだ国があって、沢山お金持ちの人がいる。しかし南半球又は赤道付近の人達は非常に貧困である。本当に give & take でいいのか。現在は日本とかアメリカとかが富を持ち過ぎ、南半球、赤道付近の人達の利益の侵害をしているのじゃないか。取り過ぎて利益はやはりあるべきじゃないと私は思います。もう一つロータリーの中に「公正かどうか」という事があります。C班の発表の中にみんなは平等でないといけないという事が出ておりましたが、人の何倍も働いた人も少ししか働かなかった人も同じ報酬という事になれば、公正であるかどうか。平等ではなく、不平等になるのではないかという考え方も合わせ持って、公正という事を考えていきたいと思ひます。

リーダー 今のご意見をお聞きになってこれは違うというご意見があればお出し下さい。

発言者 よく分かりませんが、何かをした時、お返しを期待するのはよくないと思ひます。例えば何かをしてもらったら、してくれた人に返すよりも、うれしかった気持ちを又他の人にしてあげたいと思ひます。

リーダー give & take というよりも、むしろ give & give の考え方の方がいいという意見が出ましたが、みなさんいかがでしょうか？

発言者 (R) 私も今のご意見とほとんど同じですが、give & give がこれが一番大事じゃないかと思ひます。他の人に施しをして見返りを期待するという気持ちを受け入れるという事が非常に嫌だなと思ひます。より多く奉仕するものはより多く報われるという言葉もございすが、報われる事を期待する事自体おかしいのじゃないかと思ひます。

リーダー これまでの RYLA ではこのフォーラムはこれで終わって、次の朝は又違った講義を聴く事になっておりました。今回は幸いな事に明日、今井先生がこの問題について総

括的な話をなさいますので、今日はこの場ではあまり深く触れないで、これで終わりとしておきます。これを受けて後でキャビンタイムで色々なお話し合いをして頂ければいいかと思ひます。問題として出ました事に関して少しお話致しておきたいと思ひます。先程から出ておりました Give & Give の問題について、色々な考えがございすが。人間の心を冷静に見つめていきますと、究極のところは人間は自分自身が一番愛しいのだという考え方が一つございすが。これは実はお釈迦様が生きておられた頃に既にあつた話で、或るインドの王様が最愛の奥様に「お前には本当に悪いけれども、考えてみるとこの世のなかで一番大切に愛しいものは自分自身だと思ひます」といわれました。奥様もしばらく考えて「私も一番可愛いのは私自身のように思ひます」と言われました。すると王様が「世の中の人みんなが、一番可愛いのは自分自身だと考えていたら、この世の中は成り立っていかない。お釈迦様の所に聞きにいこう」と2人で行かれました。その話を聞かれたお釈迦様は「それでいいですよ。人間というのは、結局は自分自身が一番可愛い。貴方がそうであるように貴方の奥様も自分自身が一番可愛い。だからその気持ちを大切に相手をして傷つけないようになさい。そうでないと世の中はうまくいきません。そこから相手に対する思いやりの心が、人に対する愛の心が生まれます」とおっしゃったそうです。give & give というのも一つの考えです。ロータリーの中にも、give & give の考え方で自分を犠牲にして、世のため人のために尽くされた人達もおられます。その一方では、自分を犠牲にしたら駄目だ。自分はやはり榮えていかなければならないし、その上で世の為人の為を考えようと言つた人達も沢山おられます。ロータリーも一枚岩ではないのです。しかし、一番大事な事は、色々なロータリアンが、ロータリー的なフレームワークの中で様々な考え方、思想

を持ちながら、いつも自分の主張を相手におしつけない、自分と違った思想、相手の思想というものを尊重し合って来た事であります。その事故に88年のロータリーの歴史が隆々と栄えて行ったのであります。これをロータリーでは「思いやり」と言っておりますが、皆さん方が色んな問題を論ずる時に、自分の意見を押し付けるのではなく、色んな意見を自分が聞く事によって自分を高めていく事が一つ大事な事だと思えます。したがって give & give の考え方も結構でございます。人間の本来の喜びというのは自分が他人の為に何かをし、それによって他人が喜んでくれた事を知った時であるという考え方を前提にして、今年の国際ロータリーの会長である、クリフダクターマン氏は“Real Happiness is Helping Others” というテーマを出しておられますが、そういう考えの人達も他にも沢山ございます。色んな考え方があって、お互いに「共生」という事を考える時にも、どういう立場に立ってこの共生という事を考えるかという事をいつも念頭において頂ければと思うのであります。明日、今井先生の方からくわしくお話があると思えます。私は今まで出た意見の中でこういう色んな考え方があるという事だけを申し上げておきます。

D班の方から男と女の問題を出されました。男性、女性の問題についても昔から大変色んな議論がございます。今から200年前のイギリスの社会では男と女とは違った道徳を持っておりました。従って男と女は違った教育を受けておりました。その事に目をつけた、メアリー・ウルストン・クラフトという人は「これはおかしいのじゃないか。道徳というのは一つであるべきだ」といって、「女性の権利の擁護」という本を書いたのであります。これは勿論自由主義ブルジョア的発想であったのであります。実はこのフェミニズムの思想というのは200年の歳月を閲して、現在のポーボアールの実存主義やマルクス・

レーニン主義の思想の底流として流れていると言われております。又それが正に女権拡張の思想に流れている事は間違いのないのであります。一方その考え方に対して、「男と女は絶対違うんだ」という考え方の人も沢山おりました。チャールス・ダーウィンという生物学者は、男と女は根本的に違うという前提に立って「人間の由来」と言う本を書きました。又1912年にノーベル生理学賞を貰ったアレクシス・カレルもダーウィンと同じような考え方を持っており、女性の役割と男性の役割とは違うものであり、女性の細胞の一つ一つには女性の印がついている。したがって女権拡張論者が女性と男性とは平等であるべきだといつて、色んな活動をする事も立派な事だけれども、生理学的に見れば、女性と男性とは絶対的に違うのであると言っております。その違いは、天文学に於ける法則と同じように、人間の希望によって変えられるべきものではない。だから女権拡張もいいかもしれないけれども、神様から女性に与えられた役割は男性のそれよりもはるかに大きいものである事を忘れてはいけないと言っております。このように、男と女の関係についても、昔から色んな人達が議論をしながら、色んな考え方のある事をお互いに認めあってまいりました。私はどの考え方が絶対だという事は申しません。ロータリーの考え方と同じように、色んな考え方を謙虚に学んで、自分自身の考えを持って頂ければいいのだと思えます。勿論女性が働くという事を決して否定するわけではございませんが、女性に与えられた役割という事も前提にして、「男と女の共生」という事を考えて頂ければと思います。

皆さん、まだまだ今日のフォーラムを踏まえてお話し合いが尽きないと思うのであります。続きはキャビンタイムで存分にお続け下さい。長時間ありがとうございました。

注 (R) はロータリアン

ごあいさつ

国際ロータリー第2670地区

ガバナー 阿河正昭

皆さん、4日間のRYLAセミナーが今終了致しました。私は全部のプログラムに参加する事が出来なかったのですが、カウンセラーの方々にお尋ねしますと、今年の受講生はなかなか優秀だというお褒めの言葉を頂戴致しております。余島で共に過ごしたこの4日間の体験をどのように消化して、これからの皆さんの生活の糧とするかは皆さんしだいでございます。私からのお願いと致しま

しては、私共ロータリアンと共に社会に奉仕する動機として頂ければと申し上げて私のご挨拶とさせていただきます。

終わりに当たりまして大変お世話になりましたロータリアンの関係者のみなさん、この余島のYMCAの皆さん、小豆島ロータリークラブの皆さんにお礼を申し上げて終わらせて頂きます。ありがとうございました。

国際ロータリー第2680地区

パストガバナー 森 滋郎

4日前には全然知らなかった人がこうして親しく話し、昨日のフォーラムなども素晴らしい発表をされ、私は感心しています。

あなた方はサハラ砂漠の真ん中で一人で、「なんでも欲しいものをジェット機で落としてやる。但し死ぬまで一人でおれ」と言われたらいやでしょう。どんな素晴らしいものがあったても、人間というものは一人でおれば人間じゃないのです。そこでどうして人と言う字はお互いに二本が支えとなって出来ているか。人同志がうまくいくにはどうすればいいか、俺が俺がと言っていたらうまくいかないという事を今まで勉強して来ました。人と人、AとBがお互いに理解しようと思った

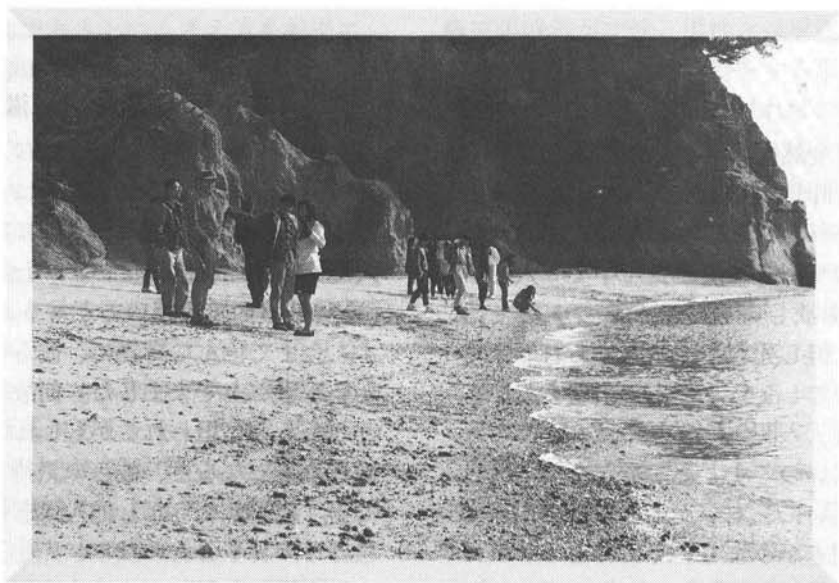
ら、間に一歩出さないと駄目なんです。AはBの所に一歩寄るのです。BはAの所に一歩寄るのです。間へ入る、人間になるのです。人だけでは理解出来ない。“Into Their Shoes” 彼らの靴を履いてと言う言葉があります。今まで色んな講義に、彼らの身になってという事が出て来ました。何故こんな事を言うのだらうと思われるかもしれないけれども、彼らの身になると、彼らの気持ちが分かるのです。親子もそうだし他人同志も分かります。私はこのRYLAの試み、先生方のお話、みんな立派だと思います。本当に素晴らしい4日間でした。

ディーン 大島秀夫

RYLAの目的の心を求めて、そして出会いが沢山あったと思います。そして感動があったと思います。それを大切に持ち続けながら、Give & Give、結果は我々は問うておりませ

ん。それを考えていく力が大切なのであります。これを一つ心に残しておいて頂きたいと思います。これを私の短い挨拶にかえます。皆さんありがとうございました。

参加者感想文



A 班



第15回ライラセミナーに、カウンセラーとして参加させていただき、驚きと感動の心の満ちる有意義な3泊4日でした。

オープニングパーティーから、すでにライラ熱は高まり、キャビンタイムは常に青年リーダーとしてのエネルギーが感じられる充実した時間でした。メインプログラムの体験を通じて熱の入った、各講師の授業、プログラムが進むにつれて、それぞれリーダーは、ロータリーが目ざすライラセミナーに対する理解と感動を覚えたのではないのでしょうか。

21世紀を目前に控え、人間としての「思いやり、愛の心」を持って心豊かに健やかに共

A班カウンセラー 菊澤重子
に生きて行こうではありませんか、縁あって共に過した素晴らしいキャビンタイムを過した、A班の皆さん、此の出会いを大切に地域社会で頑張ってください。

人と出あい、神と交わり、愛の灯の燃える余島でいつ迄も心の交流が出来ますように、心から願っています。

此のライラの実践にあたって、ロータリアンスタッフの皆様のご努力こそ真の奉仕の実践のように感じさせていただきました。

青年リーダー、ロータリアンの皆様、深く深く此の機会を与えて下さいました事に感謝申し上げます。

谷端憲三

「共生」とは、どういう意味かという問いに対して受講する前には「共に生きる事」としか答えられなかったと思います。

しかし、今なら同じ問いにたいして、「今社会の中で、自分に何が求められているのか自分が何をすべきなのか、自分に何ができる

のかを考えて行動し、自分を取り巻く社会、世界の中で共に幸せに生きること。」という答えが出せると思います。これが正しいとか間違っているとかではなくそう思うようになりました。

セミナーの中で、多くの人と出会うことができ、その仲間と一つのテーマについて大いに語り、考え、それぞれが高め合うことができたと感じています。

何も問題意識を持たずに、安穩と生活するほうがきっと楽でしょうが充実感も、達成感も感じられないのではないのでしょうか。

これに反して、日々の生活の中で敏感に、「共生」について感じ取り、考え、行動することは苦しく辛いことかも知れませんがそのぶん大きな何かをつかみとることができるのではないのでしょうか。

誰もが同じ限られた時間を与えられ生活しているのですから、より幸せで意義のある生活、もっと大きく考えれば、人生を過ごす

ほうが得だと思えます。こう考えれば、どちらが自分にとって有意義なほうか、考えるまでもない事です。

「共生」とは「共に感じ、共に考え、共に高め合い、共に与え、共に栄え、共に幸せになること。」の総称であり、地球に生きているものに与えられた大きな課題ではないでしょうか。常に心の中に持ち続けたい言葉になりました。

自分にとって、決して忘れることの出来ない余島での貴重な4日間です。個々で学んだことをばねに、さらに大きく成長したい、成長しようと、思います。

最後になりましたが、ライラの仲間たちに感謝致します。

静かに包み込んでくれた余島の自然に感謝致します。

お世話になった皆様に感謝致します。そして、このような素晴らしい機会を与えて下さったロータリーの大きな意思に感謝致します。

清水啓介

という事が解りました。

むしろ、意識の低い人間が多い限り、他の誰かがいくら頑張っても、大きな効果は生まれれないという事でした。

私達がこれから実際にしなければならない事は、いかに皆で意識を高めていくかという事だと感じました。1人1人の人間が皆、環境問題、南北問題、福祉問題に直接取り組む仕事にたずさわるのは不可能にしても、皆が普段は別々の事をしていながらも、意識の中では、「何が大切なのか、何をしなければならないのか」という事が解っていなければ、それが地域社会のまとまりとして、それが国のまとまりとして、大きな実際の力として現れ、進むべき方向に進めるものと思います。

今の若い世代には、妙に冷めた、皮肉っぽ

い所があり、誰かが真剣に議論をしていると、「真面目だ、暗い。」と馬鹿にする風潮もありますが、事の重大さを認識し、「そんな冷やかしたりしている場合ではないのだ。」という事をお互いに解りあえる人間関係を築かな

今回、初めてライラに参加させていただきましたが、出発する時は、「3泊もするのか。」とっておりましたのに、終わってみると、大変短かった様に感じられ、非常に充実した4日間でした。

世代や、地域を超えて、今回、たくさんの人達と“友人”になれ、みなさんの温かい心と志に触れ、別れ際には少々涙ぐんでしまいました。

講演会でのお話も素晴らしく、さらに“共生”というテーマで、みんな真剣になっ

ければならないと思います。

私も平素からやれる小さな事からやり始め、機会ある度に皆で話し合い、意識を高めていく役目をはたそうと思います。

横尾 葉子

て討論できたのも大変印象深く心に残っております。

帰ってきましてからも、まだ興奮冷めやらずで、みんなに「ライラはすごく良かったよ。」と連発しております。本当に、素晴らしい機会を与えて下さいまして、感謝の気持ちでいっぱいです。どうもありがとうございました。

また、お便り遅れまして、大変申し訳ございません。御迷惑おかけします。

塩田 精造

東野先生の講義では、目をそらすことができないほど聞き入ってしまいました。

東野先生の講義で、何に感動したかというところ、先生の熱心さ。なんでそんなにまで、夢中になれるかというところです。今の僕には、無いこと。先生だけではなく、僕の周りの人達も何か夢中になれるものをもっていったように思う。僕がこのセミナーに参加して一番の収穫はそれだと思う。キャンプファイヤーの松ぼっくりにも、「時間だけが単に流れるのではなく、自分が生きているんだと本当に意味のある時間をすごす。」と書きました。絶対にそうしようと思う。今もそう思っています。もっと書きたいけど、一番心に残ったことだけ書きました。最後に、関係者のみなさん、本当にありがとうございました。この体

僕は、このセミナーに参加するまで、ロータリークラブというの知らなかった。市のロータリークラブから「行ってみんなか。」といわれた時、なにもわからず参加することになった。知り合いなんて1人もいなかったからけっこう不安だった。けど参加してみると、初めて経験することばかりで、毎日が有意義にすごせた。そのうちで特に心に残っているのが、いろんな人と知り合えたことと、東野先生の講義でした。同じ班では、僕の父と同じくらいの歳の人や、学校の先生や、同じ歳の人がいて、いろんな話をしてもらった。僕は他の人とくらべて、物知らずなので、いつも聞き手の方だったけど、自分自身少しかしくなれたと思う。ほんとうに、みなさんにはありがとうって思います。

験を一生忘れず、心にちかったことを、ずっと心に残してこれからをすごしていこうと思

います。

山内智香

ライラって何ぞや。まず始めに思ったことはこれです。何も分からないまま現地集合し、参加しました。班分けによってキャビンに足を向け、見てみると小さな部屋が4つずつあり、布団があります。どうやらここに泊まるらしいけど、3泊4日も耐えていけるかな。正直なところこう感じました。同じキャビンの人との顔合わせもすみ、パーティーも終わったころにはすっかり馴染み、これは普通の合宿とは違う雰囲気が漂っていることに気づきました。

2、3日目の午前中の講義は聞く価値のある素晴らしいもので、こんな島によくこのような先生が来てくれたものと驚きました。東野洋子先生の講義の中の「頭ではなく、心で覚えているものは忘れないのです。」というお言葉は非常に感動的でした。この講義を

交えながら私たち自身がディスカッションした「共生について」もいろいろな意見を聴くことができました。皆がそれぞれ本当にたくさんの方のことを考えながら真剣に生きているということが実感できました。と同時に何も考えていない自分を恥ずかしく思いました。

キャビンタイムでの楽しかったひとときは一生忘れることはないでしょう。初めは名も知らなかった人たちが、こんなに意気投合してまるで昔からの友人のように話し会える場は、いままでなかったことです。いろんな場所からいろんな考えを持った人たちと友達になることが、自分にとってこんなにいいことだと初めて知りました。ライラ万歳！そしてロータリーのみなさん、島のみなさんどうもありがとうございました。

中村美香

毎日の生活に追われて、人間としての本質的な事を忘れかけていた時に、自分を見つめ直す大切な時間を与えて頂いたように思います。思索の時間に、青い青い海と空を眺めて大自然から自分の小ささを思い知らされたり、キャビンタイムの時間には、仲間達から多くの感動を分けて貰いました。

草地氏の講義では、社会から「貧困」を無くそうとする人々もいれば、その反対に自分達の利益のみを考え、今現在が豊か、物質、経済的に豊かであれば良いと思っている人々が、日本企業を動かしている事を知り、背筋が寒くなりました。

だからといって、私に何ができるか？という事はやはり疑問のままで、取り敢えずケチャップは、カゴメをやめてデルモンテにしようと思ったぐらいで、とても情けなく思うのですが…。

東野氏の講義は、普段の私の生活に置いて考える事が出来たので、草地氏の話よりも取り組み易かったです。障害を持っていても仲間であるし、共に楽しく嬉しい人生を歩みたい気持は同じであるという考えに、心が震えました。私の仲間も、年齢からすると能力は低いかもしれませんが、心で考え、心で話したり接したりしてくれます。これは宝物だなあ。

大切にしないといけないなと改めて思いました。

この4日間で、新しい友達がたくさんできました。年齢に関係なく、ひとつの問題に対して夜も徹して話し合いました。久しぶりに熱くなれたと思います。キャビンタイムで、

「共に生きること」についてみんなが大真面目に話しあう姿が、私にとって大変衝撃的だった。とても美しい理想を本気で現実化しようとしていることが、そして本当に現実化していることが、目に見えないちりが幾重にも積もっていた私の心には、感動よりも先にショックを与えた。

今まで私は綺麗事が嫌いだった。愛だの信頼だの、本当はそういったことの価値の尊さを否定できないと解っているのに、幻想だと思っていた。ボランティアをしている自分は偽善者だと思っていた。

あまりにも現実的な冷めた一面を持つ世代の1人だったからかもしれない。理想を捨てさせかねないような社会を見ていたからかもしれない。真剣に人々の幸せのために活動している人達のことを異端視する風潮に毒されていたからかもしれない。原因を考えようと

いつもは、教壇の上から、世界を知りつくしているかのように、生徒に話していたが、今はそんな自分が恥かしく思える。

今、自分は何をしているか。今、世界では何がおこっているのか。だから、これから自分は、何をすべきなのか。ぼんやりとだが、そのことについて考えていかなければいけないと思っている。又教師という人を導く仕事

見知らぬ私達が燃焼できるよう上手に火の番をして下さったカウンセラーの方々にも感謝の気持ちで一杯です。人との触れ合いの暖かさを再確認できました。「人間っていいなあ。」と思えた4日間でした。楽しく、豊かな時間を本当に有難う御座居ました。

鳥井 奏 美

すると、次々と自分の外側の要因を挙げてしまう。しかし、このように自分の外を気にするという事は、つまり他人の目を気にしているということだ。私の心にちりを積もらせていたのは、このようなあやふやな考え方しかしていない私自身だったのだ。

今回RYLAセミナーを受講して、建前だけでなく本音で人々の幸せを追求している人達が沢山いることを知った。私がこれまで憧れていたが同時に否定してきた愛を信じている人達が、本当にこの世には大勢いることに気付いた。そしてきっと本当は世界中の人々がこのようにありたいと心の奥底で思っているだろうことにも…。

「共に生きる」ことを、実現可能な事と信じ、声に出すことを恐れずに、真剣に模索していこうと思っている。

土 師 康 史

をしているので、より多くの子供にこの事を伝えていきたいと思う。自分達の何げなく食べている食物がどんな風に生まれ、その裏にどんな人が働き、生きているのか、そして自分達がどれだけ豊かなのか。健康というものがどれだけ大切で、障害をもった人がその健康な人より頑張っている事実、もっと多くの人に知ってもらいたいと思う。そして今度は

共に歩いていきたいと思う。このセミナーでは私に多くの疑問、課題を与えてくれた反面多くの仲間も与えてくれた。年齢、職業は様々だが、同じ思いの仲間がこんなにたくさんいたとは。初めの不安以上に心強い気持ちでいっぱいです。

4月は、出会いの月、さぁ私はどれだけ多くの人にこの事を伝えることができるでしょ

うか、どれだけ多くの仲間をつくることができるでしょうか。小さくてもいいからたくさん芽を作っていきたいと思います。

本当にこのような機会を与えていただきありがとうございます。形は違いますが、私なりに頑張っていきたいと思います。またご助言いただきたいと思います。よろしく願います。

秋 葉 祐 志

最初はとても乗り気がしませんでした。本当の事を言いますと、3日間もこんな事に費やすなんてめんどろな事になったぞ、という気持ちだったと思います。けれども時間がたつにしたがって班のみなさんとも打ちとけ、非常にいい人ばかりだと分かりました。講演も退屈かと思いましたが、普段聞けないような話をいろいろ聞いて、少しは勉強になりました。失礼な話ですが、「青少年指導者養成講座」に参加させてもらったわけですが、こ

のセミナーが終わった後、「これからはもっとがんばってすばらしい指導者になろう。」というようなことは思いませんでした。それよりもっといろいろな所へ行って、いろいろな人と会おうと思いました。これからボーイスカウトのリーダーになる僕としてはボーイスカウト以外の世界の人と接することのできる機会をもてたことは、きっとこれからのリーダーとしての僕に、なんらかのプラスになると思います。

森 基 祐

今までの私は、会社という一集団の中で一生懸命働くことで、社会の一員としての自分に満足し、激動の社会から生じる様々な問題に目を向けることすらしなかった様に思います。この度のライラーセミナーに参加し、これらの問題について考える場を与えて頂いたことを感謝しております。各先生方の講義について、草地先生は、資本家と貧困者の生活水準の格差を問題にし、また、東野先生は健全者と障害者について、健全者の立場を問題に取り上げ講義して頂き、お2人の福祉活動に対する熱意が伝わってきました。その内容からは、「全ての人々が平等である、そういった社会づくりをしなければ本来の幸福な生活

は得られない。その為には、自分の持てる力（資産・能力・時間）を他人の幸福の為に使い、自らの幸福を望む気持ちと他人の幸福を望む気持ちが1つにならなければならない」と言うことを痛切に感じました。また、今井先生からは、フランスの哲学者・アランの「幸福とは、ショーウインドの中の品物のように、好きな物を選んで金を払えば持って帰れるものではない」の言葉のとおり、物理的な豊かさは本来の幸福ではないこと、そして、人間的な世界を取り戻すことの必要性を学びました。以上、今回のセミナーにより修得した内容を、また、余島での貴重な体験を私の生活や仕事に活かせる様努力したいと思いま

す。これをもって、私の感想文とさせて頂きます。最後まで熱心にご指導して下さいました。

様。本当に有難うございました。

昨年参加した先輩の「すっごくよかった。」という言葉への期待と「でも絶対一緒に行った子とはグループ分かれるで。食事で顔を見るくらい。」という言葉への不安の中で始まったセミナーでしたが、いざ始まってみると参加されている方はみんな気さくですぐに親しくなれたし、余島の豊かな自然の中で普段ではあまりゆっくりと話せないことを討論することが出来ました。又、友達の幅もぐんと広がり、私にとって生涯のうちの貴重な体験の

RYLA セミナーに参加して、いったい私は何ができるのだろうかという大きな疑問が残りました。地球規模での共生の話もわかるのですが、まだまだスケールが大きすぎて、ピンときません。地域社会での共生、個人の共生の話になってやっと話が具体的にわかるようになってきました。東野先生が、「今日はどうしても私の友人の話をしようと思います。」と言って話された、「あぶあぶあ」の話は特に印象的でした。みんな同じ人間なんだっ

青い海と緑の山々、大自然に囲まれた余島でのライラセミナーの4日間は、私にとって本当にすばらしい思い出となりました。このような機会が持てたことを大変うれしく思っています。参加する前は、このセミナーが指導者育成のためのものであるとういことは知っ

ひとつとなりました。お互い少し離れているし、忙しいとは思いますが、ライラの時だけではなく、これからもライラをきっかけとしてつき合いが続いていくことを願っています。私はライラで多くの事を学び得て、心が以前より豊かになった気がします。又、大学に行っていた時より今井先生を身近に感じる事もできたのでよかったです。ライラセミナーに参加させて頂き、本当にありがとうございました。

ていうのがひしひしと伝わってくるように思いました。大切な話は耳で聞くんじゃない。心で聞くんだって言われたのが忘れられません。得るものが本当に多かったこのセミナーで学んだことをこれからどれだけ生かしていけるのかまだわかりませんが、絶対に無駄にしないようにしたいです。たくさんの仲間には負けないよう、「共生」について自分で何ができるのか考えてみたいと思います。

ていましたが、RYLA が Rotary Youth Leadership Awards の頭文字であるということは、参加して初めて知ることができました。

知っている人が誰もいないグループの中で生活することに、不安を感じなかったと言え

前田 美和

福村 久

秋田 麻紀

ば嘘となりますが、そのようなことはいらない心配でした。出会った瞬間から友達であるような感覚で皆さんと接することができたと思います。

キャビンタイムやバズセッションなど、グループ内でも様々な意見を交換し合い、またフォーラムでは他のグループの人々と議論し合ったり、貴重な体験をさせていただきました。講演では、素晴らしい先生方のお話を聞くことができ、なかには、涙を誘われるような感動的なお話もあり、大変役に立つものであったと思います。これらの講演のテーマは「共に生きる」というものでした。共生と聞

けば何か固苦しいもののように感じますが、今の自分の生活、また、このライラでの生活も共生の1つであると考えられます。人と人、人と動物、人と自然、様々な共生の形が挙げられますが、自分が存在している限り、そこには自然と共生が存在していると思われま

す。共生というものの大切さを改めて考えさせられました。最後になりましたが、このように有意義な機会を与えて下さったロータリークラブの方々、ライラセミナーの関係者の方々に心から感謝しております。有難うございました。

講演者

岩田 佐智子

ひとことで言うならば、いい経験ができたということです。今までの自分について考えることができました。1日1日をむだに過ごしてきたと思いました。参加して、私も何かすることができればいいなあと思いました。

ところで、セミナーなどで感じて思ったことは、すべての人が、素晴らしい意見を持っていて主張できることが素晴らしいと思った。私は、意見もなく、うまく主張を人へ伝えることができなかったので、すごく悲しかった。だから、2日目の午前中まですごく不安だった。みんなに、なじめないと思った。しか

し、みんなになじんできて、少しずつ自分が言えるようになった時は、うれしかった。やはり、グループの雰囲気よかったからだと思います。

心に残っている言葉は、“自分を大切にする”です。自分を大切にしないと、他の人にもやさしくできないよとされました。よく考えてみるとそう思いました。

終わりに、講演・キャビンタイム他すべてよかったです。いろいろお世話になりました。また、参加できればと思っています。

B 班



余島なるライラに集ふ若者の明るき瞳^{まみ}に逢へ
るよろこび

更けてなほ熱論交はす若きらにライラの夜の
時止まれかし

B班 カウンセラー橋 本 知詠子

共生への思ひ募らす若人に余島の春の潮騒な
ごむ

最初このセミナーの案内をいただいた時、
“高度な講義と、ディスカッション”という
文句を見て、正直行って少し怖く、自分でやっ
ていけるのだろうか？という不安があった。

が、実際、余島にはいってみると、すばら
しい自然にあっとうされ、豪華な食事にびっ
くりし、そのような不安は、どこかにけしと
んでしまった。

実際、余島の自然、整備は、本当にすばら
しく、山でも海でも、どこでもあそべるといっ
た島のよさが、存分に発揮され、瀬戸内海に、

中 村 マ キ

こんなすばらしい設備のある所があっ
ていいのだろうかと思ひ、食事にしても、半端じゃ
ない豪華さ、おいしさに、我をわすれる程で
した。

しかし、自然と食事とを満喫した後は、
講義とディスカッションです。

ドキドキしてきいてみると、恐怖どころか
とてもおもしろく、たのしくて、考えさせら
れ、内容がとても濃く難しいのに、重さやか
たくるしさがなくて、すばらしい講義でした。
ディスカッション、そして、キャビンタイム、

わきあいあいと、そしてしんけんに語っていくうちに、講義の内容をもっともっと、奥深くまで深められ、この講義の真の内容や奥の意味が、はっきりと意識付けられたと思います。

もはや、私達の世界では、共生ということよりよい共生を目指すということは、さけてとおれないと思います。give and takeで

はなく、give and give、この見返りを期待せず、何かをしていく心が大切なのだと思います。このすばらしいセミナーのおかげで、私自身大変わることが大きかったです。これらのことをまわりにひろめ、自分に出来ることは give and give の精神で、頑張りたいと思います。

講演者紹介

猪谷昌平

3月25日、小豆島に向うフェリーの中で、私は、いろいろな事を考えました。

3泊4日のプログラムで、セミナーのテーマ「共に生きる」は、あるものの何を目的とし、何を得られるのか、どう今の仕事に活かされるのか等でした。

今、実際にセミナーを終え、心に思う事を、述べさせていただきます。

地球、地域社会、個人における共生すべてにかかわってくる事は、人間一人一人の心の問題だと思う。

情報化社会と言われる今日、人間は、物的(表面的)に豊かさを得てきたが、心は、社会の進歩について行けず、多方面で問題が生じている。

人間が、社会の中でシステム化され、人間の心もシステム化されて行ってるのではない

だろうか。

自分だけよければ、家族さえ幸せであれば、自分の地域さえよければ、日本さえ平和であればという様に、システム化された社会の中で、人間の「心」が、変化しつつあるのではないか。

今回のセミナーにおいて、私が得られたのは、『「共に生きる」事を考えて行ける力』だと思う。

共に生きる為にはどうするべきかという結果等出る訳がない。それを、キャビンタイム、講義、バズの中で、考える機会が、自由の中であたえられたのだと思う。

最後に、その機会をあたえて下さったロータリーの方々に感謝し、これからの生活の中で、生かして行きたいと思います。

講演者紹介

角倉要

ライラセミナーの主旨も目的も十分に把握できないまま参加した私であったが、この3泊4日間は非常に有意義な時間であったと思う。

まず第1に、このような機会がなければおそらく一生出会うことがなかったであろう多くの友人を得たこと、第2にこの友人たちと

寝食を共にする中で、共生という大きなテーマについて考えることができたこと、第3に日頃は、あまり考えることのない自分の職業や人生について見つめ直すことができたことなどである。

「共生」あまりに大きすぎるテーマ、草田氏による命をかけた実践、正直自分とはかけ

離れた話のようにも感じた。しかし講義やフォーラムに参加する中で、おぼろげではあるが自分のすべきことがわかってきた。何か特別なことをするのではない。当り前のことをすればいいのだ。ゴミが落ちていたらゴミを拾う。ものを大切に使う。隣人を労り大切にする。これら小さなことの積み重ねが共生につながるのだと思った。

「自分の職を天職と考え、一生懸命働くことで社会に貢献する。」これがロータリークラブの考えだと聞いたとき、私は深く感動した。「そうだ。これだ。」心の中で叫んだ。私

は現在、小学校の教師をしている。学校という職場で精一杯働き、子供たちに優しさや思いやりの心を育てること、このことが私の共生への働きであり、私たち教師にしか与えられていないすばらしい特権であるということに気付いた。これから私は自分の職を天職と考え誠心誠意努めていきたいと思う。

最後になりましたが、このような場を与えて下さったロータリークラブの皆様、いろいろとお世話になったガバナーやカウンセラーの皆様、キャンプ場の皆様に厚く御礼申し上げます。本当に有り難うございました。

講演内容

私にとって、RYLAの4日間は、これからの仕事、生活の中でとても役に立っていくと思います。

色々な分野の人々があつまってきたので今まで考えもしなかった事、しらなかった事も覚えました。なにごとにも積極的にとりくむよう努力を怠らないようにしなければと思いました。又講義では、国際的な問題、障害者の問題などを知り、やはり勉強不足を実感しました。自分が無理せずやっつけられる事、やっ

てあげられる事から始めたいと思います。

世の中自分だけよければと思う人はたくさんいると思いますが、その様な人間にはならないようにしなければなりません。そのためにもやれる事からひとつずつ、人がこまったりしていたら助けてあげる人になりたいと思います。

このRYLAに参加できた事は、ほんとうによかったと思います。自分自身をもっと勉強しみがきたいと思います。

講演内容

3泊4日、70時間の思い出は、①よく食べた、②よく飲んだ、③よき仲間に出会った、④学生と社会人との違いがわかった、⑤人生の達人は話がうまく、いい顔をしている、⑥浜辺で何もしないで過ごしたときの開放感、自然との一体感、⑦元暴走族の神主が好青年だったこと、⑧須磨寺のプレイボーズ。人間通で寛大な方でした、⑨班のキャビンタイムより同室の男4人の語らいのほうが充実していた、⑩若い女性が多かったが、標識に記さ

坂本 琢

藤本 一成

れている妻恋峠の文字に心が惹き付けられた、⑪(講演の所感)草地先生—母国に戻った研修生と氏の家庭のことを考えると身につまされるものがあつた。東野先生—私の知的障害者への認識を恥じ、改めました。今井先生—前日のフォーラムに対する論評の深さとそれをベースにしたディスカッションがなかったことが唯一残念です。

このセミナーに参加して、(a)積極的に出会いを作ることの楽しさ、(b)人の幸せの中に自

分の幸せがあり、自分の持つ力を他の人の幸福のために使うことの大切さ—の2点を再確認しました。知識や議論も大切ですが、最終的にそれらをどのように自分の生き方に反映できるかが個人に与えられた課題だと考えています。共生は、損得勘定だけでなく、全ての人々が使命をもって生を享けているという相互認識に基づく思いやりも必要でしょう。神戸に帰る日、小豆島の東港から坂手港へ

向かう明代宝船、鄭和から見えた雨に煙る余島は感慨深かった。大切な何かをそこに置き忘れてきたように思われた。目に映る余島の遠景に仲間と過ごした心象風景が重なりあった。余島の木々、坂道、碑銘、風、そして潮騒さえもが我が魂の朋友のように思われた。

最後に、ロータリークラブの方々、お世話になった多くの関係者の方々に心から御礼を申し上げ、攔筆いたします。

関 睦 子

このセミナーに参加するのは、あまり乗り気では有りませんでした。どうせ講義も討論もつまらないだろうし、知らない人達ばかりで嫌だなあ、などと思いながらの参加でした。しかし、行きの船の中でロータリアンの方が気軽に私達に声を掛けて下さったり、初対面のみなさんとゲームをしたりして、少しずつ緊張感もほぐれました。

いい雰囲気ですスタート出来たおかげで、その後のセミナーも大変素晴らしいものになりました。講義も討論も、そしてこのセミナー自体が「共に生きる」というテーマに沿って行なわれましたが、この3泊4日という短い期

間ですが、大勢の見ず知らずの人と「共に生きる」事が出来たと思えました。生まれも、育ちも年齢も職業も、みんな違う人達が集まり、寝食を共にしたのです。そして大勢の人と友達になれたのです。たかだか、3泊4日と言われるかもしれませんが、なかなか難しい事だと思います。こういうめったに出来ない経験をさせてもらう事が出来て、とても良かったと心から思いました。このセミナーからは多くの事を学べたと思えますが、その学んだ事、経験した事を大切にしたいと思いません。

刑 部 新

セミナーが終わって最初に思ったことは、昔見た白黒映画のタイトル『酒とバラの日々』でした。実際には、『酒と煙の日々』です。なぜなら、毎晩酒を飲みながら夜中の1時、2時まで取り止めのない話を、タバコの煙が充満する部屋でやっていたからです。私は嫌煙家の上にあまり酒も強くない為、毎日が軽い頭痛の連続でした。ロータリーの言う『共生』には嫌煙家は含まれていないことが残念でした。

このことばかりが強く印象に残っているのですが、今よく考えると、このセミナーの1番大きな収穫は、東野さんとおしゃべり出来たことです。3日目の朝、インホメーションセンターの前で偶然に東野さんにお会いしました。その時は、東野さんがこれから聞きに行く講義の講演者だと知らずに、帰国子女グループの引率者だと思いながら30分近くおしゃべりしました。講義前のお忙しい時に私の夢物語に耳をかたむけてくださり、その上でわ

たしの考え足りない点を完璧に補足された上で、例え話として聞かせてくれた色々な話がとても印象ぶかく勉強になりました。東野さんの高い教養と豊富な知識そして強い信念が、短い間の会話からでも容易に感じ取ることができ、自分の平凡さと無教養さを再認識させられました。昔ある人に『人と話すのなら、出来るだけ目上の人と話せ。そうすればおしゃべりだけでも勉強になる。』と言われたことがありましたが、東野さんはこの言葉を再認識させてくれた人です。

さて、このセミナー自体の感想としては講演内容を含めてあまり目新しいものがなく、新しい知識を得る場にはなりませんでしたが、1つ大きな考え違いをしていたことに気がきました。草地さんが言っていた100の乗数です。以前私は、人口爆発が起こっているのは主に発展途上国で、飢餓に瀕しているのも発展途上国なので、彼らが餓死しているのは自然の摂理の一部だと思っていました。しかし、100の乗数を考慮すれば彼らが死ぬべき前に、私たち取りすぎの先進国が節約すべきことに気がきました。そのことが、改めて国際共生を考え直す良ききっかけになりました。

バズセッションの時、具体的な問題を話し合う前に班員全員が『共生』の共通の定義を持つべきだと思い自分なりに考えました。他のほとんどの同班の人達は、午前中の東野さんの講義の影響で、身体障害者との共同地域づくりを共生と考えたらしく、その点を中心に激しい論争を繰り広げていました。

しかし私の考えでは、このセミナーを主催されたロータリーの人たちの言わんとする共生とはもっと深い概念であり、地球規模での異民族、異文化間、そして自然界と人類社会との相互理解による友好的な関係の創造とルール造りの様なものと理解しました。草地さんと東野さんが実体験をもとに話された発展途上国と障害者との交わりは、この共生という言葉のごく一部分の具体例でしかないと思い

ます。

草地さんや東野さんの話ほど説得力はありませんが、私も共生について色々なことを経験しました。知人の勧めと両親の深い理解と助けで2年ちかく Los Angeles に留学していた時に、1番の近親国のはずのアメリカとの共生の難しさを実感しました。私は渡米中にソ連の崩壊、湾岸戦争、ロス暴動、そしてアメリカ大統領選挙をアメリカ国内で体験しました。そして、これらの歴史的な事件が起こる度に周りの人達の反応や意見を聞いて回りました。その結果、同じ出来事でもアメリカ人と日本人とではかなり考えのずれがあることに気がきました。例えば、湾岸戦争中の金だけ払って人は出さない日本の外交方針は、多くのアメリカ人に日本に対する不信感を持たせていました。あるアメリカ人は『大量の日本製輸入品の為に経済危機になっている国の軍隊がペルシャ湾で戦っているのに、なぜペルシャ湾岸の石油の過半数を消費している日本がなにもしないのか？』と私に不満そうに聞いてきました。私個人も、時々日本から伝わってくるニュースの中で写し出される軍国反対の垂れ幕を持って自衛隊の海外派遣に反対する日本人が、異質に感じ初めました。国連軍として組織された国連加盟国の軍隊と一緒にイラクと戦うことを軍国と感じ反対している日本人の感性は、国際化はほど遠いものだと思います。この事で私は、日本が他の国々と共生する為には、もっと世界の中の日本の立場を理解すべきだと痛感しました。

そしてもうひとつ、地域の共生の難しさを再認識する経験を昨年、ロスの暴動の時に行いました。この暴動は、異文化を持つ白人と黒人。そして黒人と韓国人との間で一時的に失われた共生の精神の結果だと思います。暴動中は、知人から止められ暴動の舞台となったサウスセントラル LA に行って肉眼でこの歴史的な事件を見ることは断念しました。しかし、その代わりに暴動の1週間後に放火されたビル

を見に念願のサウスセントラルLAに行きました。その町は、噂以上に汚く危険にみちた町でした。車のドアをロックし、一杯に上げた窓ガラス越しに見た通行人のほとんどは、失業者らしく昼間から働きもせず道端でぶらぶらしながら肉食獣の様なキラキラ光る目をきょろきょろさせていました。この失業者か密入国者の黒人とヒスパニックは、白人とも後から移り住んできた韓国人とも共生できず、いつもトラブルが絶えなかったそうで、ロス暴動も起こるべくして起こったのだと知人が教えてくれました。もし、今は平和な日本も今以上に移民を受け入れ地域の共生が難しくなると同じ様な暴動が起こる可能性があると思うと、ロス暴動を他人ごとの様には思えません。余談ですが、暴動中わたしはサウスセントラルLAから車で半時間ほど東に行った町に住んでいたため、私の町にも黒い煙が流れ込んできました。その煙の中をドライブしながらラジオから流れてきたドアーズの『エンド』という曲を聞いていた時は、車の中が異様な雰囲気につつまれ、いつも使う学校への道が地獄へ向かっているかのような錯覚におちいりました。

この様な体験を含めて、海外生活から3つのことに気付きました。ひとつ目は、日本ではほとんど全ての人が高い教育と同じモラルを持ち、日本人同士は容易に相互理解ができ知らず知らずの間に共生を実践していることです。ふたつ目は、その為でほとんどの日本人は日本の基準から外れている異端的な人達、障害者や外国人そして薬物依存者、あげくの果てには流行のファッションをしていない人達との共生を無意識の内に拒んでいる様な国民性を持っている様に感じます。そして最後の点は、日本人同士が良き理解者である為に、ほとんどの日本人は日本人同士とだけ付き合い、長い間わたしたちは日本的に異質な文化や民族を真剣に理解しようとする努力を怠ってきたと思います。言いかえれば、日本人は、

真の意味をあまり重要視せずに、全ての事柄を日本的に歪めて解釈していると思います。国際的共生の例としては、永い間国際化だ国際的共生だと言っている割には日本の外交力や国際貢献はまだ不十分です。それは、ほとんどの日本人は本当の意味の国際化を理解せず、日本的解釈の国際化だけを実践しているからだと思います。日本では知識人の部類にはいる政治家や外交官も、いざ国連だサミットだに参加すると、この誤った解釈が他の国との間に意見のひずみを生んでしまい、それが誤解の種になるのだと思います。そして地域の共生は、東野さんが講演中強調されていたことがひとつの例です。私達は障害者を知恵が劣った人間という先入観でみて、本当は精神のほんの一部だけに障害があり他はほとんど健全者と変わらないことを理解していない点です。ついでに私事ですが、学生時代いつもテストの成績が悪かった私は、教師を含めた多くの人達がテストの偏差値だけを人間の価値判断の基準に使い、まるで私が出来の悪い人間であるかのように見ることに非常に不快感を感じていました。これも物事の本質を無視し日本的価値判断で起こる人間関係の歪みだと思います。渡米前、私はアメリカ人の教育レベルは低く犯罪も多発しているので日本はすでにアメリカを追い越したと思っていました。しかし世界中の移民を受け入れ英語を母国語にしない生徒が大勢いる教室で出来る内容には限りがあることを知り、それにほとんど教育を受けていない発展途上国の犯罪者までアメリカ市民として受入れたのだからアメリカは尊敬に値しても、軽んじてはいけない国だと感じました。もし、今の政治力と依然強い島国根性のままで日本がアメリカの半分も移民を受け入れれば、日本の偏差値制度は簡単に崩壊し、犯罪率もアメリカ並みに急上昇するはずで

最後になりましたが、共生の勉強はこれからの日本にとって最も勉強すべき分野だと思

います。なぜなら、これから私たち日本人は、日本的な価値判断で異民族や異文化を判断することを止め、相互理解の困難な異民族に対してもっと真剣に理解する努力しなければ、日本は世界的に孤立してしまうと思うからです。日本が世界の中で巨大な生産国となり消費国になってしまった今、日本は昔のような日本的な価値判断で物事を処理し質疑応答するイエスマンや小切手外交では通用しなくなったと思います。これから私たちは、本当の意味の国際共生を理解し実行していかなければ、

外国人に今以上の不信感をもたしてしまい、近い将来 NAFTA や EC 諸国そしてアジア諸国ですら貿易できなくなる可能性もでてくると思います。それと同時に、日本国内でも外国の出稼ぎ労働者や障害者そして薬物依存者や登校拒否児とも共生する努力が今以上に必要になってくると思います。今こそ発展途上国で奉仕している草地さんや障害者と音楽活動している東野さんが実践している様なことを、私たちが理解し実際に取り組む時だと思いました。

舟見友克

ライラに参加してみても一番強く感じたことは、様々な意見や考え、とらえ方があるということです。キャピタイムやバズセッションなどライラに参加している、年齢や立場、現在の状況、性別など自分とは全ったく違った人達と話す機会を与えられ、その色々な人達と話すことによって、ひとつの話題に対する答えや、受け止め方、その話題に対する感想などどれをとっても、自分の意見とは、大なり小なり違っているということです。例えばバズセッションです。5人という少ない人数で、テーマについてはこまかく分けて考えるようにしていき、なるべく話をわかりやすく進めていったつもりでしたが、5人の意見

を反映させながら小さなテーマをひとつにまとめるだけでも苦労したのに、ましてや班であるひとつの意見にまとめるというのは、当然のごとくとても難しい作業でした。つまり、ある1つの目的を持った人達の集りであっても、1つの意見をまとめることは難しく、意見をまとめるには、リーダーである人が必要となり、ある程度の妥協も必要となってくるのではないのでしょうか。そのためにも、リーダー育成のこの場に参加できたことを大変嬉しいことだと思いますし、これからのロータクトや、大学生活の中などで、ライラの経験を生かしていきたいと思っています。

毛利美子

大人になって、社会人になって、今迄の学校の授業では学ぶ機会の少ないであろう“課目”を、そしてチャンスがなければ、通り過ぎてしまいそうな“考える場”を提供してくれたのが、このライラセミナーだと思います。

第1印象は、雰囲気の良い。余島の自然に

も似た様な、スタッフ（顧問、ディーンを始めとする方々）の、笑顔、穏やかさです。

参加するにあたり、講師の方の名前を見て、半ば、楽しみでもありました。と、言うのも、昨年1月に、PHD協会の「保育者の為のスタディツアー」で、フィリピンのネグロス島に参加した事もあり、詳しいお話を草地さ

んから聞けるという事。そして、今の職場（重症心身障害児施設）と、共通している点が多いので何かひとつでも、使えそうなものを学べたらと思った、東野先生の講義。

そして、兵庫県青年洋上大学、神戸 YMC A ではタイ・ワークキャンプで、何度かお会いした事のある今井先生のまとめの講義。

全て、今迄の私は（とにかく、参加してみよう、そうすれば、何か私にも出来る事が分かるはず）と、色々実行してきましたが、それらに伴う「考える時間」を、なかなか得る事が出来なかったので、ライラセミナーを

きっかけとして、もう1ステップ、ジャンプしなくてはと思いました。

そして、キャビンタイムで、砂子療養園（職場）の園生の話をした時に、「もっともっと、そんな話を、みんなに教えてあげて、してあげて!!」と言われました。本当は上手に、皆に、教えてあげたい事もあったのですが、私もまだまだ勉強して成長していかなければ、偉そうな事は言えないなあと思っているので、常に前進あるのみで、色々な分野での学習をしていこうと思っています。

山 口 博 幸

山 口 博 幸

正直言って、このセミナーに参加したきっかけは、職場の上司から半強制的（？）に奨められ、職務として参加した。

また、RYLA のことや、ロータリークラブのことなど、全く予備知識を持たずに参加したため、自分は何のためにここに来たのだろうと思った。

しかし、セミナーが開始されると、みんながすばらしい社会貢献されているのだと知り、自分が今、何をしなければいけないかを考えさせられる機会を与えてもらったことを、大変ありがたく思った。

3泊4日のセミナーを通して、いろいろな人との出会いがあり、夜のキャビンタイムで

語り合うなかで、年齢に関係なく、性別を問わず、みんなが社会を思う気持ちは同じなんだなと思った。

今、職場では、青少年問題を担当しているが、職場が変わっても、この出会いを大切に、地域社会に貢献できるよう、がんばっていきたいと思う。

取り留めのない文章となったが、セミナーに参加した、私の感想といたします。

追伸 感想文の提出が、大変遅くなり、申し訳ありませんでした。また、セミナー期間中、大変お世話になりました、ありがとうございました。



私の住む高松から1時間少々場所なのに、余島へ渡ったのは今回が初めてであった。準備・段取りの都合で3月24日から4泊5日のRYLAセミナーとなったが、信頼し合える人達との出会いにより、学び多きセミナーとなった。

私の役割はカウンセラーであったが、キャビンでのスタート時から、ほとんど疑問や質問を受けることなく最後まで進行した。

しかし、27日のバズセッション仕上げのリミット30分前にルームに入って、一瞬冷汗をかけた。まるで台風か地震でもおそったかのように疲れ果てた姿で気力を失って、根をあげてしまっている様に私には見えた。

一呼吸おいて私は、そうだ、昨夜あれだけ熱心に「共生」というテーマに集中して話し合っていたのだから、最悪、時間切れで書きあげることが出来なくてもフォーラムはできるか………と思い直し、心の動揺を押さえ彼等を信じ切ることにした。この一瞬の動揺と

C班カウンセラー 藤田 進

安堵した気持は今でも印象深く心に残っている。

このようにカウンセラーが指示や指導をほとんど加えなくても自分達のチームをつくり、全員の意見を出し合う若者風のリーダーシップに強い拍手を送りたい。

この若きリーダー達に更に期待をし、任せ、信頼感をもって今後も接して行きたいと私は思っている。

又、草地賢一氏、東野洋子氏の実体験からのエネルギーッシュな話や、今井鎮雄顧問のグローバル的なロータリー精神に敬意を表し、「共に生きる」ことの為に、私のできる何かを見つけ出し実行していきたいと思う。

最後に、このRYLAセミナーを運営・協力して頂いた全ロータリアンに深く感謝をすると共に、今後も末長く継続していくことを心から願うものである。

パートナーの水谷カウンセラー、何かとご指導を頂きありがとうございました。

C班カウンセラー 水谷 淑子

2日目の夜のキャビンタイムでのことです。海外青年協力隊でネパールに行った事がある彼女を中心の討論が進んでいました。活動を通じて知った村人の生活を話し、日本との違いを説明し、ぜひみんなも一緒に考えてほしいと、熱く訴えました。

そんな時、「自分は今、将来の夢を実現する為に大変努力をしている、その勉強も大変なので、他の事を考える余裕がない。」に、キャビン内の空気が変わり、騒然となり、意見が飛び交います。そんな時、私は内心困った事になったなと思っています。「善意の交流の大切さはわかるが一番大事なのは、その国の人が自分で自立する事。その為の協力は

誰れも惜しまない。」又、「私達が個人レベルで出来ることは何なのか。」など真剣な目で、本音で話し合う若い人達を、目の前にし、私は心から拍手を送りました。

豊かな日本で生活をし、まだまだ充分見えない私達と、ネパールで活動に従事した彼女との視野の違いも、たやすく解決できません。

草地先生の、私達の豊かさを、彼等にかえすことが、共生である。

共生は私達の義務なのです、の言葉を胸に雨の余島を後にしました。

今、自分の価値観を変えるよう、努力している毎日です。

名田 至 範

このライラセミナーに参加する前の自分自身の気持ちとしては、3学期も終わりホッとしたところもあったが、クラスのある生徒に対しての指導もうまくいかず、悩みというか教師という立場から逃げ出したい気分でした。

こういう状態で学校長から受講をすすめられ参加した訳ですけど、セミナーに参加し講義を聞き、グループのみんなと話し合い、また、フォーラムでは、班の代表として意見を発表したりしたことで何か自分がひと回り成長したような気がしました。

グループの中に教師希望の学生がいて、彼の教師になりたいという話や態度を見ている

と、自分も教師になる前やなった頃は、自分も彼みたいにもっと燃えていたというか、なりふりかまわず一生懸命やっていたことを思い出し、新学期から気持ちを切り替えがなければならないと思いました。

また、グループのいろいろな職業や立場の違う人達の話聞き、ためになったし、また、大変楽しかったです。

このセミナーに参加して本当によかったと思って帰ることができました。

このセミナーにお世話して下さった方々、本当にありがとうございました。

石井綾子

“こんにちは”という明るいあいさつに始まった3泊4日のセミナーは、余島の自然の中に自分をおいて、今まで知り合う事のなかった方々と出会い、ゆっくりした時を過ごす、私自身を振り返る為にも本当に恵まれた機会であったと思います。

昨日まで何の関わりもない生活を送ってきた見知らぬ者同士が初めて顔を合わせ、何か共通のテーマについて意見を述べていくという事は、無謀な事にさえ思えました。しかし、異なった境遇の中で生きてきて、そしてこれからも自分らしく生きていくために創り上げられようとしている1人1人の人生論のようなものは、最も感受性の大きい私たちの年代で盛んに感化され、磨かれるべきものでしょう。そこで、敢えてこの年代の者が集う事の意義は、決して意見を戦わせることではなく、認めあう、知りあう、というところにある気がします。東野先生の“相手がこう思って

いるんじゃないかな”と試してみることでできるアンテナのようなものから、出会いが始まる、というお言葉に、私はとても共感を覚えました。他人を知り、自分を知ることが私のこのセミナーへ参加した動機であり、大きな目標でした。

全く違う1人1人が1歩ずつ間に歩み寄ってこそ人間なのだというお言葉どうり、貧しい者も裕福な者も、障害を持つ者も持たない者も、男も女も、お互いを知り、思いあうことができるのであれば、それは見返りを期待しない愛によるものなのでしょう。お互いの不幸を許さず、心を重ねあって作られる生活世界と、めまぐるしく変化し多様化する情報化社会のシステム—途方にくれる程つかみどころがなく、自分とは無関係に思ってしまうがちな社会ではあっても、その中で、今の自分、これからの自分に何かを期待しながら、“自分らしさ”を見つめてゆきたいものです。

松本一能

自分は、このライラセミナーに今回初めての参加で多少不安でした。パストガバナーの人やディーンの話の中で知らない単語が多数出てきて何のことか、自分が何をしに、ここにきているのかがわかりませんでした。そして、1日過ぎ、2日過ぎとたってみると言葉ではうまく言えませんが、何となくわかってきました。講義の時、先生が話された、言葉ひとつひとつが、自分には勉強になりました。

これからも、こういう活動があるということを知らない人達に知ってもらい、いっしょになって取り組んでいきたいです。

ガバナーの人、パストガバナーの人、講師の人そして、このセミナーを支える運営委員会の人、ほんとうにありがとうございました。最後に一言、こんなことを言ってしまう。風呂が少し狭かったです。

久 枝 庄 三

ライラセミナーの4日間、とても楽しかった。この楽しさは、友人とバカな話をしている時の楽しさとは全く違ったものでした。今まで自分が深く考えることのないことを知り、考え、今まで自分が考えていたことを人に話し、意見を聞く。まさに共生の第一歩であったと思います。

さて、皆んなといろいろ話すと、どんな問題もそのシステムを変えることが必要と思われれます。では、私達はそのシステムを変える為、何をすべきか。政治を変えるなんて、とても無理です。意識改革、共生をもって学習する。それもできるだけ多くの人が。私達は、そのリーダーにならなければならない。

始めはほんの少しの人数から、あせらず、あわてず、人として思いやりを持って、皆んなの知識を教え合い、意見を交わす。そんな自主学习グループを作ろう。

今回、ライラに参加して強く感じたのは、以上のような内容です。しかし、他にもたくさんの方のことを学び、自らが大きく成長したと感じています。

ライラセミナーが、いつまでも続き、もっと多くのリーダーが生まれることになれば、すばらしい社会、地球を取り戻すことが、必ず出来る。ロータリアンに心から感謝し、なお一層の活動を期待します。

もちろん、自分もやるべきことをやらねば。

宮 永 真 弥

私たち日本人は、アジアの一員でありながら、他のアジアの国々を過去において非常に苦しめた。それを過ぎ去ったこと、と片付けるのは簡単だが、過去の虐待された人々の心が癒されない今日、私にできることは何だろうか、と常々考えていた。草地先生が考えることよりも先に行動なさっていることに大きな衝撃を受けた。南の貧困は、北の国々からきていること、私たちは快適さを求めすぎてはいけないこと、すべて私の考えていたことよりも何倍も深く、進歩した考えだった。

私たち日本人は、羨ましがられる存在であっ

てはいけないと思う。私たちの豊かさの裏側で、私たちのために苦しんでいる人々がいるのなら手を差し伸べなければならない。私にできることが何であるか、次の私の課題である。

このRYLAセミナーでいろんな年齢の、いろんな職業の人と出会い、いろんな考え方があることを学んだ。こういう機会を与えてくれたRYLAセミナーに感謝すると共に、私自身をもっともっと磨かなければならないと痛感している。

宏 林 信 子

就職して約1年…社会の厳しさや人間関係そして大切な友人の死など様々な事があり、

自分自身、これから何をすればいいのか…何をすべきなのかを失いかけていた時にRYL

A セミナー参加のお声をかけていただきました。4日間のスケジュールの中で最も楽しみにしていた講義が東野先生の「地域社会における共生」でした。私自身、身障者施設のボランティアに継続して参加していますので「たまたま障害があるだけで、健常者が“してあげる”というのではなく、その人から与えられる事の方が多い。人間同士のふれあいである。」というお話には全く同感でした。というのは、私がボランティアで介護させていただいた方から詩集をいただいた事があります。その中に

「“風” すごい風が吹いています。風は姿が見えないけれどとても大きな力があります。でも私は姿が見えても何の力もありません。私は春のやさしい風になりたいのです。」私は、この詩を読んだ時、涙があふれてしかたありませんでした。私は自分では自然な形で

ボランティアをしているつもりでしたが、私のどこかに「してあげる」という気持ちをこの方達におしつけていたのかもしれませんが。私はこの方達から、何にもかえられない春のやさしい風をいただくことができました。

このようなエピソードがあったものですから東野先生のお話を聞いてよかったです。

このような機会を与えてくださった、ロータリー、運営委員会、野外活動センターの皆様、そして4日間心ゆくまで語り合った友人に感謝します。

4日間という短い期間でしたが、自分を見つめなおせ精神的に成長する事ができました。RYLA セミナーで学んだ事を忘れず、これからの社会にどんな形であれ貢献していきたいと思っております。

本当に、どうもありがとうございました。

井上洋文

うれしかったことでした。自分と同じくらいの年代の様々な職業についている人たちが、みな、互いに自分の考え方を持っていて、自分の意見を言うことができ、他人の意見を聞くことができる、そういう人たちに出会えたことが今回の最高の収穫だったと思います。それによって、自分自身もより深く、考えることが出来ました。

余島という素晴らしい環境の中で、このように、様々な人に出会い、いろいろな考え方を吸収し、ゆっくり深く考えることのできる環境を用意し、この機会を与えて下さったRYLAを運営して下さい下さった方々に大変感謝します。

そして、この大きな収穫を、自分のこやしにして、これから、たくさんの人たちと、共に生きていきたいと思えます。

余島から帰ってきて、もうすぐ2週間がたとうとしています。行く前には、長いだろうと思っていた4日間が、いってみると1日1日はとても長く感じたのですが、4日間は、あっというまにたっていました。

思い返してみると、草地先生の話では、今まで上っ面だけしかしらなかった、様々なことの中身をいくつか知り、大変おどろきました。東野先生の話を知っていると、知らず知らずのうちに目頭が熱くなり、知らず知らずのうちに、力がわいてくるような気がしました。今井先生の話聞きながら、今の世の中の、正気と狂気の入れかわっているところについて考えていました。

しかし、先生方の話は、大変おもしろく、素晴らしいものばかりだったのですが、それ以上に感じたことは、様々な人との出会いが

島田 浩二

今まで、アジアにおける貧困や環境破壊、また障害者の問題など、テレビや新聞で見聞きすることはあっても、ただなんとなく眺めているという感じであった。しかし RYLA に参加することによって初めて、そういう問題に対して真剣に、話を聞いたり、考えたり、討論することができて大変有意義であった。

また他人事のようにとらえていた問題が、実は自分自身の問題なのだという事に気付き何か行動を起こさなければという意識を持つことができた。しかし具体的に、何をすれば良いのか全然見えず、手さぐり状態の自分が

もどかしい。

でも私には、RYLA で知り逢えた C 班 18 名の仲間ができた。彼らと過した 4 日間は、大変楽しく、また彼らを知ることによって、自分の世界も広がった。すでにボランティア活動を実際に行なっている人もいるようなので、18名の仲間とも連絡を取り合い、具体的な活動を早く起こしたいと思う。

最後に、大変有意義な 4 日間を過ごす機会を与えていただいた、ロータリーや RYLA の関係者の皆様に心より感謝いたします。

本当に、ありがとうございました。

吉田 一朗

余島の恵まれた自然の中、3泊4日のセミナーで新しい友達と出逢い、語り合い、又自分を見つめ直す機会を与えて頂き誠にありがとうございました。

「共に生きる」のテーマについて講義を聞き、討論すると聞いて、私は、人間が生きていく上で大変重要な事ではあるけれども、真剣に考えた事がありませんでした。まして国際社会や地域社会における共生については知識だけで経験もなくほとんど無頓着でしたが、諸先生方の講義と経験豊富な参加者の意見を聞き、自分の狭かった視野が少しでも広がり、色々な考え方がある事を知り「共に生きる」

という事に関心を持つことができました。

しかし、セミナーを終えてから余島で学んだ「共に生きる」という事が、セミナーの時だけの話で終わってしまうのではないかと思います。これはたぶん他の参加者も考えていることでしょう。

私はそのような事にならないためにも、参加者が各自の地域で「共に生きる」事をテーマに話し合い、考える機会を持つことができればいいと思っています。そうすれば「共生」が実現できる社会に少しでも向って行くことでしょう。

藤田 裕

今回の RYLA セミナーに参加して、自分がこれまで、国際援助のことなどについてあまり目を向けずに日々を送ってきたことに気

付かされました。

セミナーとしてこういう機会を与えられ、国際援助活動に真剣に取り組んでおられる方、

障害者と距離をおくことなく共に生活しておられる方から直接お話を聞くことができたこと、そしてそれらについて考えることができたことは大変すばらしいことでした。

余島という自然に囲まれた環境がよかったし、何より普段では会うことのないような人たちとたくさん知り合うことができ、みんなで夜も遅くまでいろいろと話し合ったこともいい思い出になりました。

“共に生きる” ことについて、日常生活では情報は入ってくるものの、なかなか本

気で考えることは少いですが、誰もが本気で考えていかなければならない問題であると思いました。

自分にとってセミナーでのこの4日間は、とても意味のあるものでした。これを機に、“共に生きる” という意識の下で、これから生活していけたらと思います。このセミナーに参加できたことに感謝します。ありがとうございました。

今度、「あぶあぶあ」の公演を見に行こうと思います。

川上克彦

川上克彦

受講のテーマであった『共に生きる』の重要性を次のように理解いたしました。

私共は、つい最近まで、経済立国を目標に競争社会の中で、効率化、便利さ、快適さを追求してきたのですが、根本的に、人間性の本質は、無視されつづけました。例えば、富の中に環境が含まれることもなかった。その根底には、人間と地球は、別物であり、人間は、人間だけでやっていけるという人間の傲慢があった。個性の尊重、人権の確立は、いつもあとまわしになり、20世紀の末、日本を含め、近代文明は、地球、自然との共存、「共に生きる」という1点において行き詰まってしまった。その危機を救済しうるのは、近

代文明を支えてきた競争、対立、力ではなく、共生、調和の原理をあらゆる局面に導入することだ。過去の良き日に戻れということではありません。

また、私自身もそうですが、今を共に生きるための新たな思想を創造する人間になり、また、育成していくことは、重要であります。

私は、RYLA セミナーに参加して、問題に対し取り組んでいくことが、自分の仕事であり役割ということがこのセミナーの答えであります。今後は、もっと研鑽し、セミナーで学んだことを活動において実施していきたいと思います。

D

班



緊張の中、大きな期待をいだいて受講生を迎える時からライラははじまります。いつもながらインフォメーションへの坂を登ってきた若者たちには、「来てみたらいいところだけどこれから一体何がはじまるんだろうか?」という戸惑の様子がみられます。「ライラは参加した者でないとそのよさはわからない。」といわれています。先輩達もロータリアンも口でライラを説明するのは大変むずかしいの

「国際社会における共生」と「地域社会における共生」の講義を受けて後、グループ単位での討論や、全体のまとめを通して、私は頭をかなづちで叩かれたような気がしました。まず、現在に至るまでの関係の歴史を探り、人口と貧困や、消費総量等の具体的な数字を知り、そして私達が奪いすぎた豊かさを振り

D班カウンセラー 林 眞紀

です。いろんな不安をいだきながらも余島まで来て下さった若者に感謝しています。

では皆様にとってライラは如何でしたか。報告書が出来て感想文を読むのがたのしみです。皆様もこの報告書を読みながらライラを思い返して下さい。きっと幸せな気分になれることと思います。皆様のよりよき人生の為にライラが何かお役に立てばと願っています。

高橋 美帆

返って見直し、彼ら地球の南の人達に返していく重要さというより義務と言うべきものを実感しました。

アジアの人々が陥っている絶対的貧困というものは、今日のお昼の食事はまだ見えているが、夕方はどうしよう、というものであって、もし私達の生活が明日からそうなってし

まったら、現在の様な豊かな生活が当たり前の様になってしまっている私達の方が、それらアジアの人々よりも先に衰弱してしまうだろう、という意見も出ました。

関係ないと思いがちな私達の生活が実際に南を貧しくしてしまっているのです。すでに今は一国主義ではなく、共生が義務となっているのです。ただ比較をしてしまうためにう

らやましい、又その逆等の感情が生まれるのであって、自分のうれしいと思う人生は、人のうれしいと思う人生があつてのものであるのと同様、人の幸せの中に自分の幸せがあるのです。それゆえに、自分の持っている力を人の幸せの為に使うことが自立の核ではないのか、そしてつまりそれが共生なのである、それが私自身1番強く共感を覚えた事です。

020217

森田 英樹

いずれも興味深いお話ばかりでした。

この度加古川中央ロータリークラブより推薦をいただきRYLAセミナーに参加できる機会を得ることができました。

私自身ロータリークラブの意味も分からず、このセミナーに参加することに、大変気恥かしく感じておりました。また、全くの初対面である兵庫、四国のメンバーとの研修ゆえ、十分にみんなと打解けて話し合うことができるのかどうか心配でもありました。

しかし、3泊4日を共に過した結果、予想以上に多くの友人を得ることができました。同じ班内にはいろいろな職業の方が集まっており、彼らと夜を徹しての歓談の中、それぞれの仕事を通じての人生観を聞いたことは大きな収穫ではなかったかと思えます。

また、今回のセミナーのテーマであった「共生」を考える中、多方面で活躍されている講師先生のお話を聞くことができました。地球規模の立場から「経済」を通じ共生を実行されている草地先生、障害者と健常者との共生を音楽を通じ実行されている東野先生、

私はその両方の先生のお話の中から「個人と共生との関わり」を常に提言されているように感じました。これは、その後、私の所属するD班のバズセッションの場で「地域社会と共生」をテーマに話し合っていくなか、共生を実現するためには、押し付けのない、個人のモラルの集合が地域を変革させていく要素となりうることを理解するに至った結果からもそうではないかと思えます。私もまた、「公民館」という職場で、地域に於ける共生を多方面から取り組む立場にあると言えるでしょう。これからもこのテーマを積極的に考え、私なりの結果を出したいと思えます。

最後になりましたが私たちD班のカウンセラーとして、何かとお世話いただきました松田さん、林さん、ペイジさん、また今回このような機会を私に与えていただきました加古川中央ロータリークラブの皆様にご心より感謝申し上げます。

020218

野見山 健一

いろいろと「良い感想文」を書こうと思い考えていましたが僕の文章力ではどうも無理なようです。そこで、無礼は承知のうえで

「良かったこと」と「良くなかったこと」を思うままに羅列させていただくことにしました。

※良かったこと……………

- *費用が自己負担でなかった
- *食事がとてもおいしかった
- *余島の環境が穏やかで美しく、心安まった
- *主催者・スタッフの皆さんが一貫して自然に紳士的で、人間としては対等に、年長者としては子や孫(弟、妹?)を見るような目でやさしく接してくれた
- *普段、接触するチャンスの無い人と話すことができ、つながりができた
- *たっぷりお酒を飲んだ
- *「PHD」の活動を知ることができた
- *ロータリーの活動を知ることができた
- *バズセッションでかわいい女の子と一緒になれて、お話ができた

(注) (その娘だけに限らず、バズはかなり良かったと思う)

- *3項目と重複するが砂浜があまりにもきれいで、藻場があまりにも豊かで驚いた
- *精神的にやや疲れ気味だったボランティア活動への励みができた
- *いい思い出ができた

※良くなかったこと……………

- *費用がまったく自己負担でなかった
- *キャビнтаイムの時の人数が多過ぎた
- *眠れなかった

- *ガバナー、パストガバナー、ロータリアンの方とお話をするチャンス、きっかけが無かった
- *ディーンがオールドを持って部屋に来た時には眠ってしまっていてお話ができなかった
- *受講者に「お役人」「学生さん」が多く、排他的な仲良しグループを形成する原因のひとつになっていたのでは……………
- ロータクトの皆さんが積極的に「協調」をはかろうとすればするほど彼等はしらけてしまい、自主性を持つとしなくなる(只々、お酒を飲んで事の成り行きを見ていた自営業が生意気いえませんが)
- *お風呂が小さすぎた

3泊4日にわたり、貴重な時間と費用をおかけくださった主催者・スタッフの皆さん、推薦いただいたロータリアンの方々に心よりお礼申しあげます。現時点ではとても皆様のご期待にそえるような考えも、活動もできない自分ですが、今回、参加させていただいたことでおぼろ気ながら今後の「指針」ができたように思います。

余島での体験を忘れることなく、これからの活動のどこかで仲間に紹介し、実行してゆくつもりです。

北 島 美 和

「自分は幼な過ぎるだけなのかも…。」
最初の夜は落ち込んでしまいました。今まで自分と価値観の違う人と話したことがなかったので、次の日からの3日間が不安でした。難しい言葉を並べ否定的な意見を言う人に反発すら感じていたのです。

しかし講師の方の言葉に同じように感動したり、雑談の中から似ている所を発見してい

くうちに相手の考えを理解し、素直に受けとめることができるようになりました。そして今までの自分は、好き嫌いで物事をとらえ、嫌いな事に対しては、分かろうとさえしなかった事に気付いたのです。セミナーの雰囲気はやわらかくなかったら、自分は元のまま、嫌な気分のまま帰っていたでしょう。

色々な人との出逢いと、自分を見つめ直す

機会を与えて下さったことに感謝します。余島を離れる時に胸にこみ上げてきた物が何だっ

たのか、ゆっくりと考えてみます。

西 剛 司

午前8時30分、定刻9時に少し余裕を持って神戸ポートタワー下に到着した私は、これから始まる3泊4日の心の旅に僅かな期待と多くの不安を持っていた。しかし9時が近づくと共に期待は不安へと完全に变化した。人がいないのである。本当にこの場所でのいかと何度も案内状を確認した。海外でも行くような大きな荷物を持った人を探す。いた1人。おそるおそる側まで忍び寄り様子を窺う。相手も不安な顔をしていた。目が合ったその時出た2人の言葉「あの～ライラ……」この一言で今までの不安は完全に消滅した。まるで旧知の友に会った様に話しまわった。自分でも信じられないくらいだった。そのうち1人また寄って来た「あの～ライラ……」そして気がつくとフェリーの中でまったく見知らぬ仲間と同窓会が催されていたのである。

「ライラセミナー」この会の意図がはっきりしないまま参加したわけだが、答はずでに出ていたのかも知れない。余島の自然の中で

学んだこと、それはレベルの高い講義や、完全燃焼したフォーラムではなかった。確かに講義やフォーラムは新しい知識として頭に入ったと思う。しかし頭で理解する内容はしれていた。それより心を揺さぶり全身を震わせた感動があった。それが心の友との出会いである。酒をくみかわした年令も職業も違う人達との出会い。話せば話す程心に響くものがあった。時間を忘れ、寝食を共にすることがこれ程すばらしいこととは考えてもみななかった。これからの社会の指導者たる云々について語るもよし、職場での悩みや豊富な社会経験を聞いたり、学生のもので完徹でトランプ等もした。全てが価値ある体験になったと今思っている。

講義はレベルが高すぎたが頭に残った言葉がある。「Give and Give」

3泊4日の貴重な体験を与えてくれた人々に感謝する。今度は私が誰かに与える番なのか。

澤 田 ゆかり

ライラセミナーに参加させていただいて本当にありがとうございました。今までの青少年指導者研修会とはちがった精神面の研修ができたように思います。集合場所に行った時は知らない人ばかりでだまって帰ろうかとも思いました。自己紹介の時、社会人の多いことで来なけりゃよかったと思いました。しかし、いろんな仕事、活動をしている様々な人たちの人生観や価値観を聞いて自分の考え

の未熟さがはっきりと分かりました。学生という大人のように大人でない立場であたかも自分が大人であると信じていたことが恥かしく思われました。自分という存在は大切だけれど人の存在も大切なものであると思います。これからはこのセミナーを参考として人とのつながりを大切にしていきたいと思っています。

最後に、3泊4日の長い間本当にありがとうございました。

岡 小百合

余島の自然から学んだこと、講師、ロータリオンの方々から学んだことがたくさんありました。そして何よりキャビンタイム等での友人から学んだことが、これから先、何かにつけて生かされていくだろうと思います。

共に生きていくために自分が果していかななくてはならない役割とは何かを考えさせられました。急な意識改革は無理かもしれないけ

れど、少しずつ少しずつでも意識改革し、人のために自分を犠牲にできる人間になろうと決心しました。

余島で過した4日間は決して忘れることのできない思い出になったと思います。そしてまた、こんなチャンスがあるのならもう1度このセミナーに参加してみたいと思いました。

高 添 有 美

るだけで、今まで出逢った事のないような人達に随分出会うことが出来ました。皆の前で堂々と発言のできる人、しっかりと皆を統率できるだけのリーダーシップを持っている人…。皆がすごく新鮮に見えました。

自分では決してこの様ないい経験をすることはできなかったと思います。かと言って、今すぐ今までの自分が変わることは無いだろうけど、最近何か“やってみよう”という気が少しずつ湧き始めました。最後の日の晩にカウンセラーの方が“このセミナーに参加して本当に良かったと思えてこれからの人生に生かしてほしい。それが今日か明日かそれとも死ぬ間際か分からない…………。”というような事をおっしゃって下さいました。新しい自分が少し芽を出し始めているような気がします。

追伸3泊4日の間、本当にお世話になりました。このような素晴らしい体験をさせて下さった事、忘れません。いつまでもいい思い出として、みんなにお話ししようと思っています。どうもおつかれ様でした。失礼いたします。

“しまった”最初に余島に足を踏み入れた時の正直な気持ちでした。自分にとって、何か今までに経験したことのない大きな波に飲み込まれたようでした。3泊4日、決して楽だったとは思いませんでしたが、一生の中でこれほど貴重な体験はもう無いかもしれません。いつも、自分の気の合った仲間とだけ行動を共にし、自分から知らない世界へと飛び込んでいくことはありませんでした。それだけに、全たく知らない人達と寝食を共にする事に対してかなりの不安がありました。しかし、日一日とたつにつれてその気持ちは小さくなり、もう少し一緒に過ごしてみたいと思うようになりました。

このセミナーに参加して自分にとって一番勉強になったことは、今まで自分が閉じ込もってきた殻を破れば新しい世界が見えてくるということです。私は、人前で意見を言ったり、自分からどんどん知らない人達の輪に入っていくのがどちらかというと苦手です。だからいつも同じようなメンバーでだけ遊んだりします。このセミナーに来て、少し視野を広げ

山本哲也

RYLAに参加して「人の幸福を自分の喜びとし、人の不幸を自分の悲しみとすること」

のできる者が優れた人間であることを再確認しました。それを私の今後の課題にします。

今回「共に生きる」というテーマのため奉仕、ボランティア等について話したり考えたりしましたが、自分なりの答が出せず苦しいセミナーでした。しかし20代前半の若い人達と一緒に楽しく話をしていく中で参考になる意見を多く聞く事が出来ました。

講演は大変難しくついて行けない部分もありましたが印象に残っている言葉が2つあります。1つは「社会の構造による貧困」もう1つは、「能力を10段階に分けて8を基準にすれば7以下は障害者になる」この2つは今

尾崎井千老

まで自分の頭の中になかった事であり答を出せなかったひとつ原因かもしれません。しかしこのような事を今まで真面目に考えた事がなくこのセミナーは大変有意義に感じています。このセミナーで学んだ事を今後仕事や生活の中で生かして行きたいと思っています。

最後になりましたが参加させて下さった浜坂ロータリークラブの方々、余島でお世話になったロータリークラブの方々へお礼を申し上げます。

西岡紀久夫

皆さんお元気ですか、この文章を書こうとすると、あの4日間の出来事が瞳の奥に次々と浮かび上がり、涙でいっぱいになります。私にはそれほど楽しく、感動的でまた印象に残るセミナーでした。

あの初日の緊張からは想像もつかない日々が私を待っていました。

興味深く感動的でもあった各講演。深夜まで自分の恥をさらけだし語りあったキャビンタイム。思いの他自然と安らぎを発見した思索の時間。小グループになり一人一人が思いきり話したバズセッション。予想外の子供達の乱入によって修羅場と化した浴場、本当に貴重な体験のできるプログラムだった。

忘れられないのが強烈な個性派ぞろいの

204号であろう、釣りの名人・元気印の森口さん、体育会を思わせない話術の持ち主の富永さん、フォーラムキャビン・語らいでいつも周囲を沸かせてくれた山村さん、ジャングルの王者・神原くん、君の勇姿を見たかった。その他の班の皆さんや、他の班でも仲良くして下さった方々も忘れることはないと思う。

帰る時になりあと1日、2日……あってくれたらと、帰路につくことが寂しくつらいものに思えた。あ、ガバナー事務所のお姉さん、今度空を飛ばれる時は一報下さい。

本当に年齢も異なり、出身地も異なる人が集まり話合い知り合えたことが今回参加して一番に良かったと思われる。セミナーの意図するところとは違った事を学んだかもしれな

いが本当にいい勉強になった。

ロータリアン並びに推薦して下さった方々

感謝状

なんて楽しいセミナーであったことか。

余島における生活がこれほどまで、自己を真に見つめさせ、自己を発達させることができるものか、この島に一步足をふみ入れるまで、考えてもいない驚きであった。

見知らぬ人と輪となり、酒をくみかわしながら、色々なことを取りとめもなく語りあう、それが、なんと心よいものか改めて知りえた。このためにだけでも、島に来たかいがあった。

余島での生活は、自発的な行動により、自

に深く感謝します。

余 田 隆 之

己学習をしていくプロセスになっているのかセミナーにしては、本当に自由なものであり、セミナーに来たのか、保養に来たのか、一見わからないほど自由な時間をもて、情報交換会や討論会と名目をつけるより、段ちがいなほど、人と討論し意見交換ができたと思う。

このセミナーを開催して下さったロータリアンに感謝しています。そして、できることならまた参加してみたいものです。

感謝状

富 永 貴 幸

色々な人と出会い、3泊4日の間、寝食を共に、そして「共に生きる」について、討論させて頂きました。

高レベルの講義をして頂き、大変勉強になったのですが、私は、バズセッション、キャビンタイムが、最も勉強になりました。

人それぞれが、それぞれの考え方を、素直に意見し、討論するということが、これほどすばらしく、感動的に思えたのは、これが初

めてです。すばらしい機会を与えて頂き、ありがとうございます。そしてすばらしい友と出会うことが出来ました。これからの私の人生に於いて、頼れる仲間が出来ました。

私は、この余島で学んだ事を、家族に、そして地域の人々に伝え、「共に生きる」を少しでも実現していきたいと考えています。本当にありがとうございました。

第15回RYLAセミナー運営委員会

- 〔顧問〕 梶浦 暲 一 (第2670地区 P.G. 松山)
今井 鎮 雄 (第2680地区 P.G. 神戸西)
- 〔アドバイザー〕 R.I. 第2680地区 P.G. 深川 純 一 (伊丹)
元ディーン 安 平 和 彦 (姫路)
- 〔ディーン〕 大 島 秀 夫 (加古川中央)
- 〔副ディーン〕 菊 澤 建 明 (伊予)

R.I. 第2670地区

- | | |
|---------------|---------------|
| 三 矢 昌 洋 (高松) | 吉 本 功 (高知東) |
| 谷 口 修 平 (松山西) | 今 上 茂 樹 (小豆島) |
| 津 島 直 也 (坂出) | 栢 野 博 (坂出) |
| 元 廣 武 志 (徳島北) | |

R.I. 第2680地区

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 秋 山 紀 史 (神崎) | 井 奥 寛 泰 (姫路南) |
| 大 島 秀 夫 (加古川中央) | 三 木 明 (姫路) |
| 三 木 且 視 (龍野) | 富 田 義 規 (加古川平成) |
| 小 池 弘 三 (神戸須磨北) | 美 田 和 茂 (神戸東灘) |
| 二 宮 英 喜 (姫路) | |

カウンセラー

両地区のロータリアン及びロータリアン夫人

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 松 田 芳 明 (高知) | 井 奥 寛 泰 (姫路南) |
| 藤 田 進 (高松) | 小 池 弘 三 (神戸須磨北) |
| 菊 澤 重 子 (伊予RC会員夫人) | 水 谷 淑 子 (神戸垂水RC 会員夫人) |
| 橋 本 知 詠子 (橋本憲佳P.G.夫人) | 林 真 紀 (神戸須磨RC 会員夫人) |

平成5年3月25日～28日

主 催 国際ロータリー第2670地区
国際ロータリー第2680地区
RYLA運営委員会

開催地 神戸YMCA余島野外活動センター